熊本県文化財調査報告第 266 集

The Hanaokayama・Mannichiyama Site

花岡山・万日山遺跡群

The Shinbasyaku Site

新馬借遺跡

The Kitajima Site

北島遺跡群

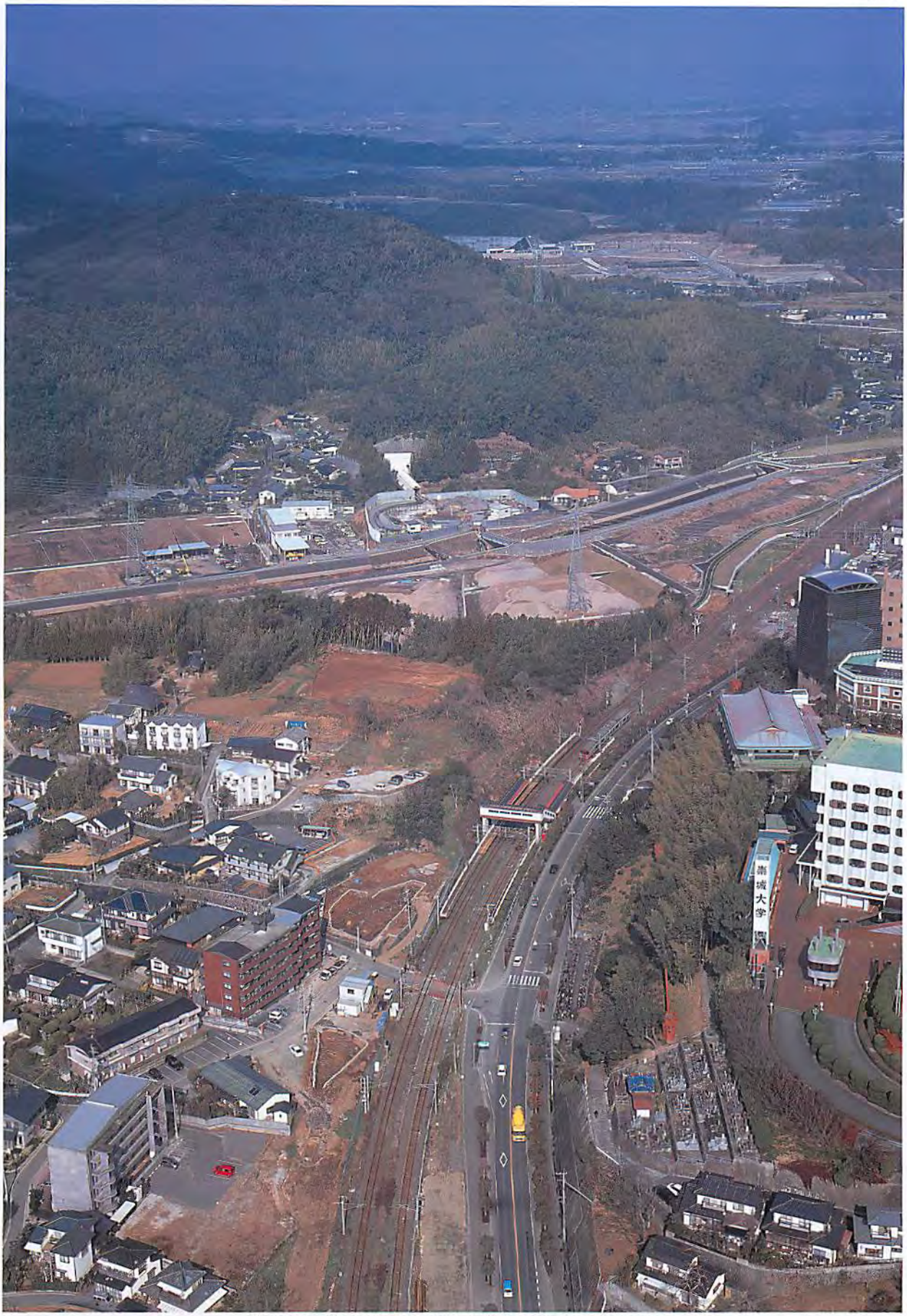
The Manrakuji deguchi Site

万楽寺出口遺跡

— 九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 —

2010

熊本県教育委員会



北島遺跡群より井芹川、植木台地方面を望む（南より）

万楽寺出口遺跡より西谷川、金峰山東麓丘陵を望む（北より）

新馬借遺跡調査区出土遺物—①

新馬借遺跡調査区出土遺物（土製品）—②

小塚トンネル熊本駅側坑口試掘調査時出土遺物（表）

花岡山・万日山遺跡群
新馬借遺跡
北島遺跡群
万楽寺出口遺跡

— 九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 —

２０１０
熊本県教育委員会

序　文

本書は、九州新幹線建設工事に伴い埋蔵文化財発掘調査を実施した、熊本県熊本市内に所在する「花岡山・万日山遺跡群、新馬借遺跡、北島遺跡群、万楽寺出口遺跡」の4遺跡について報告するものです。

今回報告する遺跡は、熊本市北部域に位置し、熊本市内を南北に貫流する井芹川流域に広がる遺跡です。

また、井芹川流域には釜尾古墳等、熊本県内に多く残される装飾古墳が分布するなど古くから多くの文化財が所在しています。

このたび、このような歴史的背景を有し文化が育まれてきた熊本県北部域に、九州新幹線鹿児島ルート計画が策定され、平成23年3月の開業に向け建設工事が進められてきました。

本書はこのようななかで、熊本市内に所在する「花岡山・万日山遺跡群、新馬借遺跡、北島遺跡群、万楽寺出口遺跡」の調査成果を整理・報告したものです。

本書が学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化向上の一助として御活用いただけると幸いです。

最後に、埋蔵文化財発掘調査に御理解、御協力をいただいた玉名市の皆様を始め、熊本市教育委員会、事業主体である独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 鉄道建設本部 九州新幹線建設局に対し、心より感謝申しあげます。

平成23年3月31日

熊本県教育長　山本　隆生

花岡山・万日山遺跡群　新馬借遺跡
北島遺跡群　万楽寺出口遺跡

— 九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

目　次

第１章　序言…… 1
　1　調査の経緯 …… 1
　2　調査組織 …… 3
第２章　調査…… 5
　1　調査地域…… 5
　　(1) 遺跡の位置　　(2) 歴史的環境及び既往の調査
　　(3) 測量　　(4) その他
　2　調査日誌抄 …… 11
第３章　各遺跡の報告 …… 12
　1　花岡山・万日山遺跡群 …… 12
　　(1) 遺跡の立地と地形、既往の調査　(2) 遺構各説
　　(3) まとめ
　2　新馬借遺跡 …… 18
　　(1) 遺跡の立地と地形、既往の調査　(2) 遺構各説
　　(3) まとめ
　3　北島遺跡群 …… 21
　　(1) 遺跡の概要　　(2) 遺構各説
　　(3) まとめ
　4　万楽寺出口遺跡 …… 40
　　(1) 遺跡の立地と地形、既往の調査　(2) 遺構各説
　　(3) まとめ
　5　各遺跡の出土遺物 …… 45
　　遺物実測図 …… 46
　　遺物観察表 …… 60
写真図版
報告書抄録
奥付

挿図目次 （Fig）

Fig.1　熊本県域における地形表記と九州新幹線により発掘調査を実施した遺跡
Fig.2　各遺跡周辺地図
Fig.3　万楽寺出口遺跡周辺地図
Fig.4　花岡山・万日山遺跡群、新馬借遺跡周辺遺跡分布図（S=1/5,000）
Fig.5　花岡山・万日山遺跡群 1 区～ 6 区座標変換点
Fig.6　花岡山・万日山遺跡群 1 区遺構配置図
Fig.7　花岡山・万日山遺跡群 1 区溝 SD001、SD002・SD003 実測図
Fig.8　花岡山・万日山遺跡群 6 区遺構配置図
Fig.9　新馬借遺跡遺構配置図、溝 SD001・道路状遺構 SF001 実測図
Fig.10　新馬借遺跡柵列 SA001・溝 SD002 実測図
Fig.11　北島遺跡群周辺遺跡分布図（S ＝ 1/5,000）
Fig.12　北島遺跡群調査区配置図
Fig.13　北島遺跡群 1 区遺構配置図
Fig.14　北島遺跡群 1 区掘立柱建物 SB001・SB002 実測図
Fig.15　北島遺跡群 1 区掘立柱建物 SB003・SB004 実測図
Fig.16　北島遺跡群 1 区掘立柱建物 SB005 実測図
Fig.17　北島遺跡群 1 区竪穴建物 SI002・SI003 実測図
Fig.18　北島遺跡群 1 区竪穴建物 SI004・SI005 実測図
Fig.19　北島遺跡群 1 区竪穴建物 SI006・SI011 実測図
Fig.20　北島遺跡群 1 区竪穴建物 SI007 ～ SI010・SI012 実測図
Fig.21　北島遺跡群 1 区竪穴建物 SI013・SI014・SI017 実測図
Fig.22　北島遺跡群 1 区竪穴建物 SI015・SI016、SI018・SI019 実測図
Fig.23　北島遺跡群 1 区墓 ST001・ST002・ST003 実測図
Fig.24　北島遺跡群 2 区遺構配置図・溝 SD001 ～ SD003 断面図
Fig.25　北島遺跡群 2 区竪穴建物 SI001 ～ SI003 実測図
Fig.26　北島遺跡群 2 区土坑 SK001 実測図
Fig.27　北島遺跡群 1 区遺構変遷図
Fig.28　北島遺跡群 3 区遺構配置図
Fig.29　万楽寺出口遺跡周辺遺跡分布図（S ＝ 1/5,000）
Fig.30　万楽寺出口遺跡遺構配置図
Fig.31　万楽寺出口遺跡竪穴建物 SI001 実測図
Fig.32　万楽寺出口遺跡竪穴建物 SI002 ～ SI007 実測図
Fig.33　万楽寺出口遺跡掘立柱建物 SB001 実測図
Fig.34　花岡山・万日山遺跡群調査区出土遺物実測図
Fig.35　新馬借遺跡調査区出土遺物実測図－①
Fig.36　新馬借遺跡調査区出土遺物実測図－②
Fig.37　新馬借遺跡調査区出土遺物実測図－③
Fig.38　北島遺跡群 1 区墓 ST001（1.2）・ST002（3）出土遺物実測図
Fig.39　北島遺跡群 2 区溝 SD001（4.6）・土坑 SK001（7.8）・調査区内（5.9）出土遺物実測図
Fig.40　万楽寺出口遺跡竪穴建物 SI003（1.2）・SI004（4 ～ 9）・SI005（3）・SI007（10）出土遺物実測図
Fig.41　万楽寺出口遺跡調査区出土遺物実測図－①
Fig.42　万楽寺出口遺跡調査区出土遺物実測図－②
Fig.43　万楽寺出口遺跡調査区出土遺物実測図－③
Fig.44　万楽寺出口遺跡調査区出土遺物実測図－④
Fig.45　万楽寺出口遺跡調査区出土遺物実測図（石製品）－①
Fig.46　万楽寺出口遺跡調査区出土遺物実測図（石製品）－②
Fig.47　万楽寺出口遺跡調査区出土遺物実測図（石製品）－③

表目次（Tab）

Tab.1　九州新幹線新八代－博多間建設工事に伴う熊本市地区埋蔵文化財発掘調査一覧（県調査分）
Tab.2　花岡山・万日山遺跡群、新馬借遺跡、北島遺跡群、万楽寺出口遺跡の基準点成果
Tab.3　遺跡地名表－①
Tab.4　遺跡地名表－②
Tab.5　花岡山、万日山遺跡群出土遺物観察表
Tab.6　新馬借遺跡出土遺物観察表
Tab.7　北島遺跡群出土遺物観察表
Tab.8　万楽寺出口遺跡出土遺物観察表
Tab.9　万楽寺出口遺跡出土遺物観察表（石製品）

写真目次（PL）

PL.1　北島遺跡群より井芹川、植木台地方面を望む（南より）
PL.2　万楽寺出口遺跡より西谷川、金峰山東麓丘陵を望む（北より）
PL.3　新馬借遺跡調査区出土遺物－①
PL.4　新馬借遺跡調査区出土遺物（土製品）－②
PL.5　小塚トンネル熊本駅坑口試掘調査時出土遺物（表）
PL.6　1. 花岡山・万日山遺跡群 1 区完掘状況
　　2. 花岡山・万日山遺跡群 6 区完掘状況
PL.7　北島遺跡群より井芹川、植木台地方面を望む（南より）
PL.8　1. 北島遺跡群 1 区中世面完掘状況
　　2. 北島遺跡群 1 区掘立柱建物 SB001 完掘状況
PL.9　万楽寺出口遺跡より西谷川、金峰山東麓丘陵を望む（北より）
PL.10　1. 万楽寺出口遺跡調査区全景（北より）
　　2. 万楽寺出口遺跡調査区全景（東より）
PL.11　花岡山・万日山遺跡群調査区出土遺物
PL.12　新馬借遺跡調査区出土遺物－①
PL.13　新馬借遺跡調査区出土遺物－②
PL.14　北島遺跡群 1 区・2 区出土遺物
PL.15　小塚トンネル熊本駅側坑口試掘調査時出土遺物（表）
PL.16　小塚トンネル熊本駅側坑口試掘調査時出土遺物（裏）
PL.17　1, 2. 3. 万楽寺出口遺跡竪穴建物 SI003 ～ 005・007 出土遺物
　　4. 5. 万楽寺出口遺跡調査区出土遺物
PL.18　万楽寺出口遺跡調査区出土遺物（石製品）

花岡山・万日山遺跡群　新馬借遺跡
北島遺跡群　万楽寺出口遺跡

― 九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 ―

第1章　序言

本書は、熊本県熊本市横手二丁目から同市太郎迫町間に所在する標記遺跡について、熊本県教育委員会が2004年度から2007年度まで実施した発掘調査をとりまとめたものである。熊本市域の埋蔵文化財はすべて熊本市教育委員会により把握、周知されているが、本事業の工事に先立ち随時予備調査を実施し、新発見の埋蔵文化財の確認作業に努めるとともに、工事中の不時発見による事業全体の遅滞を招かないように留意し大規模事業への対応をおこなった。

今回調査対象となった遺跡は、新幹線開業に伴い設置された新熊本駅北側から県北へ向かい、熊本市植木町（旧.鹿本郡植木町）との境に位置する太郎迫町までの区間に所在する遺跡である。基本的には、現在の九州旅客鉄道株式会社（以下、「JR九州」という。）の営業線西側にあたるが、万楽寺出口遺跡のみは新田原坂トンネル設置に伴い、大きく在来線路線を外れる。

今回、各遺跡の報告をおこなうにあたり、遺跡の立地、年代等から花岡山・万日山遺跡群、新馬借遺跡をひとくくりとし、北島遺跡群、万楽寺出口遺跡をそれぞれ報告する。

1　調査の経緯

本書で報告する4遺跡は、先にも述べたが熊本県遺跡地図、熊本市遺跡地図において周知されている遺跡である。九州新幹線鹿児島ルートは昭和48年11月13日に整備計画の決定及び建設の指示がなされた後、昭和61年8月29日に工事実施認可申請がなされたが、その後の経済情勢や社会情勢の変化に伴い、平成3年8月22日に先行して八代-西鹿児島間について工事実施計画が認可され、同年9月7日に起工した。その後、平成10年3月12日に船小屋-西鹿児島間の工事実施計画が認可され、同年6月2日に博多-船小屋間が起工している。現在、平成16年3月13日の新八代-鹿児島中央間の部分開業を経て、博多-新八代間について平成23年3月12日に全線開業を迎えることとなった。

先行して開業を迎えることとなった新八代以南の発掘調査が最盛期を迎えていた平成13年から平成14年にかけて独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 鉄道建設本部九州新幹線建設局（以下、「鉄道・運輸機構」という。）の依頼を受けて、熊本市域における埋蔵文化財の予備調査を実施した。

鉄道・運輸機構から示された事業計画によると、おおよそ熊本市内ではJR線に隣接し、その後熊本市北島（JR崇城大学前駅付近）を境に直線路線を取る新幹線は在来線を外れ、県北の丘陵地帯をトンネルで抜けることとなっていた。そこで、熊本市内における路線予定地とトンネル坑口付近を中心に対応をした。

その結果、新熊本駅北側から事業対応した範囲内で4か所の埋蔵文化財包蔵地を確認し、鉄道・運輸機構と保存協議を実施した。しかし、同事業が路線変更に対応できる事業ではないことから、記録・保存をやむなしとの判断にいたり、協議はどのタイミングで発掘調査に着手するかへと移った。

No.	遺跡名	所在地	博多駅からの新幹線距離程	調査面積	調査期間	調査員名	遺跡の年代	主な遺構等	報告書
1	下江中島遺跡	熊本市富合町古閑 1287-1 ほか 5 筆	107km20m ～ 107km240m	7,107.49㎡	H18.12.4 ～ H19.5.31	長谷部善一 吉田徹也 早田利宏 手柴智晴 園田恭子	古墳	自然流路、堰 土坑	未
							古代	掘立柱建物 自然流路、堰	
2	川尻外城遺跡	熊本市川尻 3 丁目 831 他 6 筆	103km900m ～ 104km60m	1,756.91㎡	H18.9.20 ～ H19.3.30	坂口圭太郎 多賀晴司 松森由美 吉留　広	中世	—	未
							近世		
3	上ノ郷遺跡 （旧．熊本平野条里跡）	熊本市島町 1 丁目 304-1 他 5 筆	100km760m ～ 100km880m	2,000㎡	H15.5.21 ～ H16.1.31	今村和徳 和田敏郎 宇田員将 横田光智	弥生中期	甕棺 12 基 土坑墓 6 基	①
							弥生中期	竪穴建物 15 軒	
							古代	竪穴建物 2 軒 土坑 3 基	
4	八島遺跡	熊本市蓮台寺 4 丁目 132-3 他 11 筆	99km400m ～ 99km840m	3,800㎡	H15.6.5 ～ H15.10.31	坂口圭太郎 坂本亜矢子	弥生後期	竪穴建物 （内向花紋鏡 2 面）	未
							古代	土師器、須恵器	
		熊本市蓮台寺 4 丁目 578-8	99km500m	250㎡	H16.2.17 ～ H16.3.31		中世	—	
5	二本木遺跡群 （田崎地区）	熊本市田崎 1 丁目 117 番の 1	連立区間	700㎡	H8.1.29 ～ H8.3.25	帆足俊文	縄文	溝	②
							弥生	柱穴	
6	二本木遺跡群 （田崎地区）	熊本市田崎 1 丁目	連立区間	3,138.42㎡	H15.11.27 ～ H16.3.31	宮崎敬士 福永雅美	古代	竪穴建物、井戸、水田遺構、土坑、溝	未
7	二本木遺跡群 （田崎地区）	熊本市田崎 1 丁目	98km980m ～ 99km240m	2,300㎡	H17.11.11 ～ H18.8.31	坂口圭太郎 尾方圭子 多賀晴司	弥生	竪穴建物、掘立柱建物 溝状遺構　ほか	未
							古墳	—	
							古代	掘立柱建物　ほか	
8	二本木遺跡群 （田崎市道切り替え）	熊本市田崎 1 丁目	—	48㎡	H19.5.7 ～ H19.6.6	松森由美 水上正孝	弥生後期	—	未
							古代	—	
9	二本木遺跡群 （春日地区） 第 6 次調査	熊本市春日 3 丁目 1015 番地	98km40m ～ 97km280m	12,700㎡	H17.11.1 ～ H18.12.26	長谷部善一 吉田徹也 早田利宏 園田恭子	古代	竪穴建物、掘立柱建物 土坑墓、井戸	未
							中世	居館跡	
							近世	旧．熊本駅遺構	
10	二本木遺跡群 （春日地区） 第 11 次調査	熊本市春日 3 丁目	—	200㎡	H22.7.20 ～ H22.8.1	長谷部善一	古代	整地層、柱穴	
11	花岡山・万日山遺跡群	熊本市横手 2 丁目 1183-21 ほか 8 筆	97km220m ～ 97km280m	3,133.54㎡	H17.1.21 ～ H18.12.18	坂口圭太郎 遠山　宏	古代	土坑	未
12	新馬借遺跡	熊本市横手 1 丁目 1142 番地ほか 6 筆	96km940m ～ 96km970m	598.83㎡	H18.5.30 ～ H18.6.30 H20.1.4 ～ H20.1.31	坂口圭太郎 遠山　宏 檀　佳克	中世	道路状遺構、土坑	未
13	北島遺跡群	熊本市池田 4 丁目 519 ほか 11 筆	93km230m ～ 93km480m	3,450㎡	H18.6.15 ～ H19.2.28	今村和徳 横田光智 遠山　宏	弥生	竪穴建物、甕棺ほか	未
							古代	柱穴、土坑ほか	
14	万楽寺出口遺跡	熊本市太郎迫町 474-2 ほか 2 筆	89km440m	964.52㎡	H19.5.1 ～ H19.10.30	坂口圭太郎 檀　佳克	縄文晩期	竪穴建物、土坑	未
							古代	掘立柱建物、溝、道路状遺構	

熊本市内新幹線関連刊行報告書一覧

①熊本県教育委員会『上ノ郷遺跡』熊本県文化財調査第 239 集　2007

②熊本県教育委員会『二本木遺跡群』熊本県文化財調査第 174 集　1999

Tab.1　九州新幹線新八代 - 博多間建設工事に伴う熊本市地区埋蔵文化財発掘調査一覧（県調査分）

2　調査組織

今回報告する調査は熊本県教育庁文化課で実施したものである。以下、調査実施年度及び整理報告年度の調査責任者、担当者を掲げるとともに調査協力機関・協力者を列記する。(*は調査非常勤職員、**は整理担当非常勤職員)

発掘調査

【2005年（平成17年度)】

調査責任者　文化課長　梶野英二

調査総括　　課長補佐　倉岡　博

調査指導　　課長補佐（文化財調査第一係担当）高木正文

調査担当　　参事　坂口圭太郎　尾方圭子　主任主事 松森由美　多賀晴司*　遠山　宏*

【2006年（平成18年度)】

調査責任者　文化課長　梶野英二

調査総括　　課長補佐　江本　直

調査指導　　課長補佐（文化財調査第一係担当）高木正文

調査担当者　参事 坂口圭太郎　文化財保護主事 今村和徳　主事 檀　佳克（任期付職員）

　　遠山　宏*　横田光智*

【2007年（平成19年度)】

調査責任者　文化課長　梶野英二

調査総括　　課長補佐　江本　直

調査指導　　課長補佐（文化財第一係担当）高木正文

調査担当者　参事 坂口圭太郎　檀　佳克（任期付職員）

整理業務

【2009年（平成21年度)】

整理責任者　文化課長　米岡正治

整理総括　　課長補佐　木崎康弘

整理指導　　文化財調査第一係長　村崎孝宏

整理担当者　参事　長谷部善一　稲葉貴子**　唐木ひとみ**

【2010年（平成22年度)】

整理責任者　文化課長　小田信也

整理総括　　課長補佐　木崎康弘

整理指導　　文化財調査第一係長　村崎孝宏、文化財資料室長　坂田和弘

整理担当者　参事　長谷部善一　稲葉貴子**　唐木ひとみ**

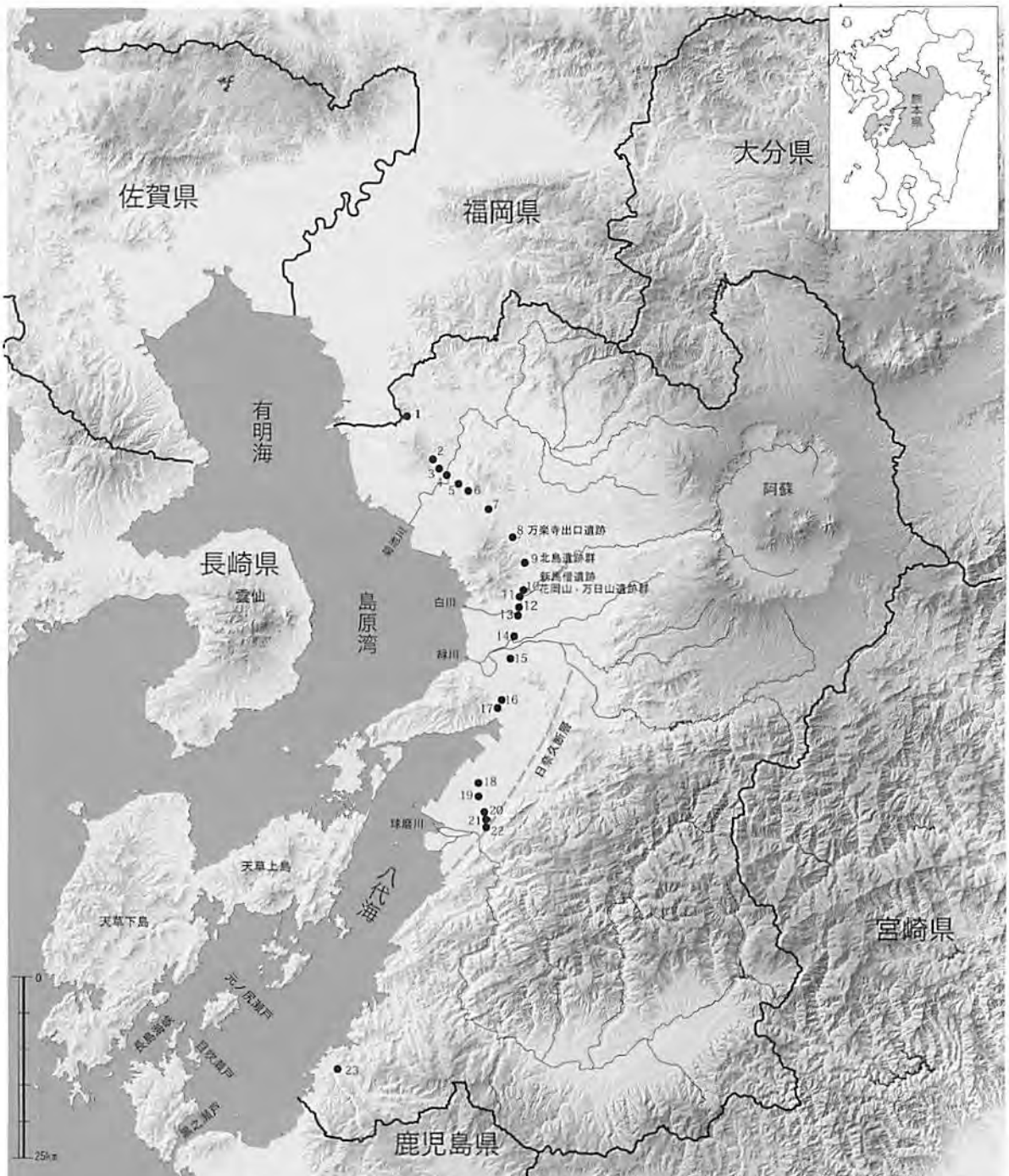
調査指導・助言及び調査・整理協力者

熊本市教育委員会　植木町教育委員会　玉名市教育委員会　熊本県立装飾古墳館

中原幹彦　網田龍生　美濃口雅朗　竹田宏司　赤星雄一　稲津暢洋　原田範昭　金田一精　松村真紀子
林田和人　山下宗親　岩谷史記　師富国博　増田直人　荒木隆宏

整理業務に関する業務委託先
出土遺物一次整理業務　図版版下作成（デジタルトレース）業務
埋蔵文化財サポートシステム株式会社

報告書掲載用写真図版作成、版下作製業務
写測エンジニアリング株式会社



No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	長山前田遺跡	11	二本木遺跡群（春日、田崎地区）	21	西片園田遺跡
2	小園遺跡	12	八島町遺跡		西片稲村遺跡
3	西屋敷遺跡		熊本平野条里跡		中片小路遺跡
4	両迫間日渡遺跡	13	上ノ郷遺跡	22	宮地年神遺跡
5	玉名平野条里跡（古閑前地区）	14	川尻下城遺跡		キリシタン寺院跡
	太郎丸遺跡	15	下江中島遺跡		宮地池尻遺跡
	祭田下遺跡	16	小曽部西園遺跡		宮地小畑遺跡
	瀬萩遺跡		南請遺跡		宮地観行寺遺跡
6	稲佐津留遺跡	17	高良柳迫遺跡		古麓城下遺跡
7	西安寺遺跡	18	四百町開		古麓能寺遺跡
8	万楽寺出口遺跡	19	高田手永堤防		古麓城跡
9	北島遺跡群・北島北遺跡	20	島田遺跡	23	長野遺跡
10	新馬借遺跡		上日置女夫木遺跡		
	花岡山・万日山遺跡群		西片百田遺跡		

Fig.1　熊本県域における地形表記と九州新幹線により発掘調査を実施した遺跡

第2章　調査

1　調査地域

（1）　遺跡の位置

本稿で扱う遺跡は熊本市北西部に位置する金峰山東麓に広がる凝灰岩性台地上に位置する万楽寺出口遺跡、北島遺跡群、花岡山北東麓に位置する新馬借遺跡、花岡山・万日山遺跡群とに大別される。これら一連の遺跡は近くに井芹川及びその支流が西流し、遺跡を形成する一因をなす。

万楽寺出口遺跡は、今回調査を実施したなかで最も北に位置する遺跡である。遺跡は凝灰岩を基底に持つ植木台地上の縁辺部に位置し、西側で西谷川を挟み金峰山系の地質へと変わる地形上に立地する。西谷川を挟み金峰山側は急激な崖面を形成する。北島遺跡も凝灰岩台地の丘陵上に位置する。沖積地に張り出す丘陵周辺は井芹川による河川堆積物が沖積地を形成し、独立した丘陵を呈する。新馬借遺跡、花岡山・万日山遺跡群は井芹川の流域に所在する。井芹川は、熊本城が築城された際に一部河道を変え、外堀として利用された経緯もある。よって、現在も遺跡周辺を概観する際に河川前面に位置する遺跡と言う感じを覚えるが、本来は花岡山東麓に位置する緩斜面から平地にかけて形成された遺跡である。

（2）歴史的環境及び既往の調査

万楽寺出口遺跡[1]は、遺跡の位置でも触れたが、丘陵上に位置し西谷川を望む台地縁辺部にあたることから、縄文晩期の遺跡である山海道遺跡、太郎迫遺跡[2]とに隣接する遺跡である。遺跡本体は、これまでに農政事業に伴い 1994 年から 1995 年にかけて県により発掘調査が実施され、弥生時代中期を中心とする遺跡が確認されている。今回の調査の結果、縄文晩期と古代の遺構が検出されたことから、広く台地上の遺跡の広がりを見て、本来は縄文期の遺跡の広がりとして捉え、太郎迫遺跡の範疇と考えることが妥当であると思われる。

北島遺跡群は、調査を実施した１区から２区にかけて、中世に「北島城[3]」が置かれていたとされている。現在も残る調査区西側の神社境内には、かつて天文年間の年号を刻む板碑が数多く残っていたと熊本市史に報告がされている。詳細な年代等は分かっていない。新馬借遺跡は、一新小学校改築工事の際に古代の土器が出土したことで知られた遺跡である。その後は周辺の確認調査でも詳細は分からない部分もあったが、今回の事業に伴い僅かながら遺跡の性格及び広がりが確認された遺跡である。熊本城が築かれた近世以降は、街道に面した町屋や寺院の一角として存在していたものと考えられる。

花岡山・万日山遺跡群は、熊本駅西側に広がる花岡山、万日山周辺に広がる遺跡群を総称して呼称されている遺跡である。遺跡群の中には花岡山箱式石棺、万日古墳、万日山東古墳、万日山山頂古墳、妙解寺跡が含まれる。万日山古墳群と称されるうちの一つである万日古墳は、石室の構造、出土遺物から７世紀前半に比定される古墳時代終末期古墳と見られる。全長 12.3m の玄武岩製の横穴式石室は、左右に石屋形を設け、奥壁に刳抜式家形石棺が設置される。また本遺跡は、同事業により熊本市教育委員会でも発掘調査が実施されており、智照院細川家墓所で、現在の妙解寺の東隣にあたる妙解寺は、細川家３代忠利追悼のために寛永 18 年に創建されている。智照院は寛文４年に創建され、調査が実施された墓所は 17 世紀中頃から 18 世紀前半に建てられたものと報告[4]がされている。

1　熊本県教育委員会『万楽寺出口遺跡・山海道遺跡』熊本県文化財調査報告第 185 集　1999

2　熊本県教育委員会『太郎迫遺跡・妙見遺跡』熊本県文化財調査報告第 186 集　1999

3　『熊本市史』史料編第一巻　考古資料

4　熊本市教育委員会『智照院細川家墓所』・花岡山・万日山遺跡群第１次調査区発掘調査報告書　2008

(3) 測量

花岡山・万日山遺跡群、新馬借遺跡、北島遺跡群、万楽寺出口遺跡の発掘調査を開始するにあたっては、事前に基準点測量と水準点測量を実施した。基準点は本調査の契機となった九州新幹線工事に伴い、鉄道・運輸機構が設置した国土座標系Ⅱ系に基づく日本測地系により設置している。

2002年（平成14年）4月1日からの改正測量法の施行に伴い、日本測地系から世界測地系へ移行することとなったが、本事業における基準点が日本測地系となっていることから、熊本県内における埋蔵文化財発掘調査で設置する基準点はすべて日本測地系に基づいて設置している。なお、世界測地との整合をとるために遺跡調査区内の杭の数値を日本測地、世界測地でそれぞれ示す。

項目 / 地名	日本測地系		世界測地系	
	X座標	Y座標	X座標	Y座標
花岡山・万日山1区	-23110	-28595	-22737.7694	-28816.0246
花岡山・万日山2区	-23130	-28617	-22757.7696	-28838.0245
花岡山・万日山3区	-23145	-28625	-22772.7696	-28846.0244
花岡山・万日山4区	-23155	-28636	-22782.7696	-28857.0242
花岡山・万日山5区	-23164	-28627	-22791.7696	-28848.0243
花岡山・万日山6区	-22830	-28490	-22457.7671	-28711.0255
新馬借	-22525	-28425	-22152.7640	-28646.0259
北島1区	-19020	-28420	-18647.6929	-28640.9903
北島2区	-19140	-28360	-18767.6971	-28580.9921
北島3区	-19200	-28337	-18827.6985	-28557.9930
万楽寺出口	-15580	-30065	-15207.6524	-30285.9819

Tab.2　花岡山・万日山遺跡群、新馬借遺跡、北島遺跡群、万楽寺出口遺跡の基準点成果

(4) その他

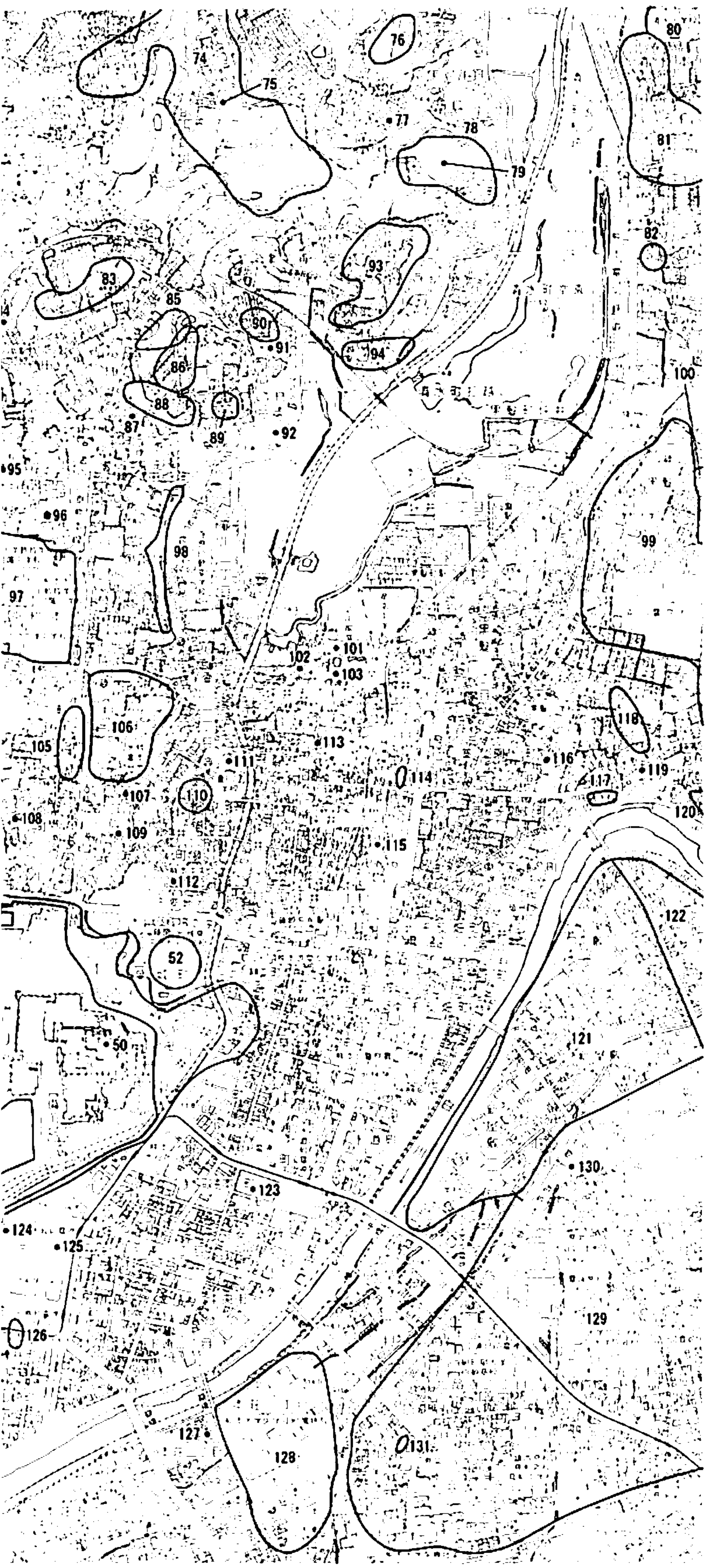
発掘した遺構は、遺構の種別を示す以下の番号と、一連の数字の組み合わせにより表記した。

SA（塀、柵列） SB（建物） SC（回廊） SD（溝） SE（井戸） SF（道路） SG（池） SI（竪穴建物）
SK（土坑） SP（柱穴） SS（足場） ST（墓） SX（その他、不明遺構）

※本書では使用していない記号も含む。

遺物観察表に記している色調については「新版標準土色帖」(1999)、DICカラーガイド「中国の伝統色（第2版）、標準色カード230 ©日本色研1988」を使用した。

Fig.2　各遺跡周辺地図

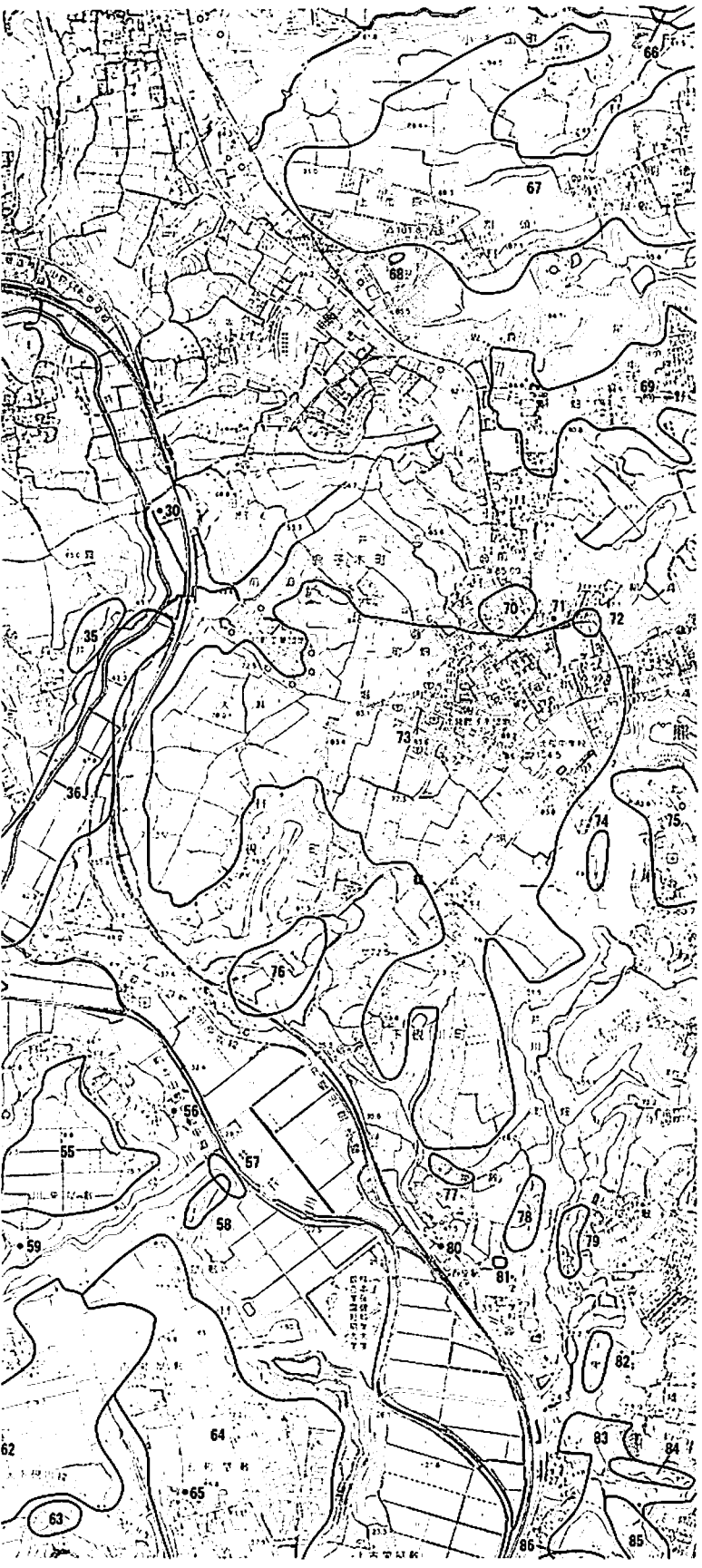


遺跡番号	遺跡名	遺跡の時代
1	馬ノ水	縄文・弥生
2	柿原馬の本	縄文～中世
3	柿原羽山尻	旧石器・古墳
4	上荒尾箱式石棺群	古墳
5	霊樹庵跡	中世
6	小山田	縄文～中世
7	島崎	縄文
8	荒尾南	縄文～中世
9	岳林寺跡	中世
10	城親賢の墓	中世
11	西大谷	縄文～中世
12	西谷院平	縄文～中世
13	谷尾崎	旧石器
14	谷隠軒跡	中世
15	野添平	縄文～中世
16	池辺寺塔遺跡群	古代
17	日影城跡	中世
18	池辺寺関連遺跡群	平安～中世
19	高橋町遺跡群	古墳～平安
20	池ノ上	古代・中世
21	桂江和尚碑	江戸
22	畑ノ原古墳群	古墳
23	ジブラ墓地	中世
24	羽山遺跡群	
25	北島遺跡群	弥生～古代
26	北島五輪塔群	中世
27	熊本工大遺跡	弥生
28	宮ノ尾古墳群	古墳
29	宮ノ尾古墳1号墳	古墳
30	柿原遺跡群	縄文～中世
31	柿原宮ノ原廃寺	中世
32	経塚遺跡群	弥生・古墳
33	池亀遺跡	弥生
34	本妙寺B箱式石棺群	古墳
35	本妙寺A箱式石棺群	古墳
36	井芹五輪塔・宝塔群	中世
37	井芹城跡	中世
38	井芹城跡推定地	中世
39	井芹	弥生
40	本妙寺北	古墳～中世
41	中尾丸城跡	中世
42	牧崎	弥生
43	釣耕園・緑田園・百梅園跡	江戸
44	鬼塚さん古墳	古墳
45	石神原	弥生～平安
46	千原台遺跡群	縄文～平安
47	迎田	縄文～平安
48	遠矢塚	中世
49	熊本城跡遺跡群	古墳～近世
50	熊本城跡	近世
51	旧細川刑部邸	近世
52	藤園中学校校庭	弥生～平安
53	新町古寺跡・高麗門跡	近世
54	戸坂	弥生～平安
55	戸坂御田尻	縄文～中世
56	新馬借遺跡	古墳～平安
57	新馬借遺跡	中世
58	古往生院跡	近世
59	花岡山・万日山遺跡群	古墳
60	花岡山陸軍埋葬地	明治
61	吉祥寺横穴群	古墳
62	横手町寺院群	近世
63	願行寺跡	近世
64	船場町	弥生
65	妙解寺細川家霊廟及び門	江戸
66	妙解寺細川家墓地	江戸
	細川家菩提寺妙解寺跡	江戸
67	花岡山・万日山遺跡群	古代
68	板屋町・細工町寺院群	近世
69	古町(旧唐人町)	弥生～明治
70	山由霊院（春日寺）	江戸
71	北岡神社境内古墳	古墳
72	光明寺跡	近世
73	浄信寺跡	中世
74	池田山伏塚遺跡群	弥生・古墳
75	山伏塚	中世

遺跡番号	遺跡名	遺跡の時代
76	高平箱式石棺	古墳
77	天福寺跡	中世
78	永浦遺跡群	古墳・中世
79	稲荷山古墳	古墳
80	松崎遺跡群	弥生～平安
81	松崎八幡箱式石棺	古墳
82	室園	縄文～中世
83	池田町(池田小学校)	弥生～平安
84	池田城跡	中世
85	津浦一ノ谷横穴群	古墳
86	一ノ谷	古墳～平安
87	出町土居跡	近世
88	砂田横穴群	古墳
89	舟場	縄文～中世
90	舟場山古墳	古墳
91	船場山古墳	古墳
92	宗岳寺跡	中世
93	打越遺跡群	弥生・中世
94	打越貝塚	縄文
95	池田八幡放牛地蔵	近世
96	往生院境内石造物	中世・近世
97	京町台遺跡群	弥生～中世
98	寺原横穴群	古墳
99	黒髪町遺跡群	縄文～中世
100	小峰	縄文～平安
101	探釣園跡	近世
102	峰雲院跡墓地	中世
103	長岡監物屋敷跡	近世
104	釈将寺跡	近世
105	京町2丁目	縄文～近世
106	伝大道寺遺跡群	縄文～近世
107	金剛寺南乾山跡	中世
108	円光寺跡	近世
109	仙巌院跡	中世
110	内坪井	弥生
111	浄国寺跡	中世
112	夏目漱石内坪井旧居	明治
113	成就院大真山覚勝寺跡	中世
114	安元元年笠塔婆塔身	古代
115	安元元年笠塔婆	古代
	報恩禅寺境内石造物	中世
116	お薬園跡	近世
117	子飼	縄文～中世
118	七軒町	縄文～中世
119	一夜塘	近世
120	上河原	縄文～古代
121	新屋敷	弥生～中世
122	大江白川	縄文～平安
123	小泉八雲熊本旧居	明治
124	山崎古墳	古墳
125	花畑館跡	近世
126	辛島町	弥生・古墳
127	代継神社の層塔	中世
128	本庄（熊大病院敷地）	古墳～平安
129	大江遺跡群	縄文～明治
130	大江義塾跡(旧徳富邸)	明治
131	不動院跡の六地蔵塔	中世

Tab.3　遺跡地名表一①

Fig.3　万楽寺出口遺跡周辺地図



遺跡番号	遺跡名	遺跡の時代
1	西安寺製鉄	古代
2	鶴山製鉄跡	古代・中世
3	円台寺岩陰	
4	円台寺五輪塔群	中世
5	生野	縄文
6	白滝洞	
7	円台寺	縄文～中世
8	円台寺跡廃寺跡	中世
9	円台寺の石造笠塔婆	中世
10	円台寺磨崖仏群	中世
11	河原立	縄文・弥生
12	ヲスギ	縄文・弥生
13	木留	縄文～古代
14	木留城跡(推定地)	中世
15	笹尾A	縄文
16	茶山	縄文～古代
17	笹尾B	弥生・縄文
18	向山古墳	古墳
19	山口迫	縄文～中世
20	西南の役台場跡	明治
21	出羽宝篋印塔	中世
22	平野	弥生～古墳
23	平野五輪塔群	中世
24	荻迫	縄文・他
25	四ツ塚古墳群	古墳
26	荻迫特木台場薩軍墓地	近代
27	荻迫狐塚古墳	古墳
28	鬼のかま古墳	古墳
29	服仏長	古代・中世
30	舞踏堰記碑	中世
31	山海道	縄文
32	万楽寺貝塚	縄文
33	山海道遺跡	旧石器・縄文
34	伝鹿子木寂心墓	中世
35	北迫岡井横穴群	古墳
36	北迫川底遺跡群	弥～中世
37	荒平城跡	中世
38	万楽寺板碑	中世
39	万楽寺経塚	中世
40	万楽寺出口遺跡	縄文～弥生
41	万楽寺出口遺跡	縄文・弥生
42	太郎迫遺跡	縄文
43	妙見遺跡群	縄文・中世
44	今熊横穴群	古墳
45	畑田六地蔵板碑	中世
46	水谷道標	近世
47	春日遺跡	縄文
48	横山一字一石経塚	中世
49	横山古墳	古墳
50	東門寺城山城跡	中世
51	立福寺磨崖仏	中世
52	惣門	縄～中世
53	薬師堂板碑	中世
54	皮籠石	縄～中世
55	川東遺跡群	縄文・弥生
56	浦畑地蔵板碑	中世
57	崩平横穴群	古墳
58	赤水城跡	中世
59	川東地蔵板碑	中世
60	仁王堂板碑	中世
61	中尾	縄文
62	桑鶴遺跡群	縄～中世
63	窟嚴寺跡	中世
64	五丁中原遺跡群	旧石器～弥生
65	五丁中原阿弥陀堂板碑	中世

遺跡番号	遺跡名	遺跡の時代
66	松尾原横穴群	古墳
67	小糸山遺跡群	縄文～中世
68	明治官軍墓地	明治
69	雄古関	中世
70	伝鹿子木館跡	中世
71	花の木観音堂板碑	中世
72	一町畑古墳	古墳
73	関川遺跡群	縄文～平安
74	六反畑横穴群	古墳
75	四方寄	縄文
76	伯ノ木	縄文・古墳
77	一丁畑横穴群	古墳
78	山川窯跡群	古代
79	辺尾横穴群	古墳
80	放牛地蔵	近世
81	鶴畑古墳参考地	古墳
82	黒井横穴群	古墳
83	坂下遺跡群	弥生・古墳
84	坂下A横穴群	古墳
85	坂下B横穴群	古墳

Tab.4　遺跡地名表－②

2 調査日誌抄

花岡山・万日山遺跡群発掘調査日誌

2005年（平成17年）
1.21～1.25　表土剥ぎ
1.26　表土剥ぎ後の環境整備
1.27　4級基準点設置及びメッシュ杭設置
1.28～1.31　遺構検出予備掘削
2.1～2.3　雪のため調査休止
2.4～2.25　Ⅰ区遺構検出及び遺構掘削、実測
2.26～3.2　Ⅰ区、4区遺構検出、遺構掘削、遺構実測
3.3～3.4　降雨のため調査中止
3.7～3.9　Ⅰ区遺構検出及び遺構掘削、遺構実測
3.10～3.11　3区表土剥ぎ
3.12～3.17　Ⅰ区遺構掘削、遺構実測
3.18　Ⅰ区、5区遺構掘削及び遺構実測
3.18～3.19　Ⅰ区、5区遺構掘削及び遺構実測
3.22～3.28　降雨のため作業中止
3.29～3.31　遺構実測
5.16　6区表土剥ぎ
5.17　表土剥ぎ
5.19～6.27　6区調査
6.28～7.1　埋め戻し
7.5～7.14　調査事務所で図面整理
7.15　調査終了、撤収

（槙　佳克）

新馬借遺跡発掘調査日誌

2004年（平成16年）
5.30～6.2　表土剥ぎ開始
6.5～6.21　遺構検出及び掘削、遺構実測
6.22　一新小学校3年生体験発掘
6.23～6.27　降雨のため作業中止
6.28～6.29　遺構検出、掘削、実測
6.30　調査終了、撤収

（坂口圭太郎）

北島遺跡群発掘調査日誌

2006年（平成18年）
6.15　調査事務所設置
6.16　調査機材搬入
6.19～6.30　表土剥ぎ
7.10～7.11　表土剥ぎ後の調査環境整備
7.12　Ⅰ区遺構検出
7.13～7.14　調査区南側掘下げ
7.18　Ⅰ区掘下げ
7.19～7.21　降雨のため作業中止
7.24～7.31　Ⅰ区掘下げ
8.1～8.11　Ⅰ区掘下げ、遺構検出も実施
8.14～8.18　調査休止
8.21～8.22　表土剥ぎ
8.23～8.31　Ⅰ区3層掘下げ
9.1～4　Ⅰ区南側3層掘下げ、遺構実測
9.5～6　降雨のため調査中止
9.7～9.15　Ⅰ区遺構検出、調査
9.19～9.28　Ⅰ区遺構検出、遺構調査
10.5　Ⅰ区遺構調査
10.6～10.10　遺構実測
10.11～10.12　空撮のための準備、遺構実測
10.13　Ⅰ区空撮
10.16～10.20　作業休止
10.23～10.25　Ⅱ・Ⅲ区表土剥ぎ
10.30～10.31　表土剥ぎ後の環境整備、4級基準点測量及びメッシュ杭設置
11.1～11.7　遺構検出及び調査
11.8～11.13　Ⅱ区遺構検出
11.15～11.30　Ⅱ区遺構検出・調査・実測
12.1　Ⅱ区遺構調査・実測
12.4～12.27　Ⅱ・Ⅲ区遺構掘削・実測
12.28　仕事納め
2008年（平成20年）
1.4～1.12　遺構掘削及び実測
1.15～1.23　実測・清掃
1.24　空撮
1.25～1.28　実測図整理
1.29　調査終了、撤収

（今村和徳）

万楽寺出口遺跡発掘調査日誌

2007年（平成19年）
5.23～5.24　表土剥ぎ
5.25～5 5.28　表土剥ぎ後の環境整備
5.29～6.12　遺構検出及び遺構掘削
6.13～6.15　降雨のため作業休止
6.18～6.25　遺構検出及び遺構実測
6.26　表土剥ぎ
6.28　遺構実測
7.3～7.27　取り上げ土洗浄、遺構検出・掘削・実測
8.3　現地説明会のための環境整備
8.4　現地説明会
8.6　取り上げ土洗浄、遺構検出・掘削・実測
8.13～8.20　取り上げ土洗浄、遺構検出・掘削・実測
8.27～8.29　遺構調査及び清掃
8.30　空撮
8.31　遺構調査
9.3～9.4　拡張部表土剥ぎ
9.5～9.27　遺構検出及び調査、実測
9.30　調査区北側、鉄道・運輸機構へ引き渡し
10.2～年末まで、一時調査休止期間を挟む
2008年（平成20年）
1.7　調査再開
1.8～1.16　遺構掘削及び実測
1.17　調査終了

（坂口圭太郎）

第３章　各遺跡の報告

１　花岡山・万日山遺跡群

（１）遺跡の立地と地形、既往の調査

熊本市横手２丁目に所在する。当該地の地形は、花岡山・万日山の丘陵部及び白川・井芹川右岸に形成された緩扇状地上に立地する。平成 18 年に同事業により横手３丁目 1183-3 に所在する旅館「花岡荘」敷地内で、智照院細川家墓所の発掘調査が熊本市教育委員会により実施されている[1]。その際、墓所調査に先行し平成 18 年１月 18 日に県文化課において敷地内における埋蔵文化財の確認調査を実施し、近世墓範囲以外の用地内に６箇所のトレンチを設定、掘削し、埋蔵文化財の有無を確認した。その結果、当該用地においては埋蔵文化財の広がりはないと確認し、鉄道・運輸機構あて通知している。

今回の発掘調査地は、智照院細川家墓所を挟み南側に１区から５区を、北側に６区を設定し調査が実施されている。南側調査区のすぐ南には、花岡山から東へ張り出し JR 鹿児島本線により丘陵を切断された北岡丘陵が JR 線を挟み存在する。

調査は１区、６区で遺構を確認し、調査を実施している。２区から５区は表土を剥いだ後、遺構検出等を実施したが調査の対象となる遺構等が残っていないことが判明したため、確認作業が終了した段階で調査を終えている。よって、ここで報告する調査区は１区、６区のみである。

（２）遺構各説

１区（Fig.6）

本調査区は、２区から５区同様に多数の撹乱により遺構が影響を受けており、検出できた遺構はわずかである。

溝 SD001（Fig.7）調査区の北辺で検出した遺構。遺構自体は北側へ延びるが調査は実施していない。検出全長 7.48m、最大幅 1.12m、遺構深度は A-A' 間で 20.3cm を測る。掘り方は上端と下端間に開きがないことからほぼ垂直に近い状態で掘削されている。下端はやや不安定で一定しない。埋土中に近世陶磁器をわずかに含むため、遺構の年代は近世と考えられる。出土遺物は微小片のため図示していないが、肥前系磁器の椀、皿類を含む。

溝 SD002（Fig.7）調査区の南西側で検出した遺構。溝 SD003 とほぼ重なるため、遺構認定に慎重にならざるを得ないが、溝 SD002 は溝 SD003 の掘り直し遺構であると考えられる。また、溝 SD002 についても、軸を同じくして途中で掘削深度が深くなる部分があることから、再度の掘り直し、もしくは追加掘削があったことが窺える。遺構主軸は N-30° -W を測る。遺構規模は全長 8.21m、最大幅 85cm である。埋土中には小礫や近世陶器、磁器片が少量含まれていたが図示するまではない遺物である。陶器、磁器は肥前系の小椀、椀、皿類であると見られるが、胴部片のみの出土であるため詳細は不明。

溝 SD003（Fig.7）溝 SD002 とほぼ重なり検出した遺構。溝 SD003 が先に掘削されのちに溝 SD002 が掘削されている。（A-A'）埋土は単層である。遺構規模は全長 7m、最大幅は不明。埋土中には SD002 同様に、近世陶器、磁器片と小礫を含む。陶器・磁器は小破片であり、図示していない。

その他遺構（Fig.6 参照）個別に報告した以外に柱穴、土坑状遺構がある。柱穴群は調査区のほぼ中央部に集中し確認したが、建物等遺構としての認定はできなかった。また、土坑状遺構は出土遺物がないため時期を判断することができないが、埋土の状態から近世から近代に掘削されたものと考えられる。

６区（Fig.8）

本調査区のみ智照院細川家墓所を挟み北側に位置する調査区である。調査区は JR 沿線に沿い西側に位置する。本調査区もこれまでの調査区同様に多数の撹乱が調査区の大半を占めており、調査の対象となる遺構と認定できたものはわずかであった。

道路状遺構 SF001（Fig.8）明確な掘削を確認したものではないが、土質の硬さの違いから掘り方と認定し

1　熊本市教育委員会「智照院細川家墓所」花岡山・万日山遺跡群第１次調査区発掘調査報告書 熊本市教育委員会 2008

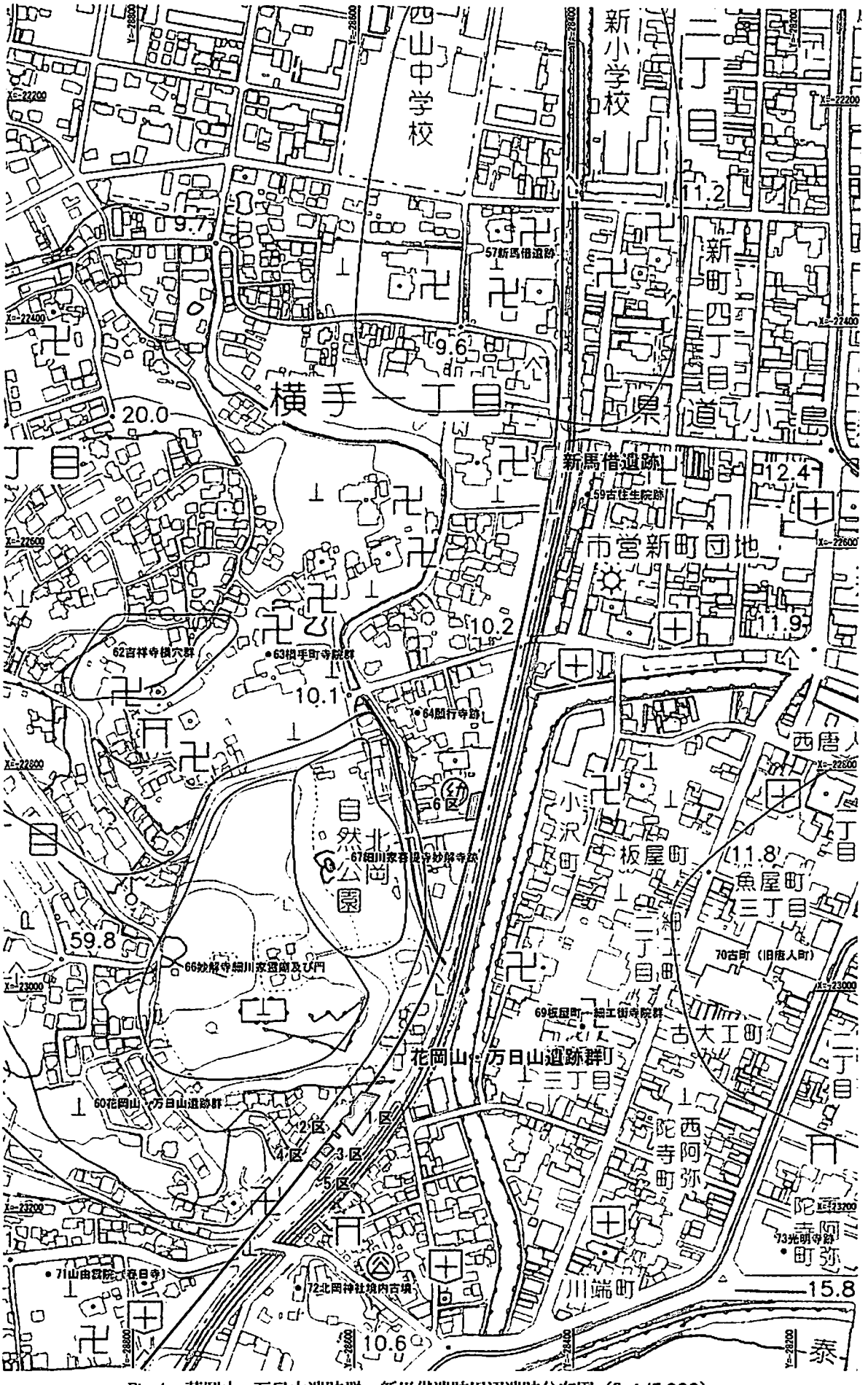


Fig.4　花岡山・万日山遺跡群、新馬借遺跡周辺遺跡分布図（S=1/5,000）

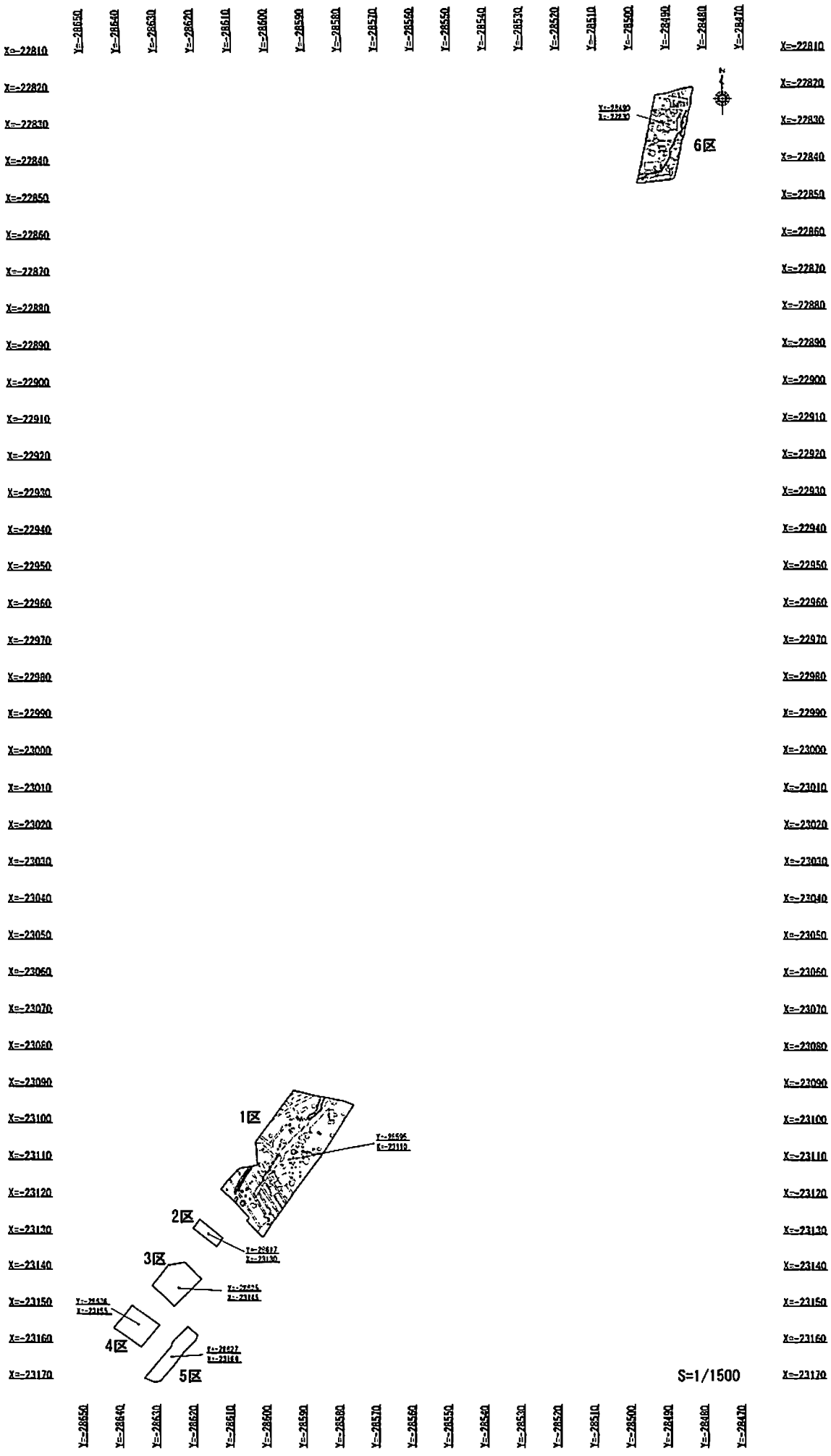


Fig.5　花岡山・万日山遺跡群１区～６区座標変換点

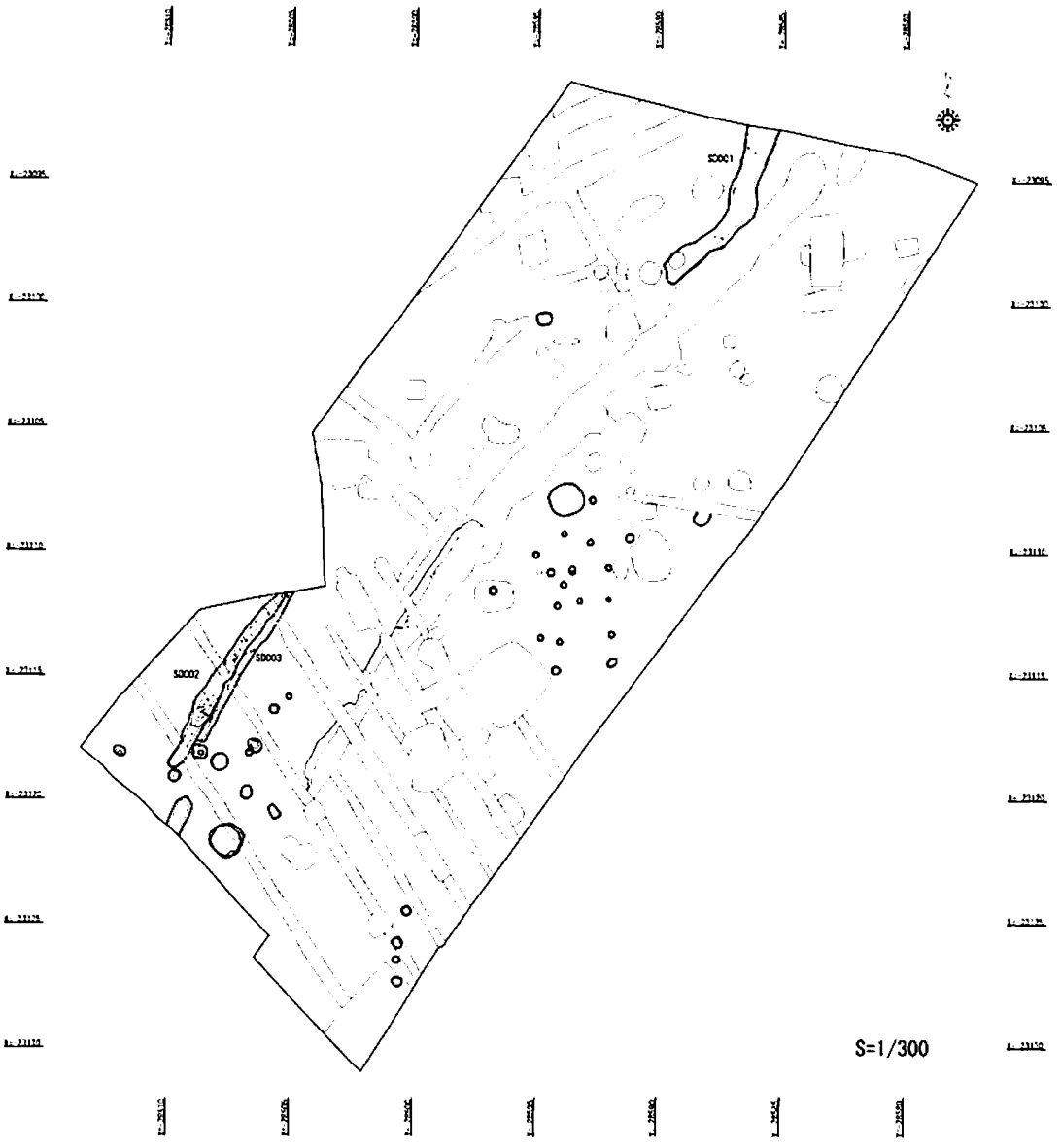


Fig.6　花岡山・万日山遺跡群１区遺構配置図

た調査者の意見を基に図示している。(A-A')（B-B'）遺構の大半は調査区外にあたるが、調査区の角に「L字」状に硬化した面を確認した。本調査区南側は、現在も細川家菩提寺である妙解寺参道入り口に面し、近代に路盤改良される前までの道路面を残しているものと考えられる。出土遺物は少なく、図示できるものはない。

その他の遺構　調査区内は撹乱が多数を占めているため遺構と認定できるものは少ない。あきらかに撹乱と違う胎土を有し掘り方が明確に確認できる柱穴を遺構とし図示した。しかし、それら柱穴は建物等を構成するものではないため、全体図の中で示している。

（3）まとめ

今回発掘調査を実施した花岡山・万日山遺跡群は、花岡山の麓に位置し、妙解寺に隣接する地域上に位置する近世の遺跡であることが調査の結果から確認された。調査区内は近現代までの多数の撹乱が入り、その埋土から出土する遺物も近世の陶器・磁器ですべて小破片であった。図化した遺物の中には、土師小皿で糸切り底を呈する遺物を完形で３点確認した。見込みに油溜まりを残し、口縁部に灯心痕と油煙を残す。用途はこれらの痕跡から灯明皿として用いられていたことが窺える。

このことから、近世段階では町屋の一部が当該調査地にかかってきていたものと考えることができる。また、６区で確認した道路状遺構は、JR線から妙解寺へ曲がる部分は妙解寺参道として整備され、その後現在の道路へと引き継がれてきたものと考えられる。

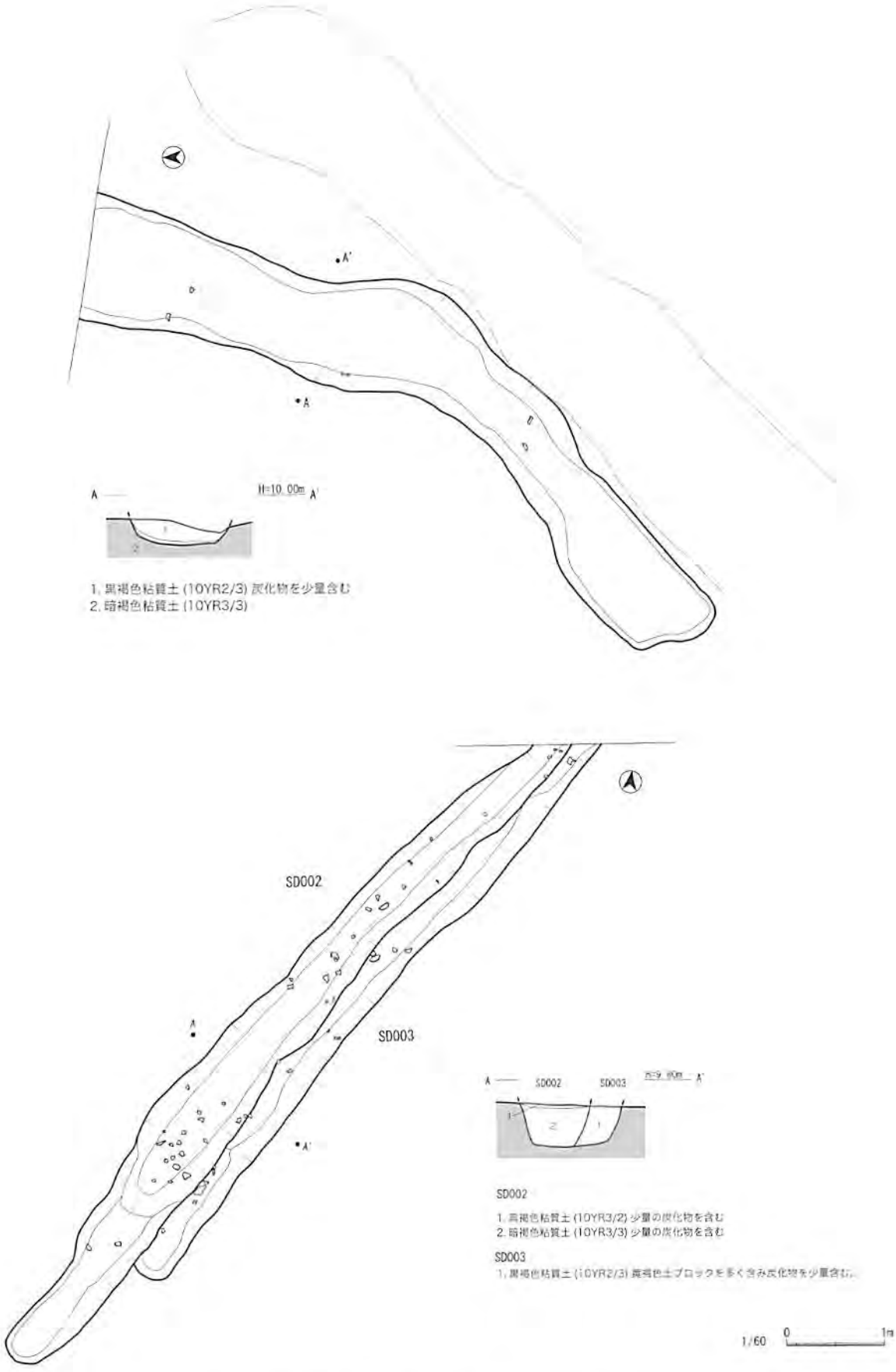


Fig.7　花岡山・万日山遺跡群 1 区溝 SD001（上）、SD002・SD003（下）実測図

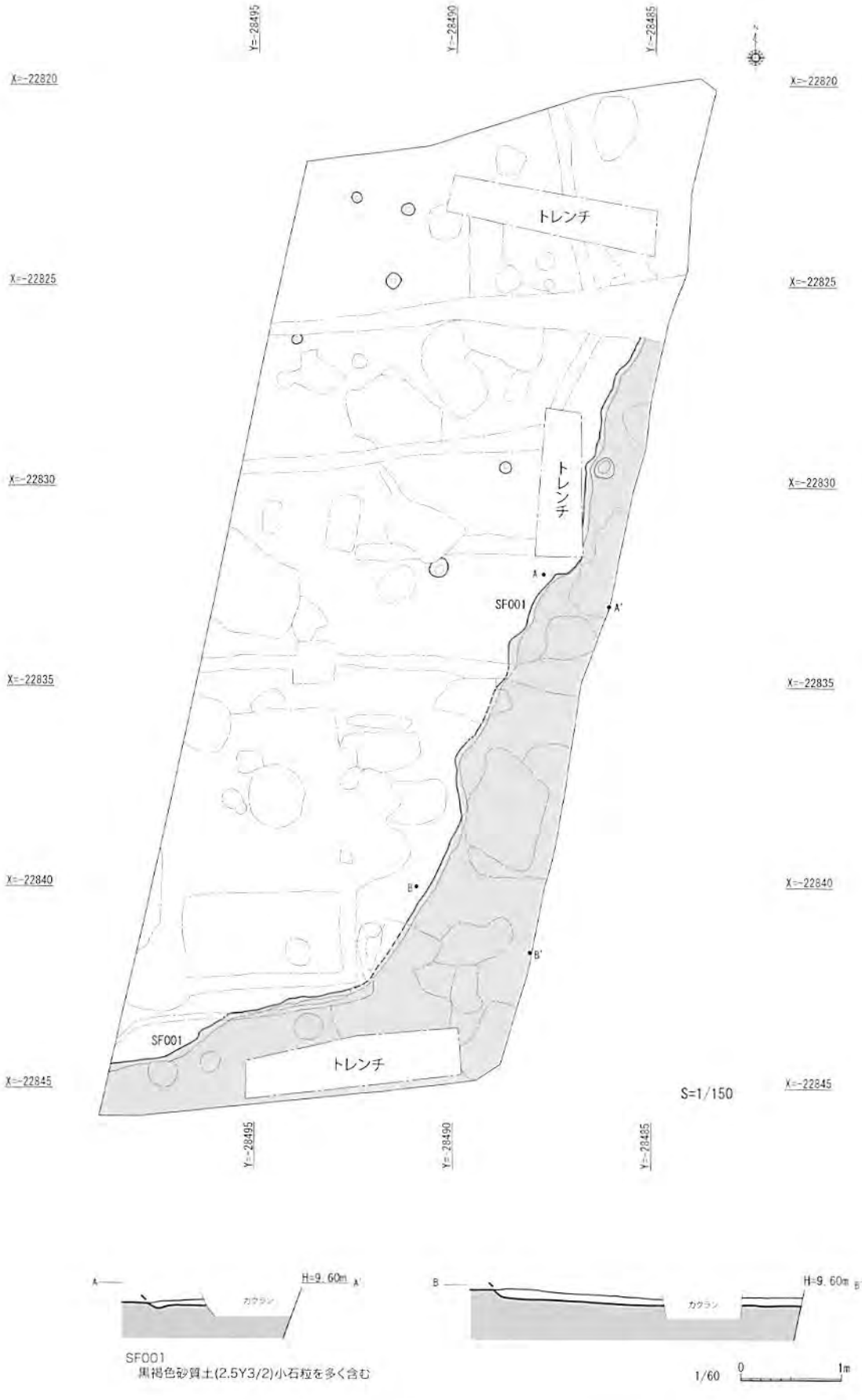


Fig.8　花岡山・万日山遺跡群６区遺構配置図

2　新馬借遺跡

（1）遺跡の立地と地形、既往の調査

熊本市新町三丁目に所在する遺跡。当該地の地形は、東に位置する熊本城が築かれる茶臼山方面から緩い斜面地上に位置し、標高約 10m に所在する。遺跡の存在は、熊本市立一新小学校建て替えに伴う工事[2]の際に須恵器が採集されたのをきっかけとして、古代から中世にかけての埋蔵文化財包蔵地として知られることとなった。今回調査を実施した地区は、周知されている遺跡の範囲南端から JR 鹿児島本線沿いに熊本駅方向に下った南側に位置する。新幹線建設事業により予備調査を実施した結果、遺跡の存在を確認し、その結果を元に熊本市教育委員会と協議し、新馬借遺跡の範囲を南側へ対処することとなった。

（2）遺構各説

柵列 SA001（Fig.10）方形掘り方３基からなる遺構。周辺に類似し並列する遺構がないことから、柵列として報告する。しかし、周辺に撹乱が多いため消滅している可能性もある。１基あたり 60cmから 70cmの規模を有する。柱穴間は P1、Ｐ２間が 1.6m、P2、P3 間が 2.1m と一定しない。主軸はＮ -43° - Wを測る。

溝 SD001（Fig.9）　本遺構は次に述べる道路状遺構 SF001 と同一遺構と考えられる。遺構掘り込み面が同一であること、主軸が同一であること、検出時の上部に覆っていた土が同じであったことを勘案し、道路状遺構の側溝的存在として掘削されていたものと見られる。

道路状遺構 SF001（Fig.9）調査区南端に沿い検出した遺構。検出長 3.74m、幅は調査区外へ延びているため全長は不明だが、検出長は平均 70cmを測る。前面に硬化面が見られ、断面を観察すると砂粒を多く含む層が幾重にも見られる。掘り方は明確ではないがわずかに窪む。埋土には近世陶器・磁器片がわずかに含まれる。硬化面が広がる方向には現在は道路はないが、妙解寺方向へ人る道があったものと考えられる。

その他の遺構（Fig.9）　井戸 SE001、SE002、SE003 と３基を確認した。いずれも割石を円形に積み枠を形成している。調査時に近世以降の井戸であるとして内部の掘削は実施されていない。

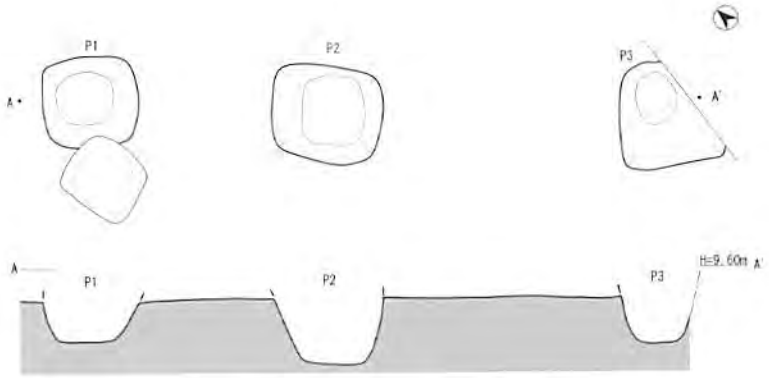
（3）まとめ

新馬借遺跡は当初確認された際に、須恵器が出土していたため古代の遺跡として知られていたが、今回の発掘調査で近世の遺構も残存していることが確認された。遺跡周辺は、現在も生活面として利用されているため近世以降の撹乱も多数入り、遺構の残存が非常に悪い。そのため検出した遺構は、花岡山・万日山遺跡群調査１区、６区と同じ様相で検出されるが、遺構の広がり等は分からない部分が多かった。

調査区南端で検出した道路状遺構 SF001 は花岡山・万日山遺跡群６区で検出した道路状遺構と時期や東西に広がること等が似ていることから、背後地にあたる花岡山山麓方面へ繋がる道路であったことが窺える。

2　熊本市教育委員会「新馬借遺跡」『熊本市中央南地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会 1978

Fig.9　新馬借遺跡遺構配置図、溝 SD001・道路状遺構 SF001 実測図



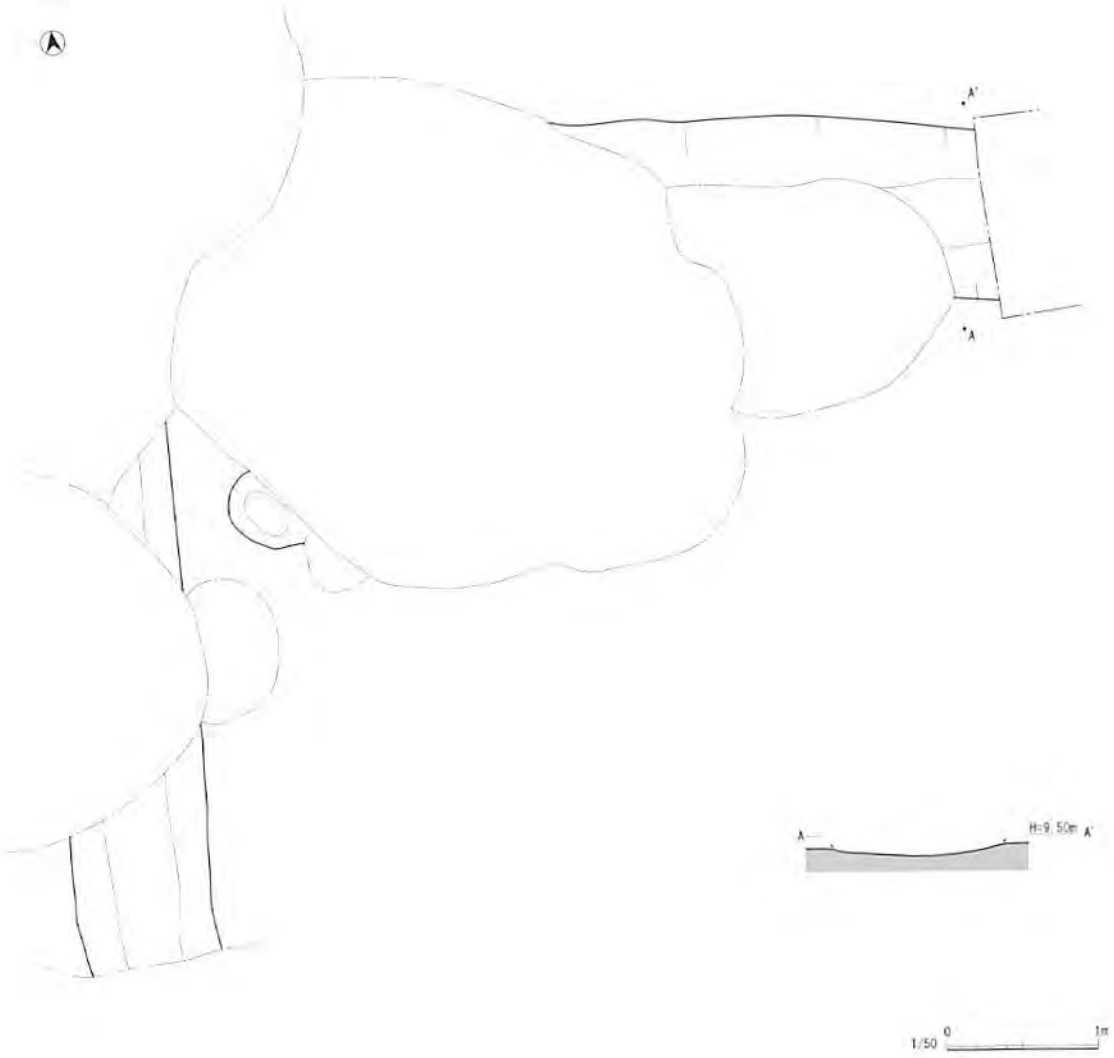


Fig.10　新馬借遺跡柵列 SA001（上）・溝 SD002（下）実測図

3　北島遺跡群

（1）遺跡の概要

北島遺跡は、丘陵上平坦面に位置するⅠ区から南側緩斜面上に位置するⅡ区、緩斜面から低地に接するⅢ区からなる。東からなる丘陵の先端部にあたるが、県道、JR鹿児島本線等により尾根を切断しているため独立丘陵の様相を呈している。中世には北島城[3]が築かれていたとされるが、現在は神社が残るのみである。

（2）遺構各説

【1区】(Fig.13)

今回調査を実施した調査区のなかで最も高所に位置する地区である。周囲の水田面との比高差は約20mを測る。調査面は2面を対象とし、3層を遺物包含層として4層上面で中世期の遺構を、4層を包含層として5層上面を古代の遺構検出面と判断し調査を実施している。

4層上面検出遺構（中世）

溝SD001（Fig.13）　遺構の一方が調査区西側から延び途中で終わる。検出した平面は北側に一段更に落ち、あたかも溝が切り合っている状況を呈する。壁面における断面観察結果から、同一遺構と判断した。検出長は11.3m、最大幅2.3mを測る。

溝SD002・SD003(Fig.13)　遺構のあり方としてはSD001と同じである。掘り方の一方が調査区西側に延び、調査を実施した遺構。SD002がSD003の上から掘り込む。遺構埋土中からは遺物は出土していない。遺構規模はSD002が検出長13.3m、SD003が検出長8.4mを測る。

溝SD004（Fig.13）　調査区北側で段落ちの範囲で検出した遺構。全長23.9m、最大幅0.8m、主軸はN-85°-Eを測る。埋土中からの遺物の出土はない。

掘立柱建物SB001（Fig.14）調査で中世面と判断されるレベルで検出された遺構。2間×2間で、柱穴間が0.85m～1.35mを測る。柱穴掘り方はほぼ同レベルで揃うが、柱痕等は確認されていない。

掘立柱建物SB002（Fig.14）　中世面で検出した遺構。1間×2間で検出された。規模は柱穴間が1.45m～1.7m、主軸N-80°-Eを測る。柱穴からの遺物の出土はない。

掘立柱建物SB003（Fig.15）調査区南端で検出された遺構。柱列の一部が調査区外に出る。現状での規模はSB002同様に1間×2間である。柱穴間は1.5m～2.1m、主軸N-26°-Eを測る。

掘立柱建物SB004（Fig.15）古代（4層上面）で検出した遺構。調査区の北側に位置し周囲には他の遺構は希薄である。遺構西側に小柱穴が見られるが下端の状態からして樹痕である可能性が高い。調査時に本遺構にもこのうち1基の小柱穴が掘立柱状に検出されているが、整理段階では同一遺構である可能性は低いと判断し掘立柱建物SB004報告からは外している。柱穴は検出時点から深度は浅く、本来の掘削面はより高いレベルからの掘りこみがあったものと考えられる。遺構下端は丸みを帯び柱座等確認できないが、深度が一定していることから同一遺構として掘削された可能性は高い。

掘立柱建物SB005（Fig.16）SB004の南に位置し調査区のほぼ中央で検出した遺構。1軒×2軒の掘立柱建物であり、SB004同様に遺構基底部しか残っていない。周囲に遺構が少ないことから大幅な削平を受けているものと見られる。遺構内には柱座等の施設は残されていない。遺構埋土からの遺物の出土はない。

5層上面検出遺構（古代）

竪穴建物SI002・SI003（Fig.17）調査区北側で検出した遺構。遺構規模はSI002が3.6m×3.2mの方形で主軸N-37.5°-Eを測る。北西隅にベッド状遺構を配し南辺に1段ステップを有する。遺構内に撹乱が入るため柱穴がすべて残っていないことから2本柱建物、4本柱建物かは確認できていない。

SI003はSI002下から検出されている。北辺の規模は3.0mで東西方向の規模は不明。主軸はN-48°-Eを測る。柱穴その他の遺構は検出されていない。いずれも遺物の出土はない。

竪穴建物SI004・SI005（Fig.18）竪穴建物SI002の東側で検出した遺構。2軒の竪穴建物が主軸をほぼ同じくして検出している。SI004は西側に作り付けカマドがあった痕跡を留める。柱穴は4本柱で検出されて

3　熊本市『新熊本市史』史料編 第1巻 考古資料　新熊本市史編纂委員会

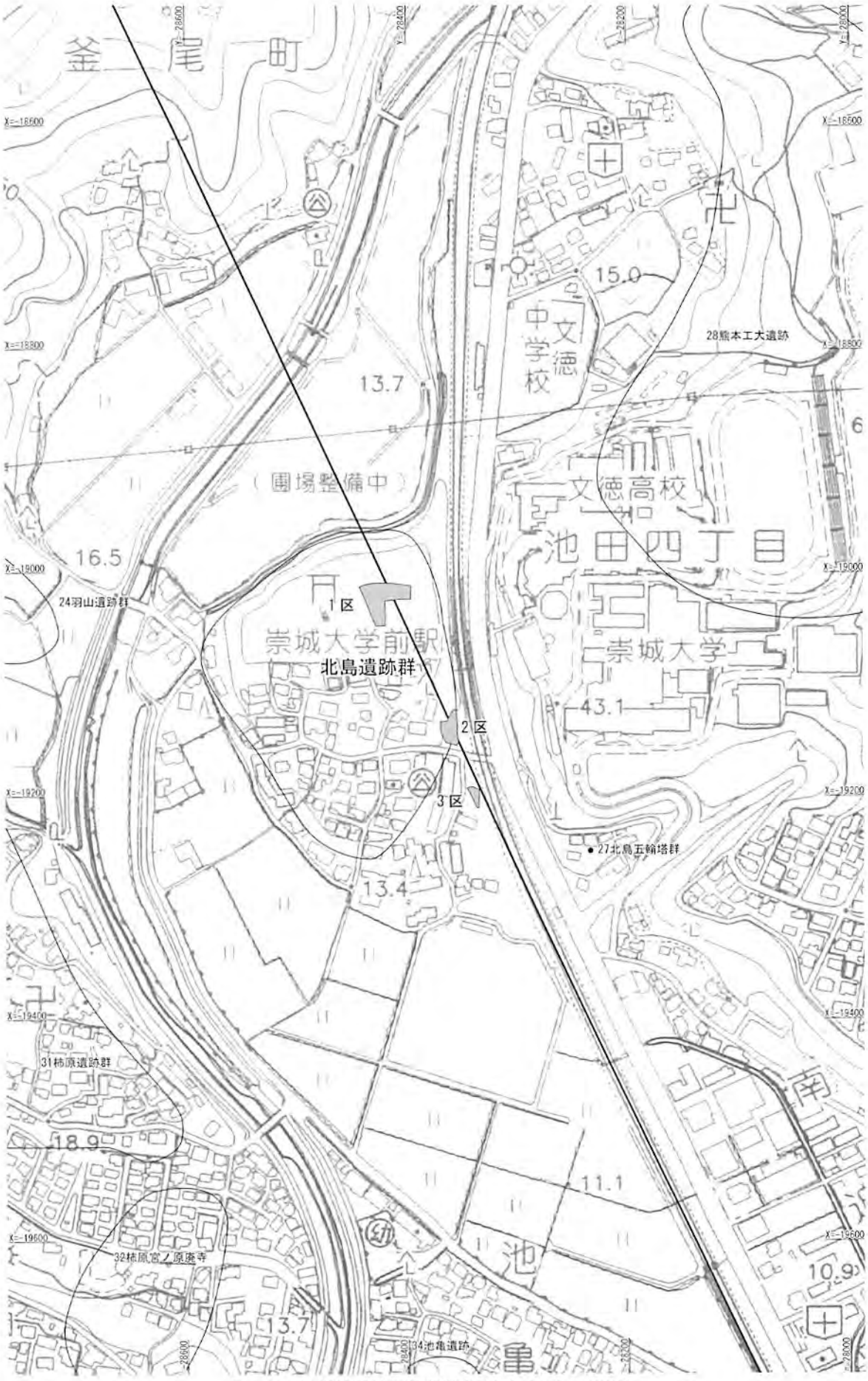


Fig.11　北島遺跡群周辺遺跡分布図（S=1/5,000）

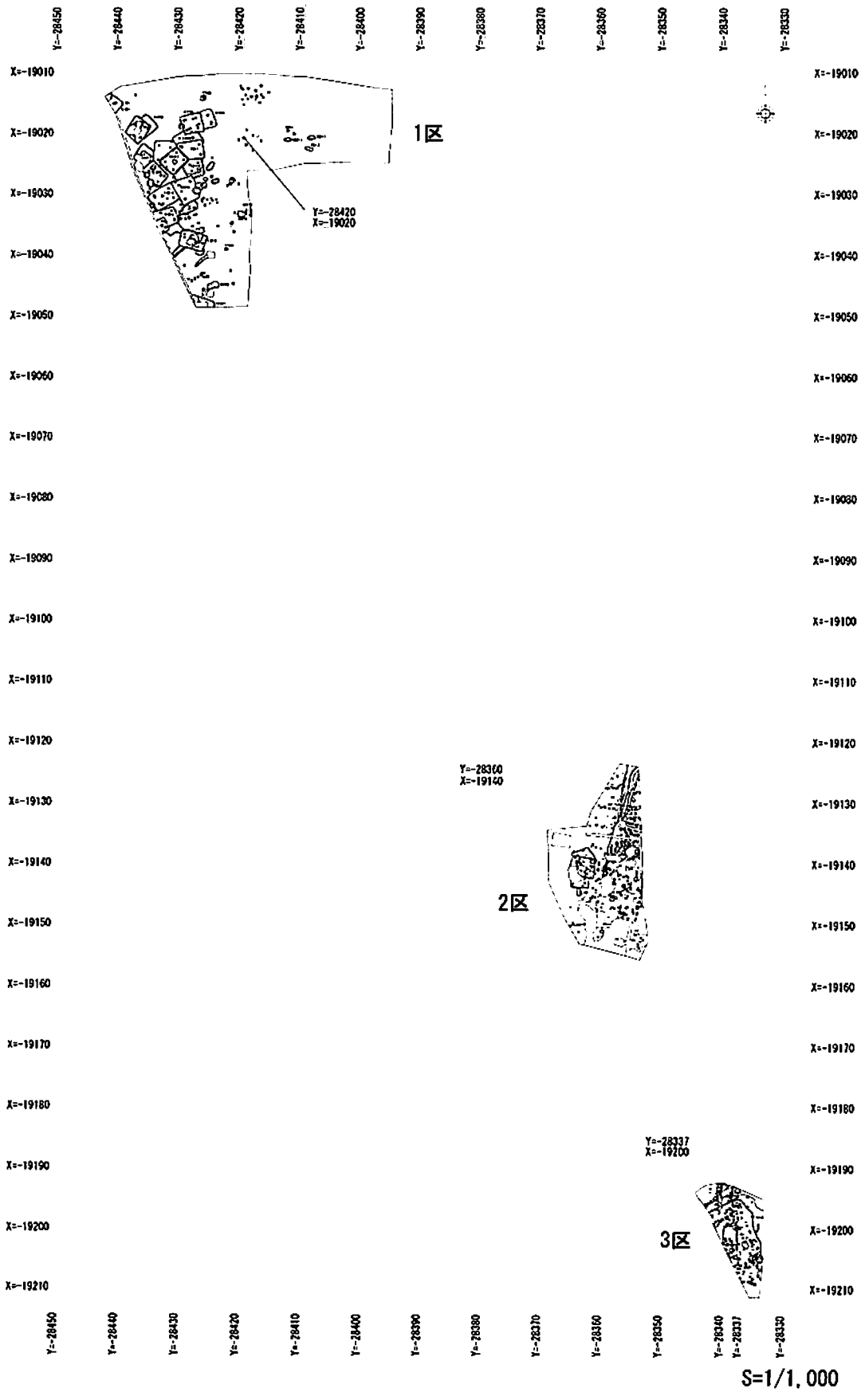


Fig.12　北島遺跡群調査区配置図

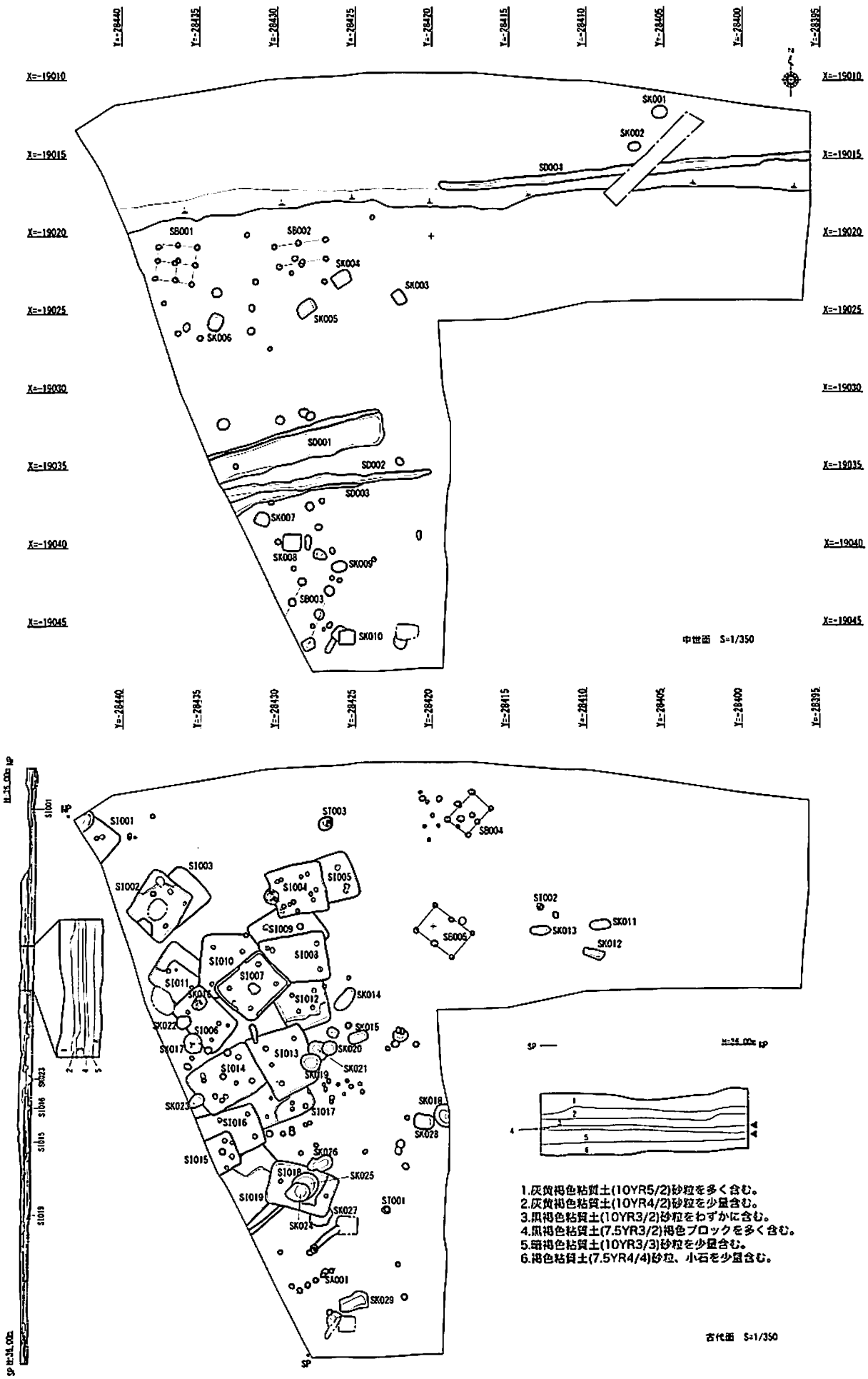


Fig.13 北島遺跡群1区遺構配置図（上、中世面　下、古代面）

おり、建て直しを示す柱穴も4本検出されている。柱穴の規模、埋土からも柱穴の組み合わせは確認できていない。カマド周辺には袖部を構築していたと見られる白色粘土塊が集中して検出されているが、全体形を示す部位は出土していない。カマド掘り方は楕円形に掘り込まれている。遺構規模は竪穴建物埋土からA-A'間が3.45mで直交し、3.15mを測る。

SI005はSI004と主軸を同じくし、遺構の1/3を切られ検出した。作り付けカマドは切り合いにより所在していたかどうかも不明である。柱穴は東側壁に寄り2本検出されていることから4本柱であったと見られる。埋土中からの出土遺物はない。

竪穴建物SI006・SI011（Fig.19）平面長方形を呈する遺構。SI006がSI011を切り検出した。SI006は規模が3.9m × 2.65m、主軸がN-43°-Wを測る。柱穴は4本柱と見られるが、北西隅のみは撹乱により消滅する。硬化面等は確認されていない。

SI011の規模は3.6m × 3.2m、主軸はN-54°-Wを測る。柱穴は2本柱で、北西隅にL字状にベッド状遺構を配する。埋土中からの出土遺物はない。

竪穴建物SI007～SI010、SI012（Fig.20）4軒からなる切り合いを呈し検出した。切り合いの順は古いほうからSI010→SI009、SI012→SI008→SI007となる。

SI007は切り合いの最上位に位置する。平面が長方形を呈する。規模は3.9m × 3.25m、主軸はN-43.5°-Eを測る。4本柱で中央に浅く掘り窪めた炉を有する。遺構下端には周溝を巡らす。

SI008は南西の隅をSI007により切られる。平面形は同じで規模も4.25m × 3.0mとほぼ同規模であり主軸がN-83.5°-Eを測る。柱穴は4本柱で炉などは検出されていない。

SI009はSI008に切られ、SI010を切り検出している。さらに北側をSI004により切られ全体面積の約半分しか存在していない。柱穴は北西側に1本確認しているため本来は4本柱であると考えられる。炉、硬化面等は確認していない。規模は3.95m × 3.25m、主軸はN-90°-Wを測る。

SI010はSI009により切られる。方形で切り合いにより規模、主軸方向はは不明。柱穴は4本柱からなるが炉等は検出されていない。

SI012はSI008により切られているため、最も古い遺構である。遺構は4本柱で南側辺にベッド状遺構を配する。硬化面は確認されていない。

竪穴建物SI013・SI014・SI016・SI017（Fig.21）4軒の切り合いを呈する。SI017が最も古く、SI013が最上位を占める。切り合い関係は古いものからSI017→SI016→SI014→SI013となる。

SI013は方形を呈するが、東側隅が丸みを帯びやや歪な感じを受ける。柱穴は4本柱からなるが、南東隅のみ撹乱により消滅する。埋土中からの出土遺物はない。

SI014は平面形が長方形を呈する。柱穴は四隅に近い場所に4本の柱配する。硬化面、炉等は確認されていない。埋土中からの遺物の出土はない。

SI017は長方形を呈するが、新しい時期の竪穴建物遺構が重複し断片的に残るのみである。南東隅にベッド状遺構がL字状に残るのが見て取れる。柱穴等は確認されていない。

竪穴建物SI015・SI016（Fig.22）調査区西側に広がる状態で検出した遺構。2基とも調査区外へ遺構上端が延びる。SI015は方形を呈し、東側隅に2本の柱を有することから4本柱建物と見られる。東側辺は2.3m、全体規模は不明である。やや小ぶりな竪穴建物である。

SI016は四隅近くに3本の柱穴が残ることから4本柱を有する遺構と見られる。炉、硬化面等は確認されていない。東側辺は2.8m、主軸方向は3.55m以上を測る。主軸はN-71.5°-Eを測る。

竪穴建物SI018・SI019（Fig.22）調査区南側で検出した遺構。本調査区では最も南側での竪穴建物の検出となる。SI018は長方形を呈し、内部にL字状のベッド状遺構を配する。柱穴は2本であるが、炉等その他の遺構は、中心部に後世の土坑が掘り込まれているため不明。規模は4.3m × 2.9m、主軸はN-73°-Wを測る。埋土中からの遺物の出土はない。

SI019は、掘り方の一部が調査区外に延び検出している遺構。遺構内部には北西隅にベッド状遺構をL字状に配する。柱穴は確認されていない。埋土中からの遺物の出土はない。全体規模は不明であるが、主軸は残っ

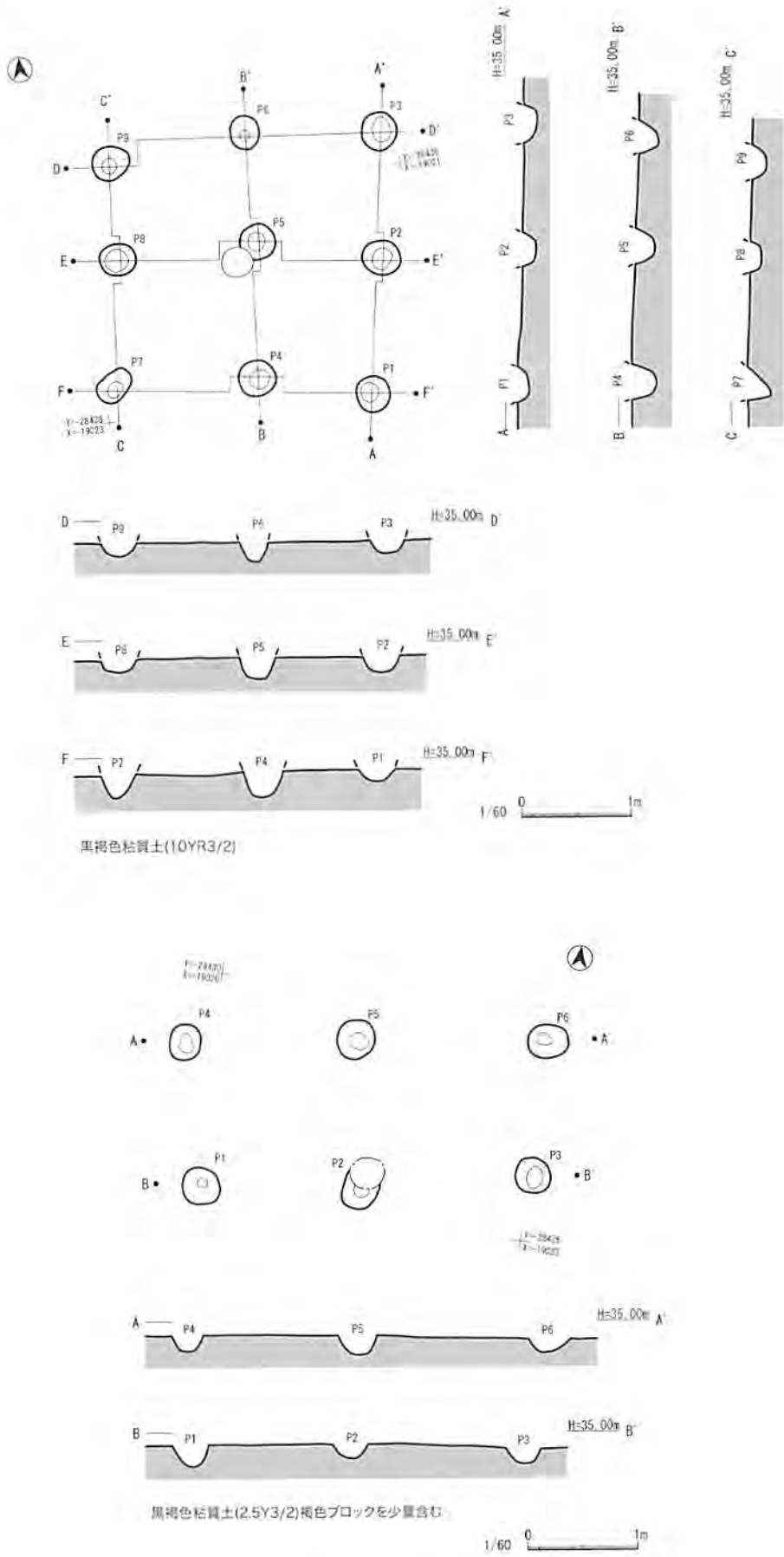
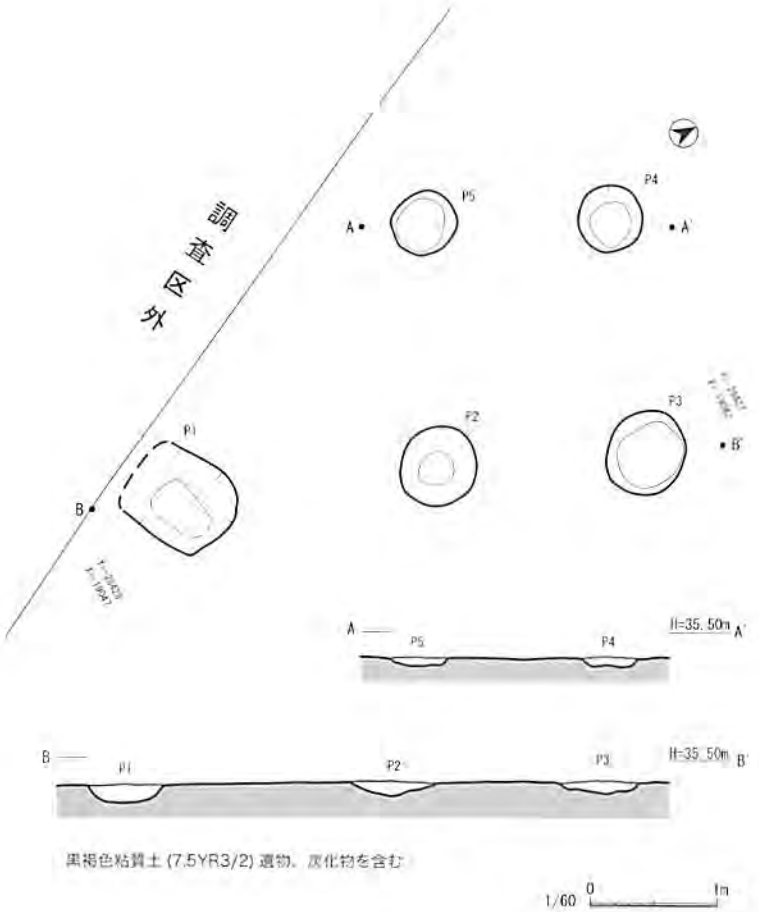


Fig.14　北島遺跡群１区掘立柱建物 SB001（上）・SB002（下）実測図



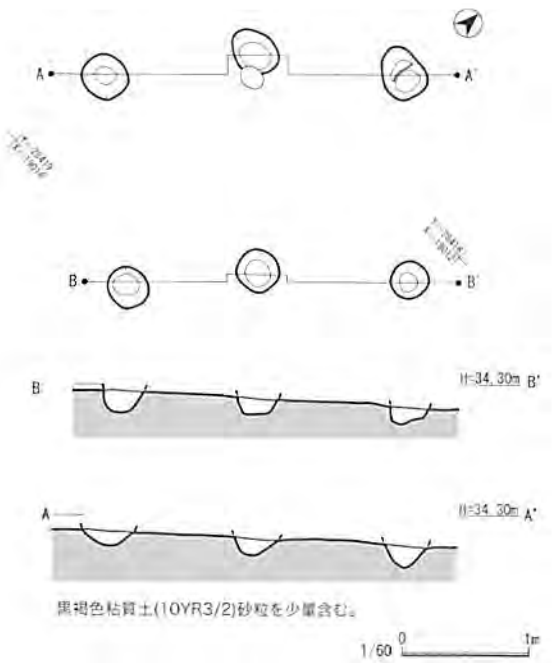


Fig.15　北島遺跡群 1 区掘立柱建物 SB003（上）・SB004（下）実測図

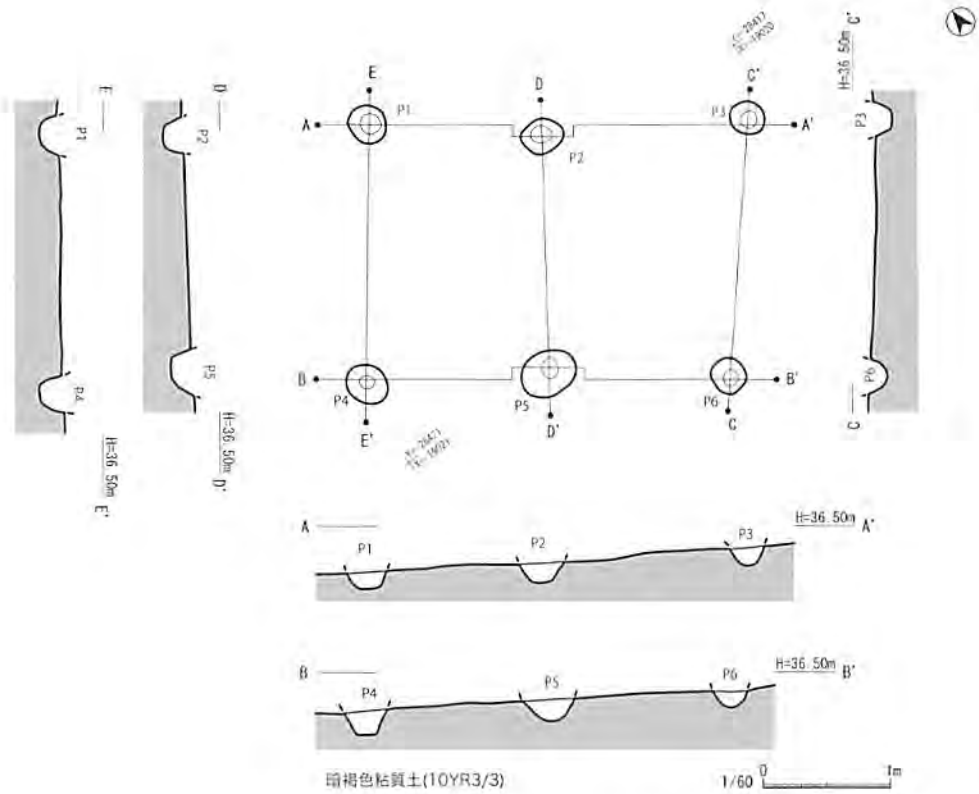


Fig.16　北島遺跡群 1 区掘立柱建物 SB005 実測図

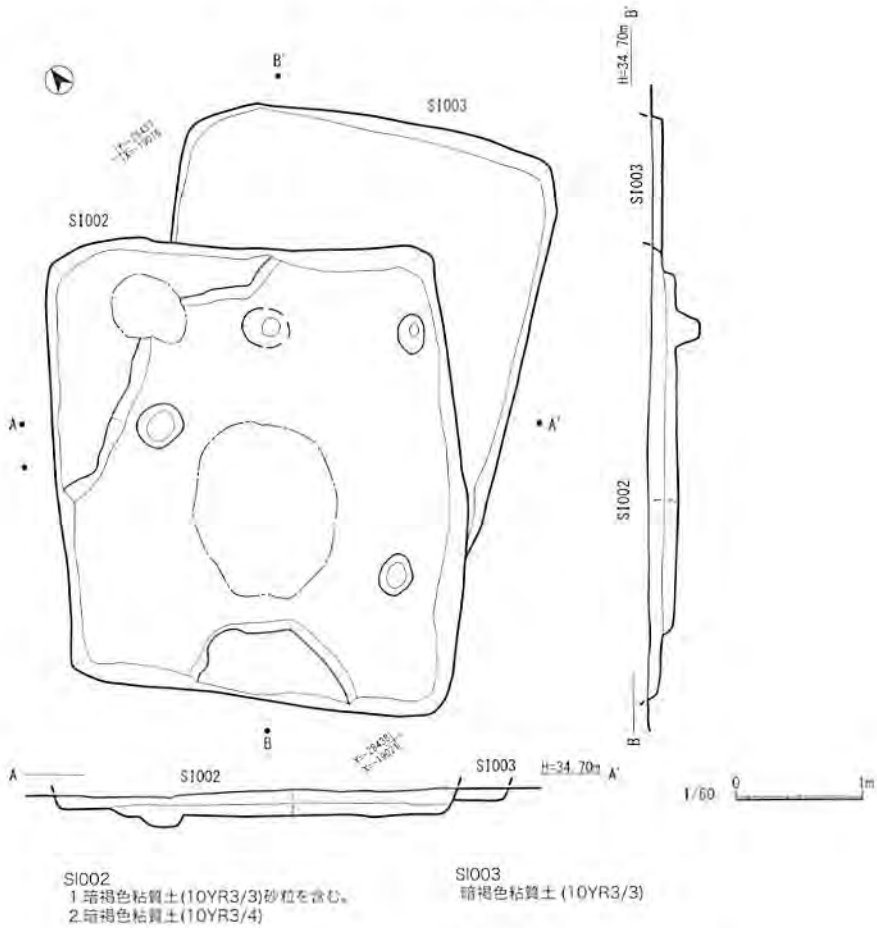
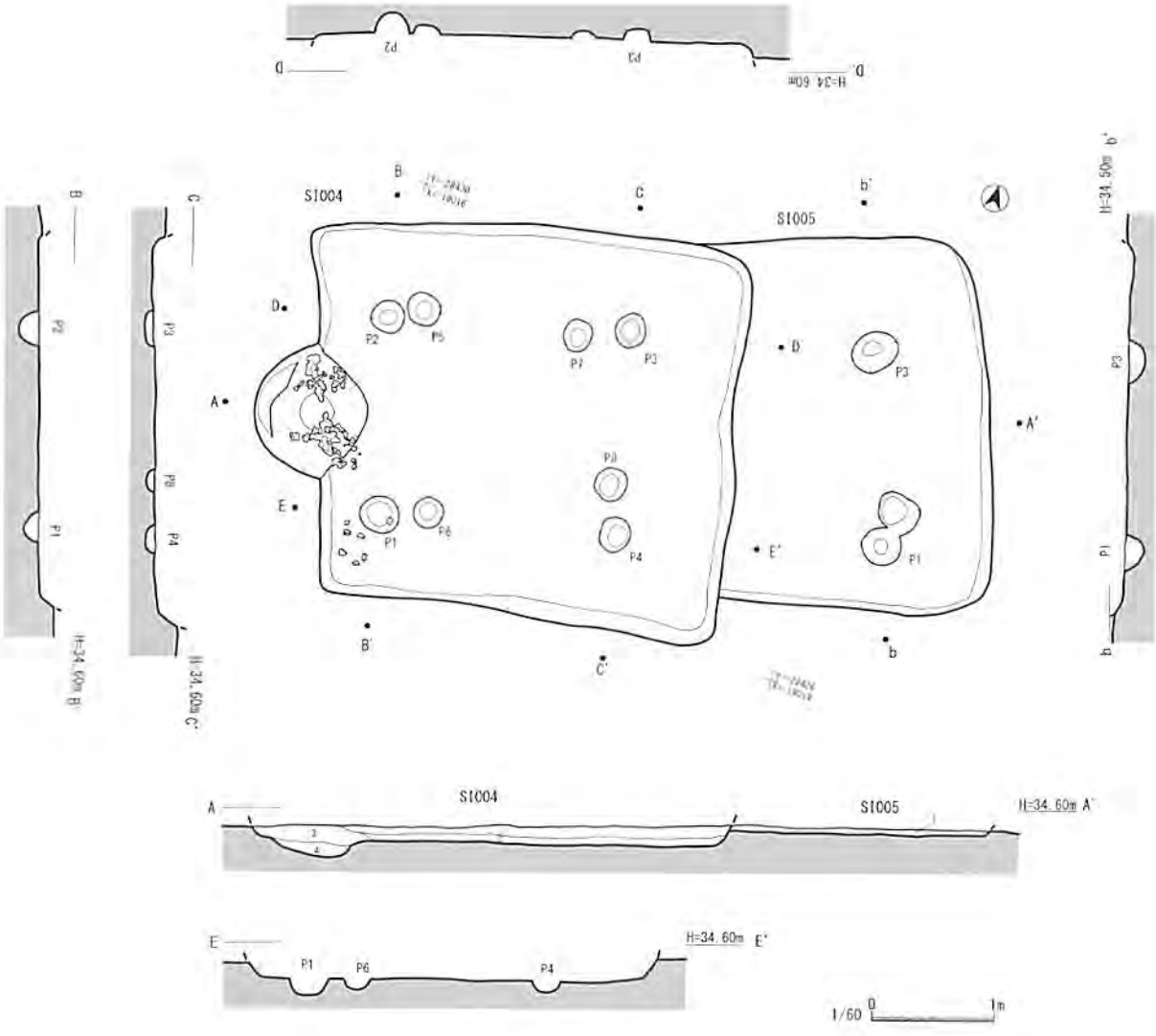


Fig.17　北島遺跡群 1 区竪穴建物 SI002・SI003 実測図



SI004
1. 黒褐色粘質土 (7.5YR3/2)
2. 黒褐色粘質土 (7.5YR2/3)
3. 極暗褐色粘質土 (7.5YR2/3) 明褐色の焼土の塊を少量含む。
4. 暗褐色粘質土 (7.5YR3/3) 焼土を多く含む。

SI005
1. 暗褐色粘質土 (10YR3/3)

Fig.18　北島遺跡群1区竪穴建物 SI004・SI005 実測図

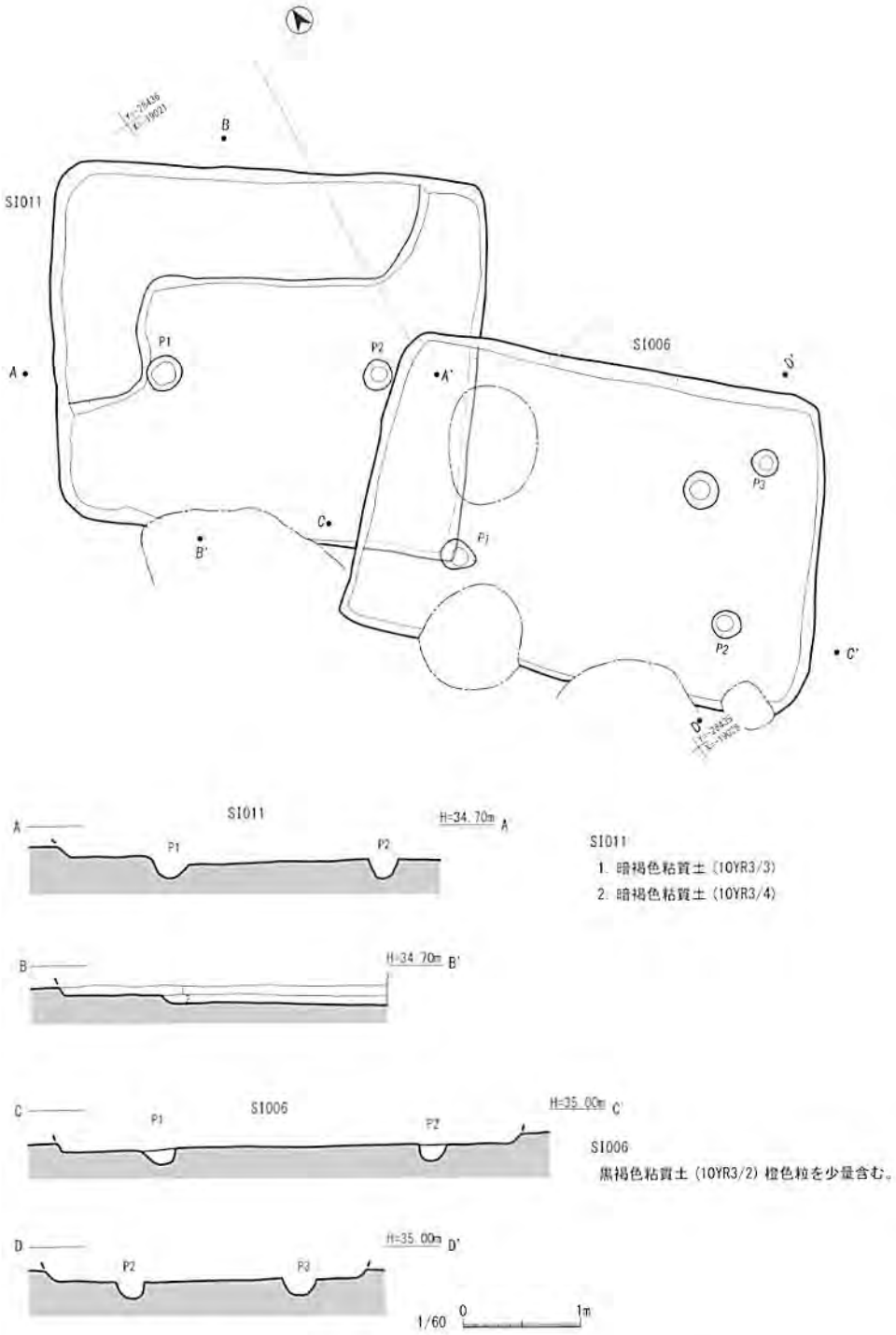
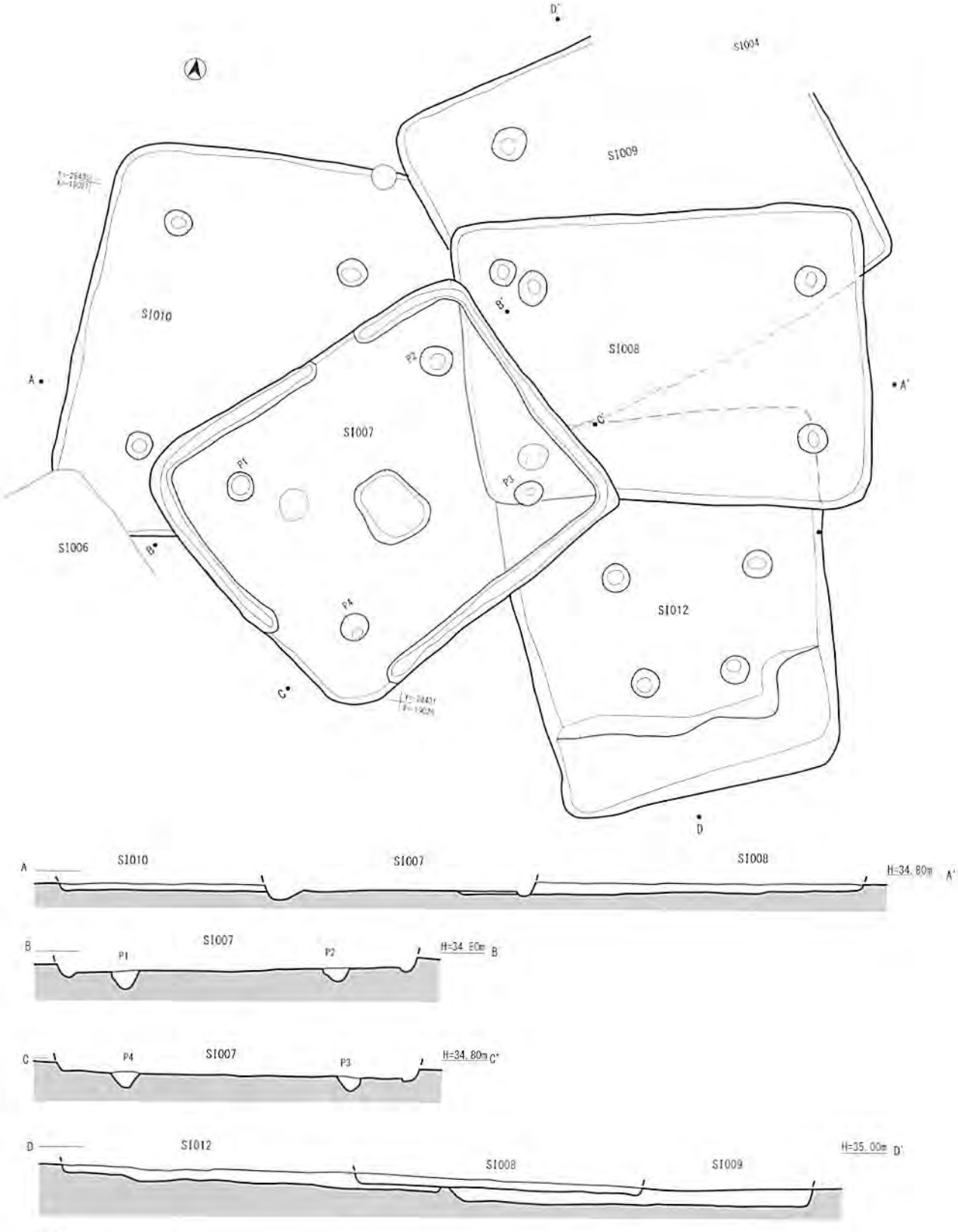


FIg.19　北島遺跡群 I 区竪穴建物 SI006・SI011 実測図



SI007
黒褐色粘質土（7.5YR3/2）
SI008
暗褐色粘質土（10YR3/3）
SI009
暗褐色粘質土（10YR3/3）
SI012
暗褐色粘質土（10YR3/4）橙色粒をわずかに含む。

Fig.20　北島遺跡群１区竪穴建物 SI007 ～ SI010・SI012 実測図

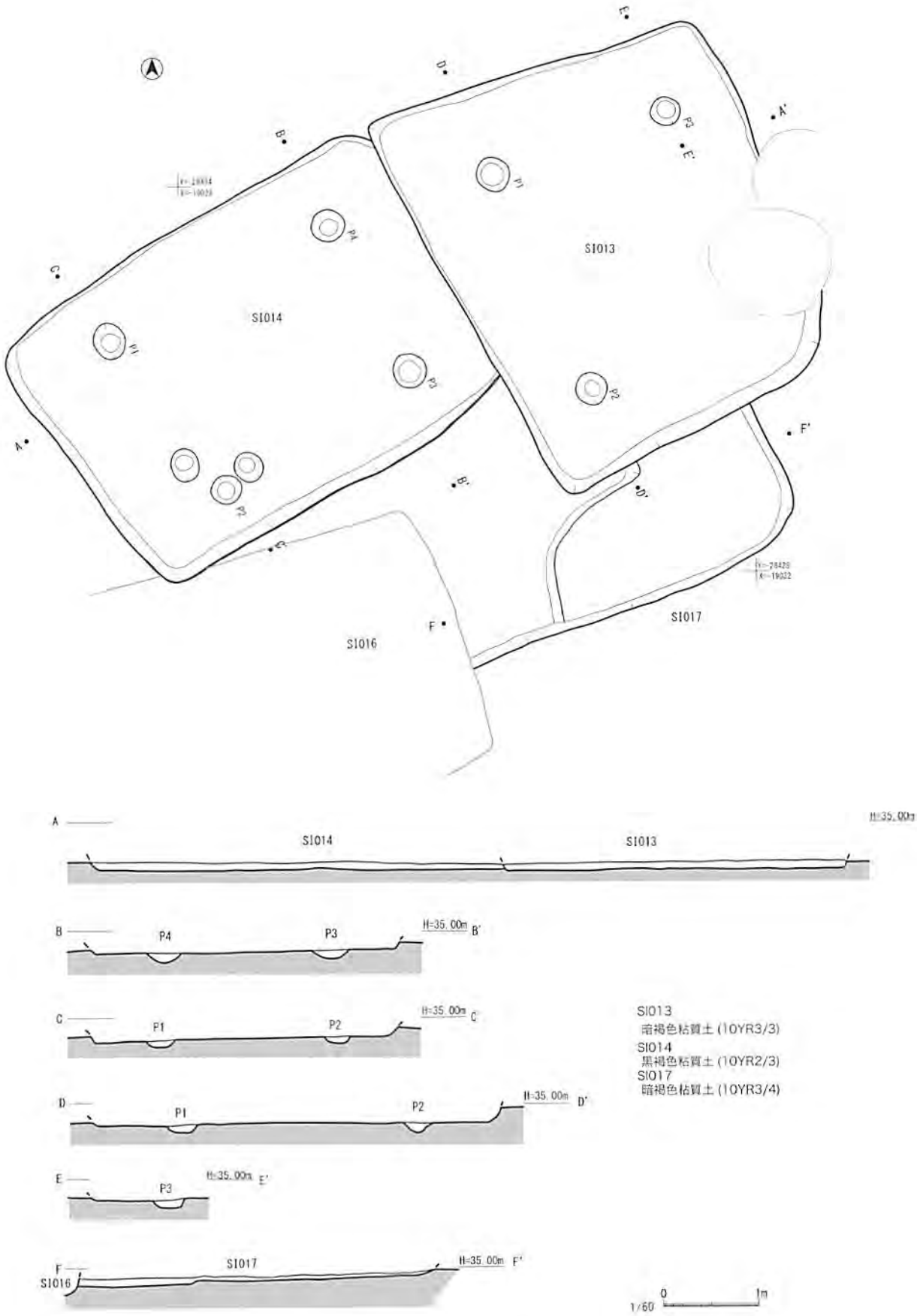


FIg.21　北島遺跡群 1 区竪穴建物 SI013・SI014・SI017 実測図

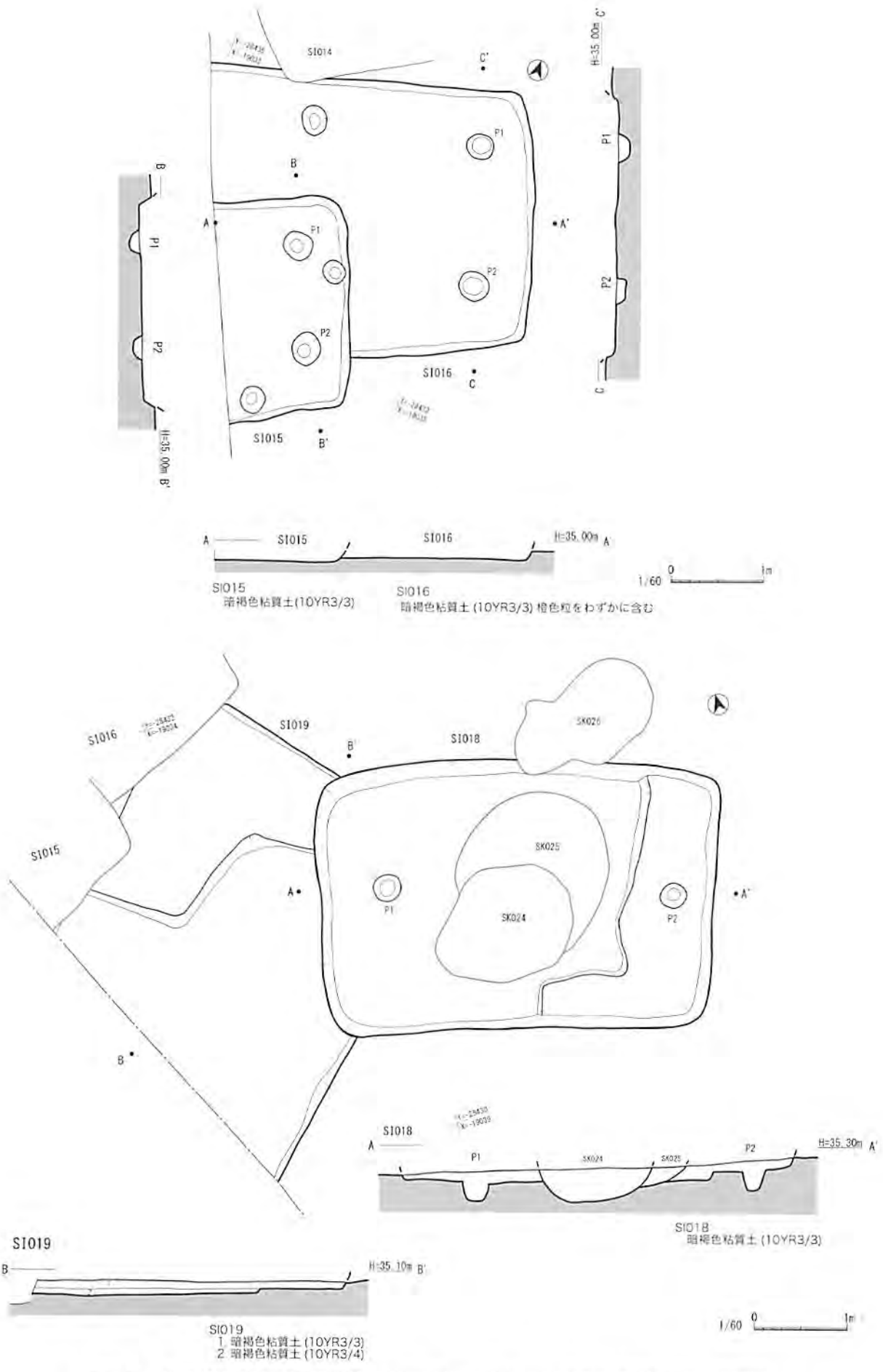


Fig.22　北島遺跡群1区竪穴建物SI015・SI016（上）、SI018・SI019（下）実測図

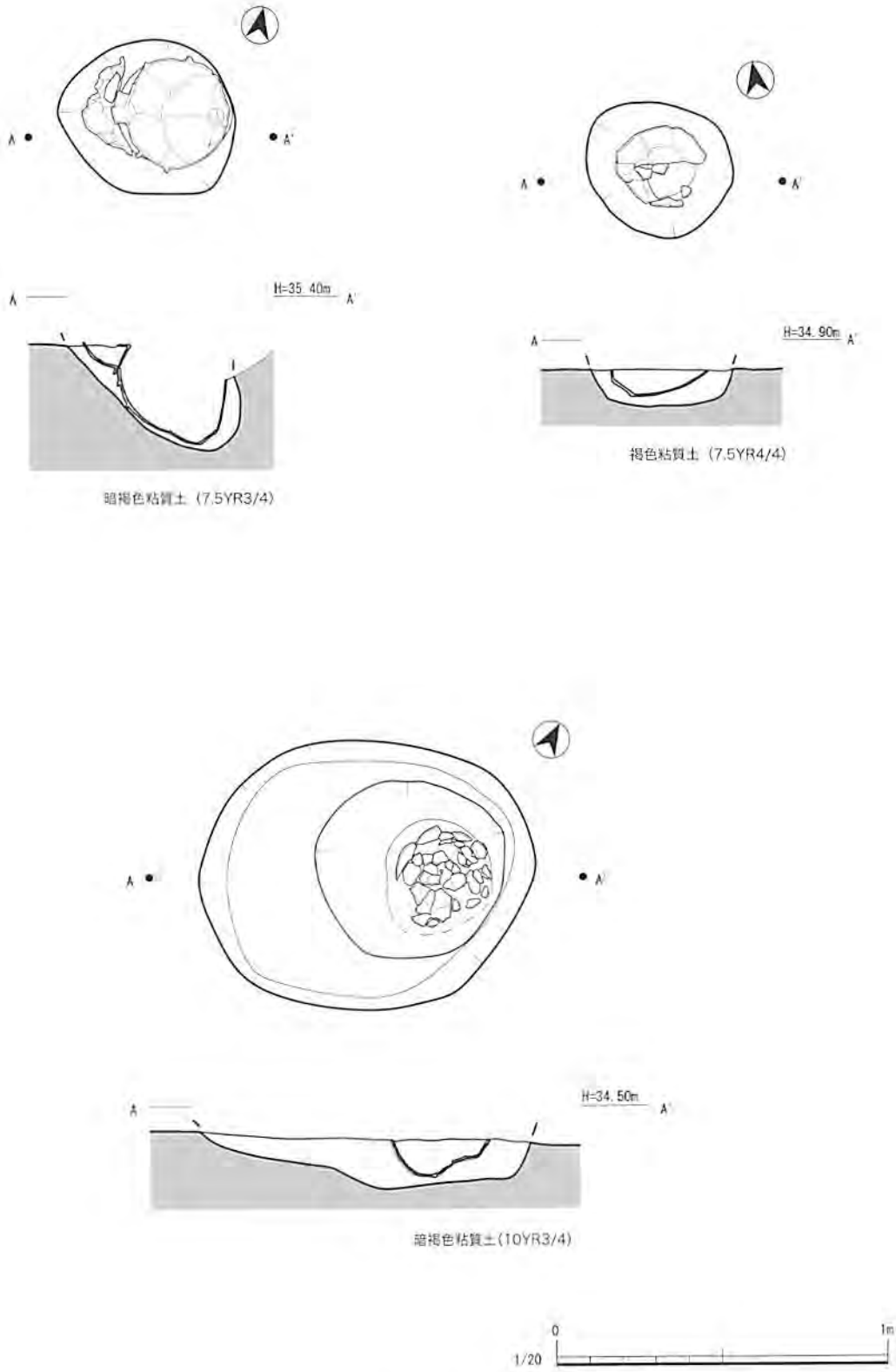


FIg.23　北島遺跡群１区墓 ST001（左上）・ST002（右上）・ST003（下）実測図

ている範囲で計測するとN-52°-Eを測る。

甕棺ST001（Fig.23）調査区南側に位置し検出した甕棺墓。上部を大きく掘削されているため上甕の大半と下甕の口縁部を半分程度欠損する。上甕（4）は小型甕を蓋とし、下甕口縁と併せ口に被せる。

掘り方は甕棺が入る大きさで素掘りし、埋納角度が46.5°で呈する。掘り方に段を有するかは不明。

甕棺ST002（Fig.23）ST001よりも残存度が低く、下甕の半分のみ残る。残る部位から中型の甕と見られる。掘り方は素掘りで段は残らない。甕埋納角度等は不明。

甕棺ST003（Fig.23）ST002と同様に削平が大きいため、遺構の残存度は悪い。上器は薄く表面が剥離し、残りが非常に悪いため図示していない。甕形土器の下甕の底部付近がわずかに残る。遺構掘り方は段を有し、上甕が段上に来るようにあたると見られる。下端付近は樹痕による撹乱が入り、一部乱れる。

【2区】（Fig.24）

1区から南に向かう緩斜面上に位置し、現在の道路面より上位に位置する。遺構検出面は1面で、遺物包含層は残らない。遺構の時期は2期に及ぶ。

溝SD001・SD002（Fig.24） 調査区北側に位置し検出した遺構。検出面は浅く、現代の表土を剥いだ後に最上面の遺構として検出した。調査した遺構で一辺が10.5mを測り、南辺でほぼ直角に曲がり、調査区外へと延びる。断面は逆台形で遺物等は含まない。SD002もSD001に切られ検出した遺構。ほぼ同時期の遺構と見られ、東側上端を切られる状態で確認している。遺構は途中でSD001により重なり消滅する。断面は逆台形で埋土中には遺物は含まない。

溝SD003（Fig.24） 先に記した溝とは違い、段落ちとも思わせる様相を呈している。検出した上端は浅く上端直下には、途中途切れるが1条の溝が存在する。断面は逆台形を呈し、埋土中からの遺物の出土はない。SD001・SD002とほぼ平行にして掘削されていることから同時期の遺構と考えられる。

竪穴建物SI001～SI003（Fig.25）調査区のほぼ中央に位置し3軒切り合う遺構。切り合い関係はSI003→SI002→SI001の関係となろう。SI002、SI003は直接切り合い関係はないが、最終切り合いのSI001主軸がSI002と同軸となることから、古い建物軸を踏襲し掘削したものと考えられる。規模はSI003は確認できた辺で一辺2.9m、SI002は2.95m、復原平面形は正方形、SI001は主軸をN-79°-Wとほぼ東西におき、主軸長（長辺）4.1m、短軸3.22mと平面形が長方形を呈する。いずれの竪穴建物も主柱穴は検出されておらず、柱数は確認できていない。埋土中からの出土遺物はない。

土坑SK001（Fig.26）長方形の掘り方を有する遺構。全長（A-A'）1.32m、幅は中心の直交する位置で67cmを測る。遺構のほぼ中心部から白磁玉縁椀（5）が1点出土している。また、埋土中から白磁合子（8）が出土している。土層断面等の記録は残されていないため、木棺を有していたかは分からないが、出土遺物から墓である可能性もある。

FIg.24　北島遺跡群２区遺構配置図・溝 SD001 ～ SD003 断面図

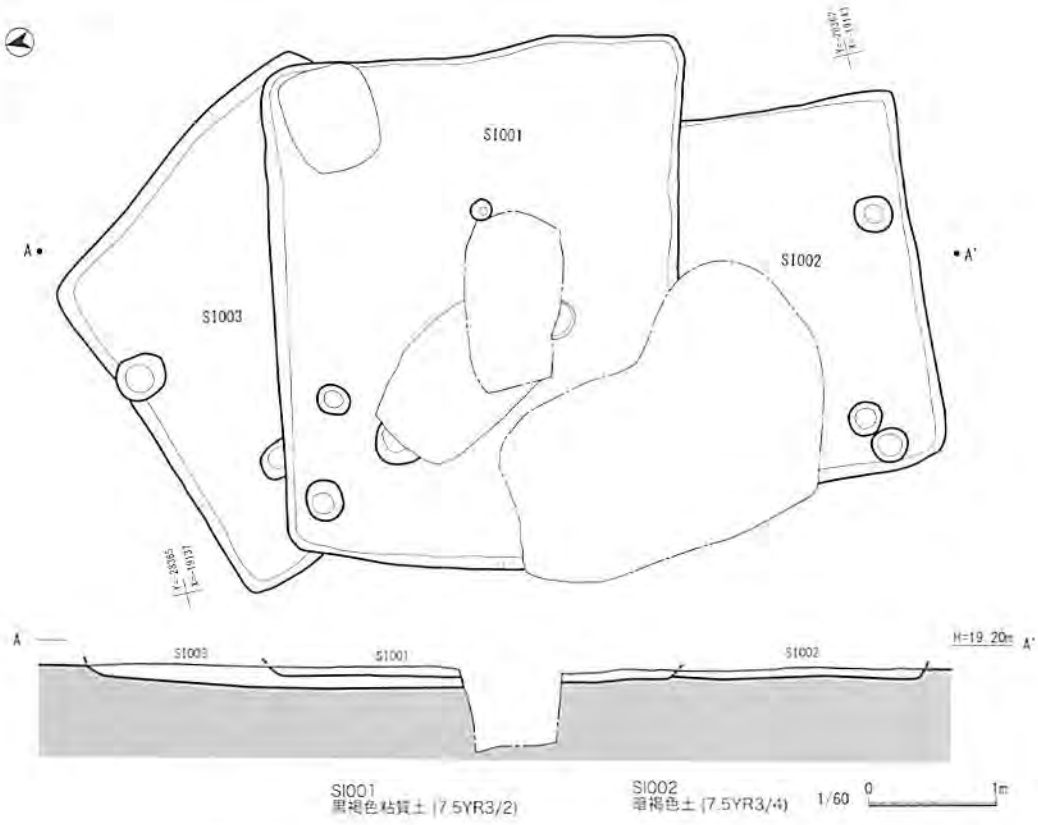


FIg.25　北島遺跡群２区竪穴建物 SI001 ～ SI003 実測図

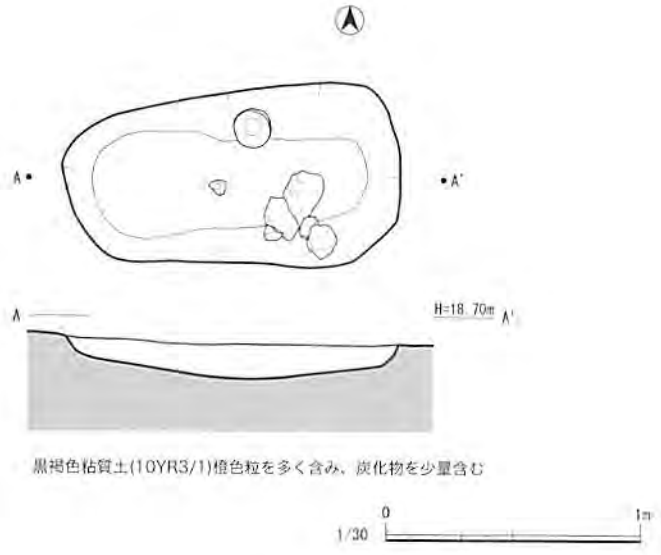


FIg.26　北島遺跡群２区土坑 SK001 実測図

【3区】(Fig.28)

今回調査を実施した調査区のなかで、最も南に位置する調査区で標高も最も低い。遺構は全体に広がり検出したが、出土遺物はほとんどなく遺構の時期を判断する材料がない。検出した遺構は、すべて7層上面での検出である。

溝SD001・SD002　遺構掘削方向がほぼ南北にあたり、浅い掘り込みを有する。埋土中からの出土遺物はない。

溝SD003　遺構はほぼ東西に軸を置き、掘削される。上端下端とも深度が浅く、埋土もSD005上層の土と類似すること、南側上端線がほぼ重なることからSD005の埋土、上層にあたる可能性もある。

溝SD005　調査区のなかで最も広い面積を占めるのが溝SD005である。調査区北側でL字状に曲がり、浅く広がり蛇行する。遺構は調査区外に向かい深くなる。

竪穴建物SI001・SI002　遺構中央で検出した竪穴遺構。調査時の記録、図面からも1区で検出している竪穴建物と同じとは判断できないことから、個別での説明は省く。

その他の遺構　土坑、柱穴遺構が多数検出されている。掘り込み面は溝と同様の面であるが、掘立柱建物等を構成するものではないため、個別での図示は省く。

(3) まとめ

今回の調査区で時期を判断できたのは1区、2区の一部であった。1区は、Fig.27で図示したように古代の竪穴建物群と弥生後期の特徴を有する竪穴建物とに分けられる。弥生期の竪穴建物と判断されるのは、SI002、SI003、SI011、SI012、SI017、SI018、SI019の7軒である。遺構の広がりが調査区西側にあたり全体を把握できているものではないが、この時期の竪穴建物配置状況から、中央に広場を有しているものと考えられる。

また、本調査区で検出した竪穴建物から遺物の出土がないというのも一つの特徴と言えよう。通常、弥生後期の竪穴建物であれば、雑器としての甕、壺類が破片でも出土する場合が多いが、本遺構からの出土は皆無であった。また、古代の遺構と判断した上層検出の竪穴建物からも出土遺物がほとんどないことから一つの特徴とも見られよう。

1区4層上面で検出した掘立柱建物、溝等の遺構は出土遺物が少ないことから時期判断に迷うが、中世に存在していたとされる「北島城」の一部である可能性もある。しかし、積極的に時期を与えるものではない。

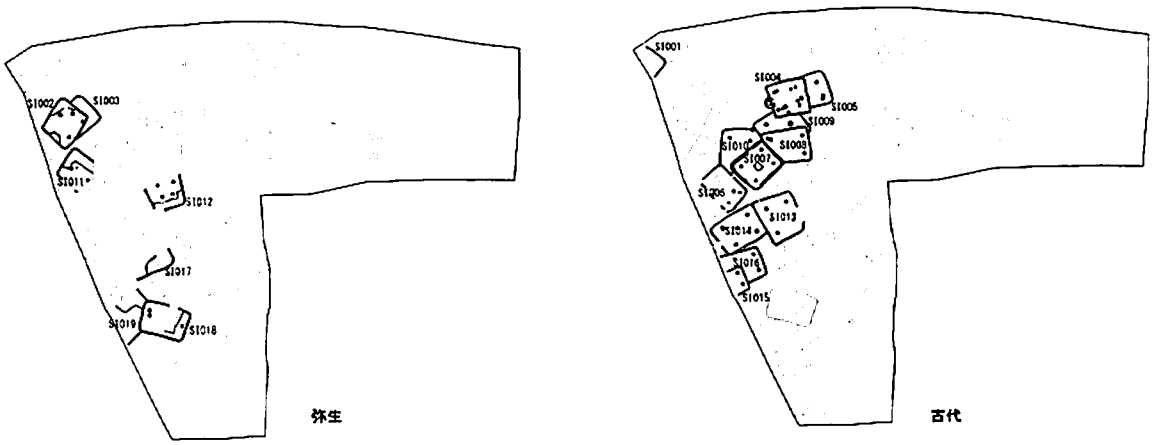


Fig.27　北島遺跡群1区 遺構変遷図

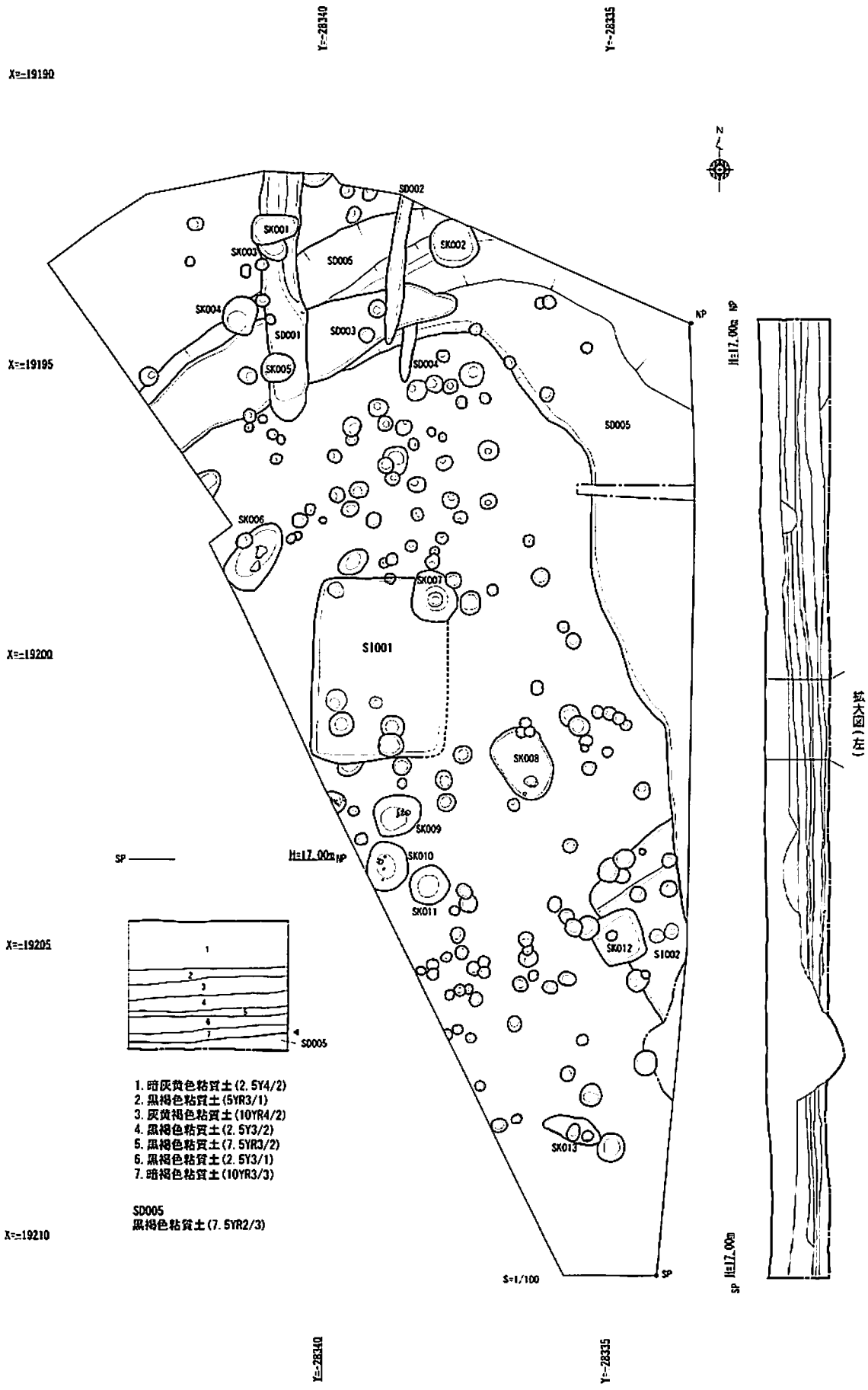


Fig.28　北島遺跡群３区遺構配置図

4　万楽寺出口遺跡

（1）遺跡の立地と地形、既往の調査

万楽寺出口遺跡は、金峰山三ノ岳から延びる丘陵上に位置し、丘陵が台地を形成し始める変化点上にあたる。遺跡は熊本市立熊本博物館の富田紘一氏により、以前から甕棺が出土する遺跡として報告・周知されていたが、1994年（平成6年）に県営農村活性化住環境整備事業に伴い、熊本県により隣接する山海道遺跡、太郎迫遺跡とともに大規模な発掘調査を実施し、報告[4・5]がなされている。

（2）遺構各説

竪穴建物SI001【縄文晩期の竪穴建物】（Fig.31）調査1区の南端、G-6Gridで検出した遺構。平面形はほぼ円形で南北に4.1m、東西に4.6mを測る。検出深度は浅く数センチであった。本竪穴建物に伴う柱穴・炉等は確認されていない。

竪穴建物SI002～SI007【古代の竪穴建物】（Fig.32）調査1区のやや北側、C-2・3Gridで検出した掘立柱建物、調査区中央のC-4Gridで検出した竪穴建物の2種、7基が検出されている。

SI002は平面形が長方形で主軸を南北におく。長径2.9m、短径2.15mを測る。本遺構に伴う柱穴・炉等は確認されていない。SI003北辺に作り付け竈の痕跡を残す。主軸は南北におき長径3.3（推定）、短径2.9mを測る。竈痕跡は壁際にT字状に残り、下端付近に楕円形掘り込みを残す。一部に硬化面の広がりが見られるが、残りが悪いため全体範囲の把握はできていない。本遺構に伴う柱穴等は確認されていない。SI004は、SI002の西側に位置し、遺構の大半をSI002に切られる。確認できる遺構ラインが西辺のみであり、4.2mを測る。発掘調査時点では、SI002からSI004は3軒の個別遺構として捉えられているが、埋土の土色・土質、遺構の検出ライン、遺構深度（下端のレベル）、切り合い線等を勘案すると、1辺が約4m四方の1軒の竪穴建物と見られる。遺構検出の時点で、埋土の入り具合で個別の遺構と誤認している可能性が高い。出土している遺物SI002（1.2）、SI004（4～9）からも同時期の遺構と見ることができる。

SI005は西辺を僅かにSI002、SI003により切られ、更にSI006を切り検出した遺構。遺構の約2/3を調査区外に置く。検出面積が少ないため、主軸方向は不明。検出できた南北側の規模では1辺が約3.1mを測る。床面中心部には硬化面が広がるが、全体像は不明。SI006はこれまでの遺構に切られ、北東隅が1角残るのみである。床面には硬化面の広がりが確認されているが、詳細は不明。

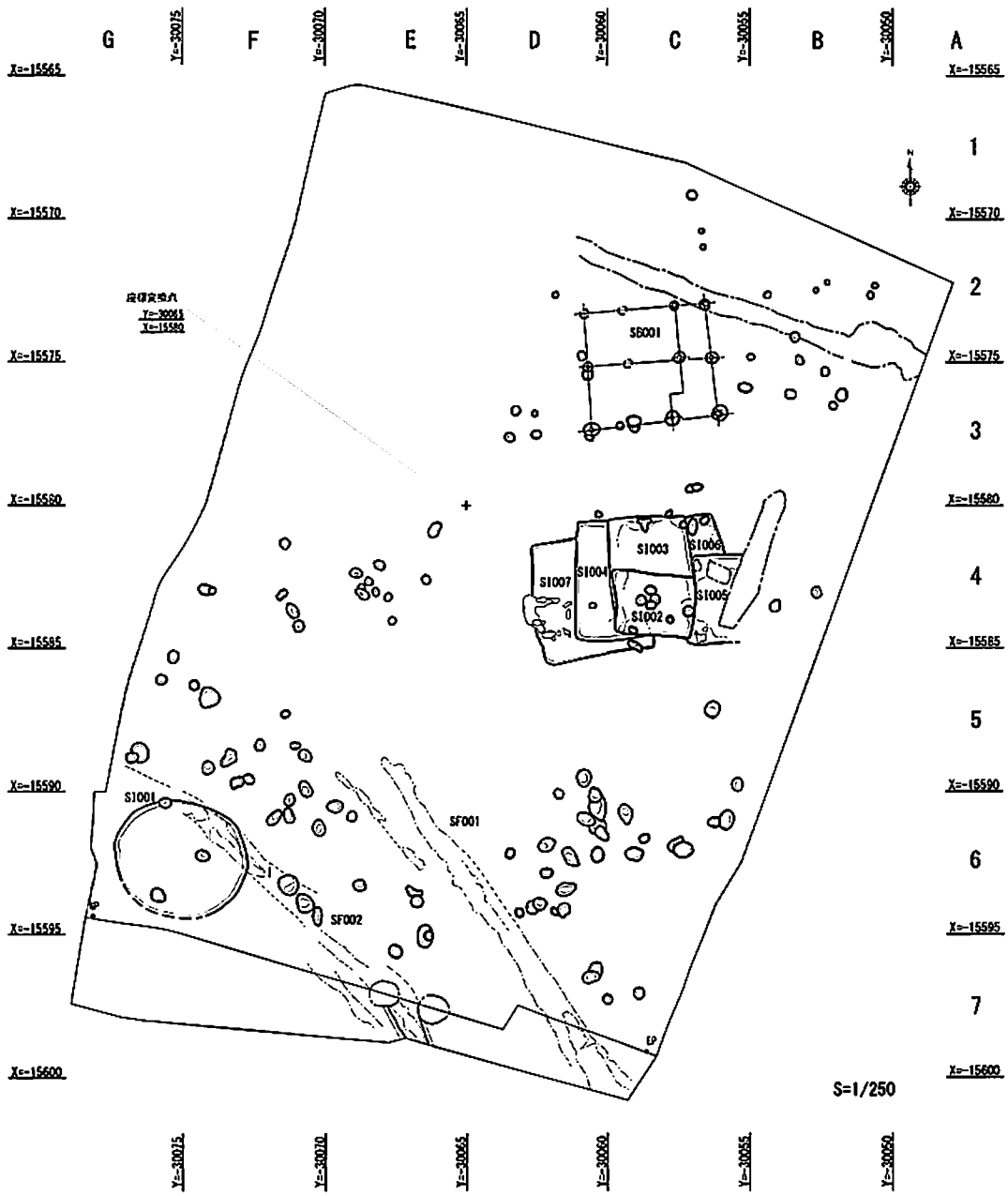
SI007はSI004の西側に位置し、西辺に作り付け竈本体の崩壊した粘土塊の広がりをみることができる。よって東西方向に主軸を有し、東西4.2m×南北4.0mの遺構と判断される。竈痕跡は粘土の崩落のみで、燃焼面、掘り方等は確認されていない。

掘立柱建物SB001（Fig.33）2間×3間で検出した遺構。主軸は3間の柱が並ぶ長辺側としてN-85°-Eに置く。柱穴間の全長は東西に4.26m南北に4.05mを測る。柱穴は基本総柱を形成していると考えられることから未検出の部分には柱穴推定ラインを点線で示している。検出できたものについては、断面観察の結果から柱痕を明瞭に確認している。

道路状遺構SF001・SF002【近世の道路状遺構】（Fig.30）調査1区内で道路状遺構を2基検出している。SF001は主軸をN-35.5°-Wにおき、全長14.5m、最大幅1.4mを測り、ほぼ直線を成している。また、SF002は主軸をN-47°-Wにおき、全長11.9m、最大幅1.3mを測るが、調査区の際でやや南に折れる。いずれも主軸に大きな差はなく、ほぼ自然地形の落ちに沿った道路状遺構であることから、大規模なものとなる可能性は低い。よって、2本の道路状遺構は村内移動のための里道程度の道であった可能性が高い。

4　熊本県教育委員会『万楽寺出口遺跡・山海道遺跡』熊本県文化財調査報告第185集　1999
5　熊本県教育委員会『太郎迫遺跡・妙見遺跡』熊本県文化財調査報告第186集　1999

Fig.29　万楽寺出口遺跡周辺遺跡分布図（S=1/5,000）



南側土層断面

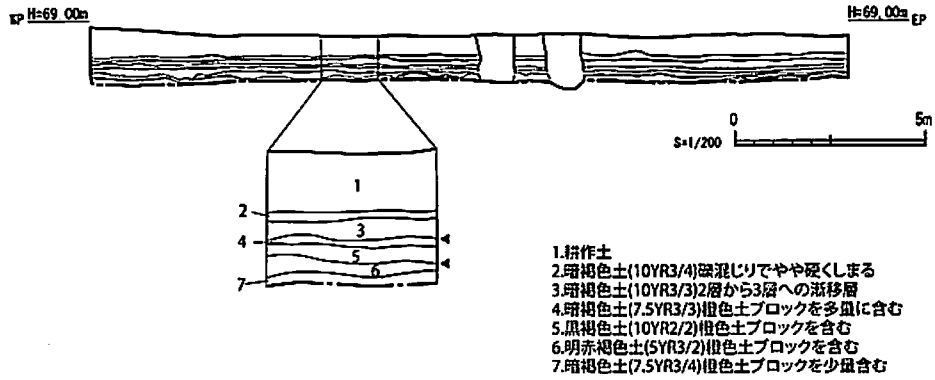


Fig.30　万楽寺出口遺跡遺構配置図

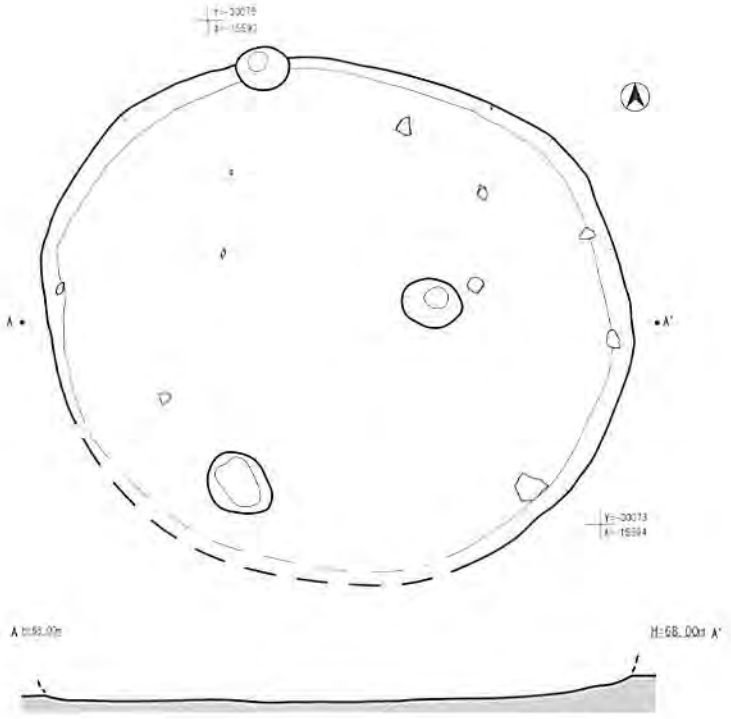


Fig.31　万楽寺出口遺跡竪穴建物 SI001 実測図

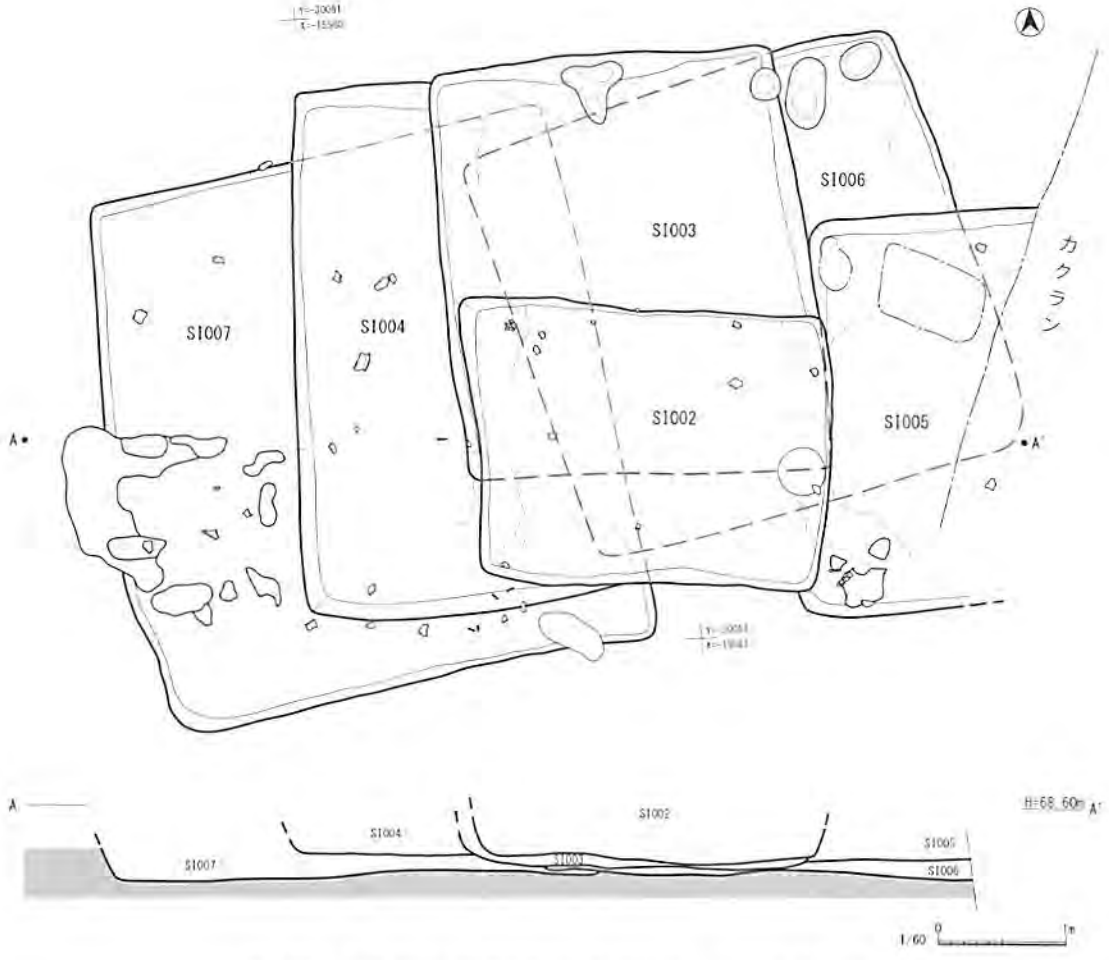


Fig.32　万楽寺出口遺跡竪穴建物 SI002 ～ SI007 実測図

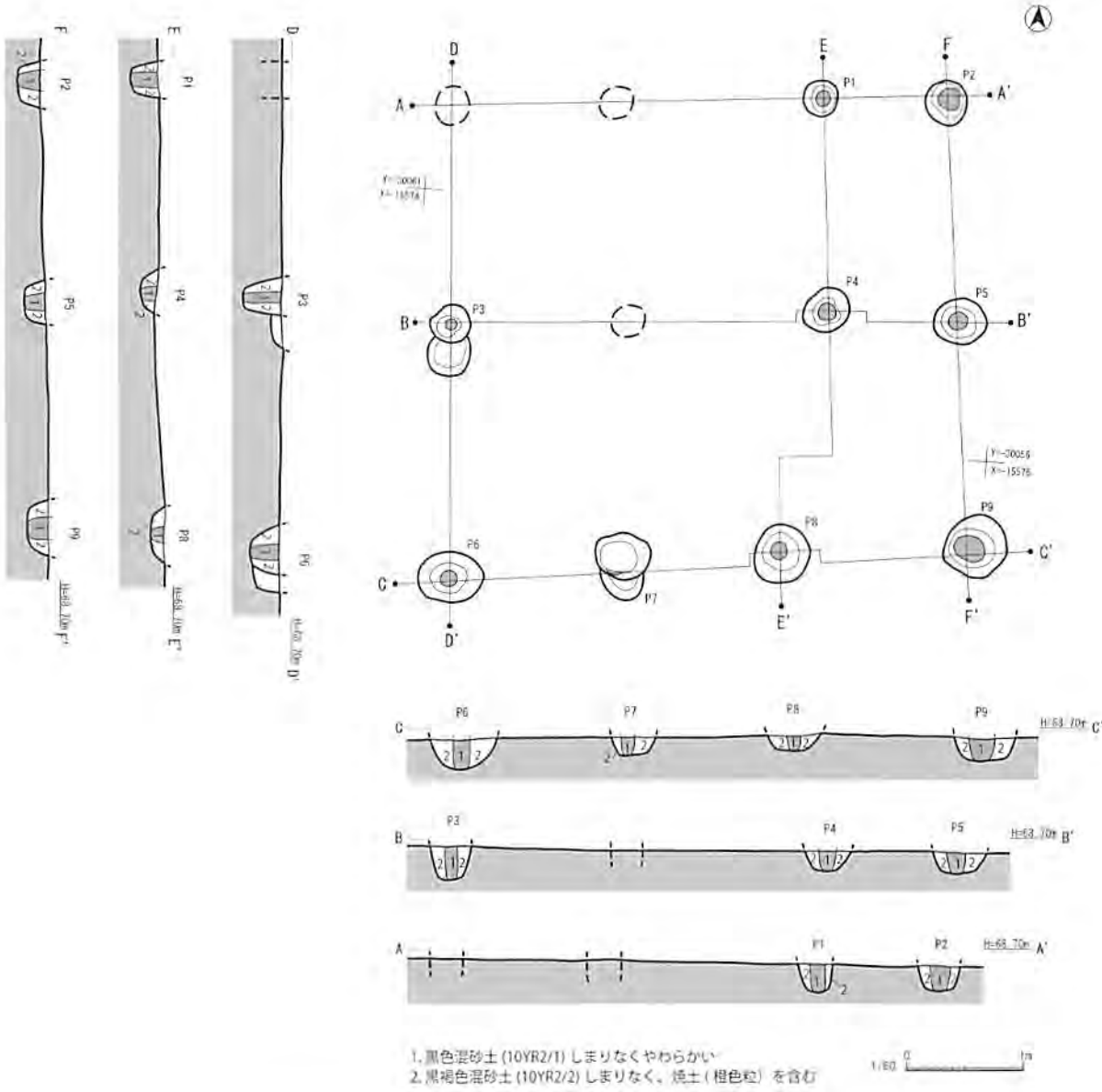


Fig.33　万楽寺出口遺跡掘立柱建物 SB001 実測図

（3）まとめ

本遺跡で検出した明確な遺構は、縄文晩期の竪穴建物、古代の掘立柱建物、竪穴建物、近世の道路状遺構であった。しかし、調査区から持ち帰られている遺物は縄文晩期土器が多数を占めている。本遺跡の土層を確認するも県内で台地状で形成される縄文晩期相当層の土が残されていないことから、本遺跡内から出土する縄文期の土器は、大部分が背後の台地上からの流れ込みと見られる。背後地は、県内でも遺跡の面積、出土遺物の密度等でも有数の遺跡である「太郎迫遺跡（43-01-013）」が存在するため、土地の開墾等による土の移動で当該調査地まで入ってきたものであろう。

調査を実施した場所は、丘陵中段に位置し、緩やかに南に位置する西谷川へ落ちる地域に存在する。この緩やかな緩斜面上に古代の遺構が残されていることから、当時の村の向きとしては風のあたらない丘陵を背後におき、川に面する方向を向いていたのではなかろうか。また、古代の遺構が検出された斜面地から川へ下った範囲は現在まで太郎迫地区の中心であることから、古代の遺構はこの現在の集落の下に広がっている可能性が高い。

5 各遺跡の出土遺物

遺物実測図

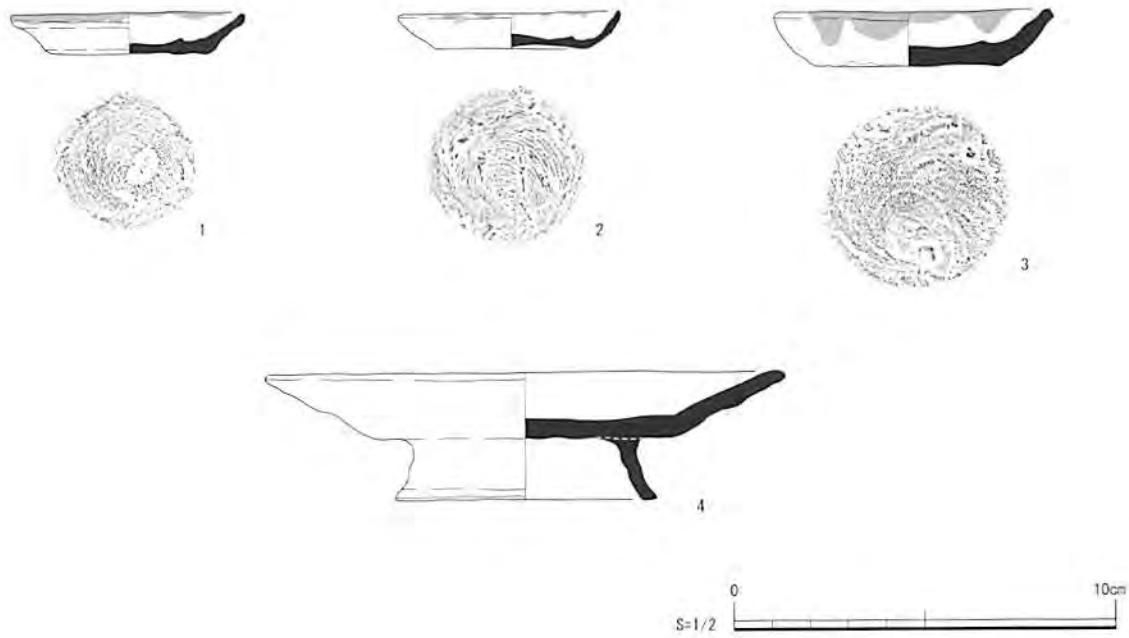
遺物観察表

花岡山・万日山遺跡群

新馬借遺跡

北島遺跡群

万楽寺遺跡



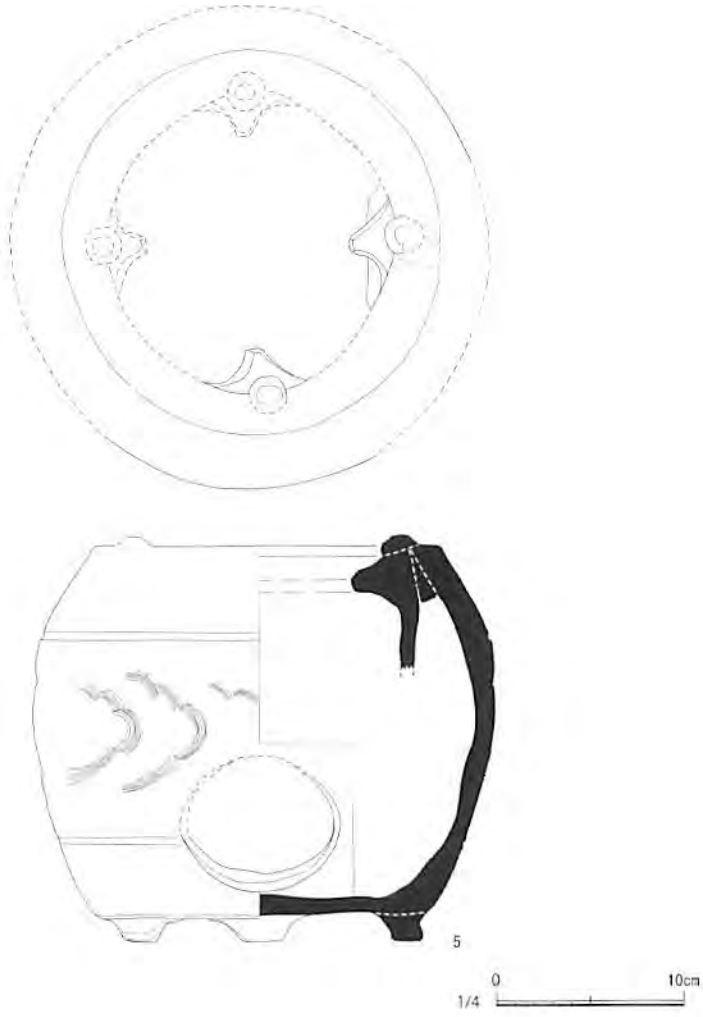


Fig.34　花岡山・万日山遺跡群調査区出土遺物実測図

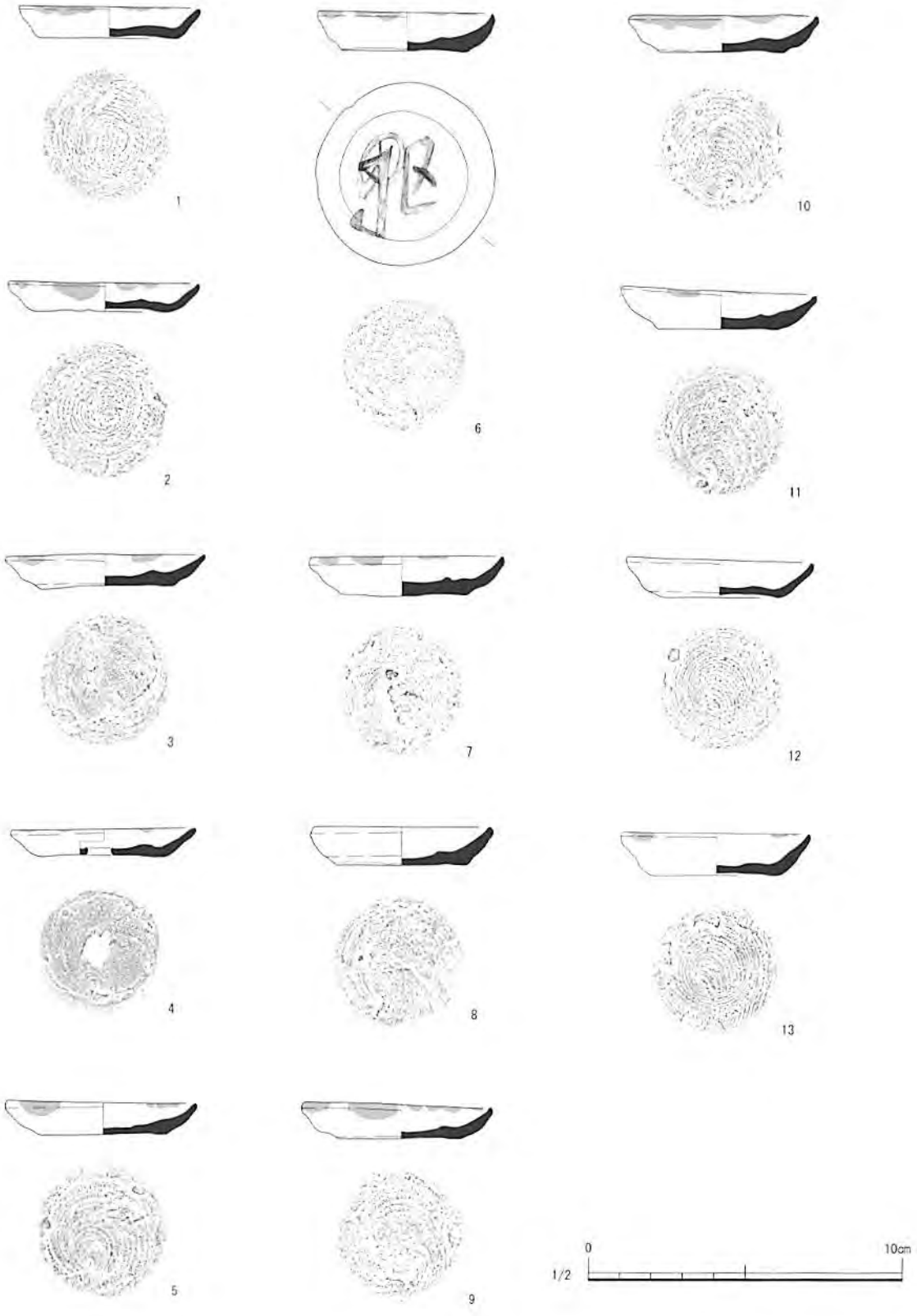


Fig.35　新馬借遺跡調査区出土遺物実測図－①

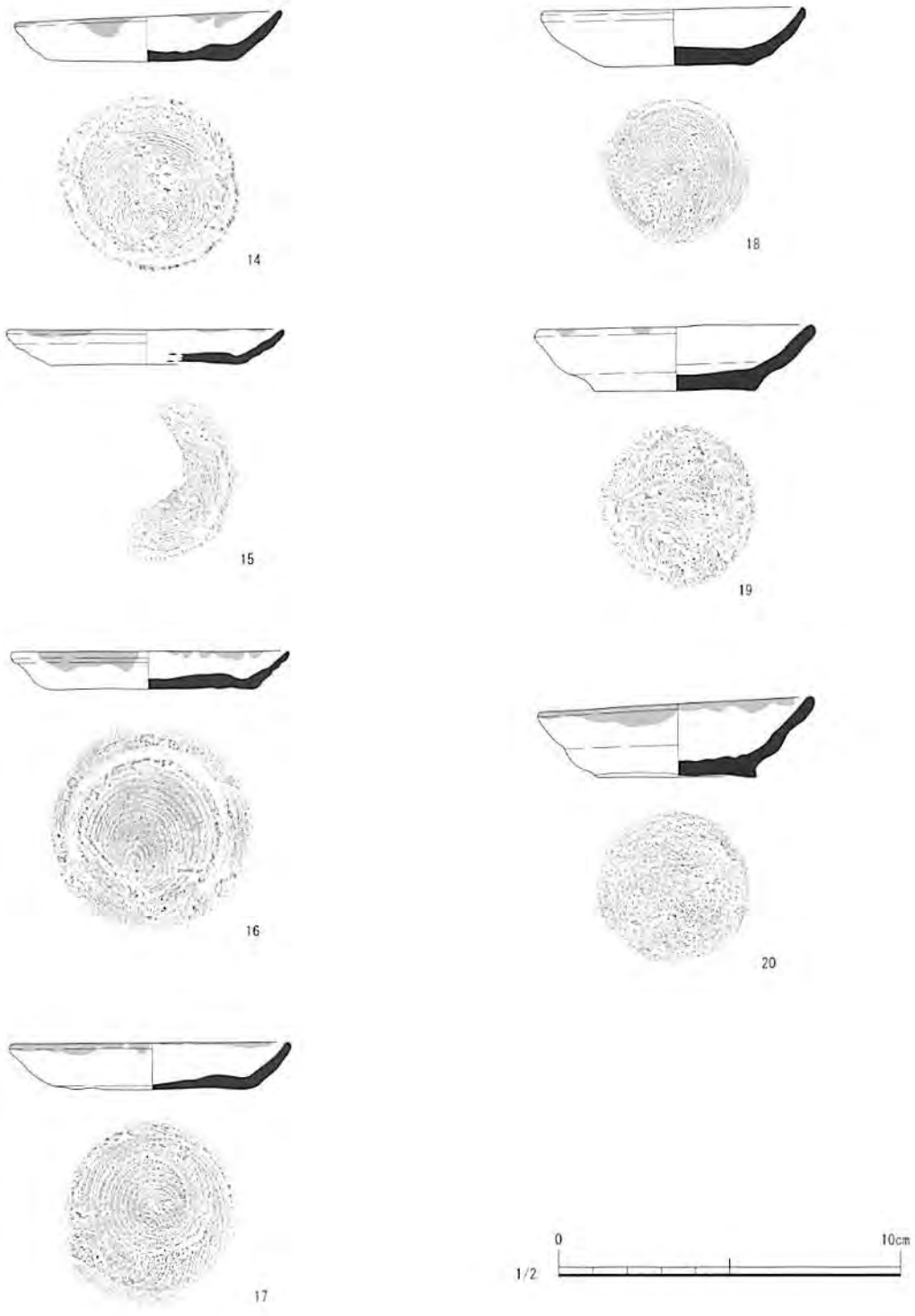


Fig.36　新馬借遺跡調査区出土遺物実測図－②

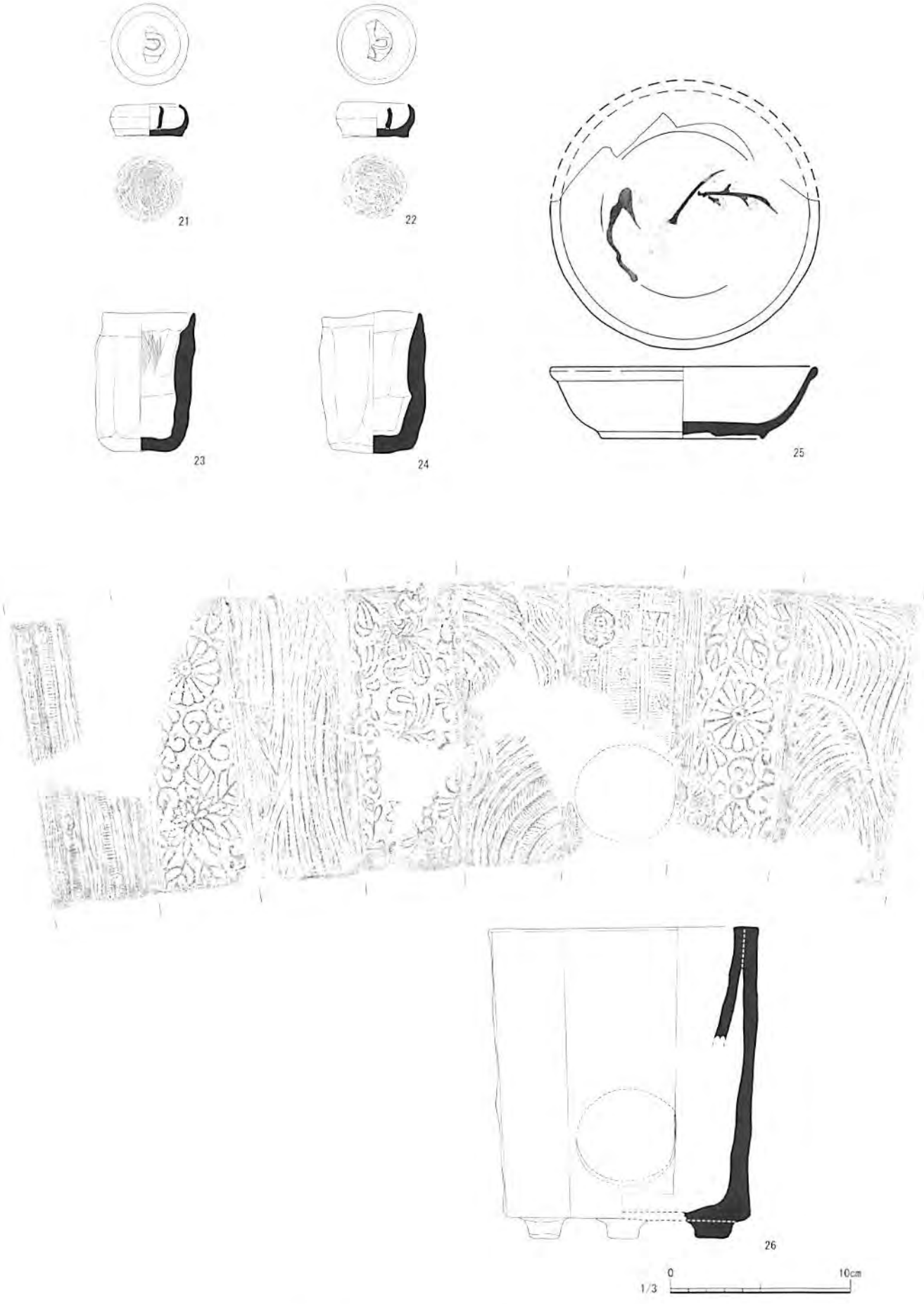


Fig.37　新馬借遺跡調査区出土遺物実測図－③

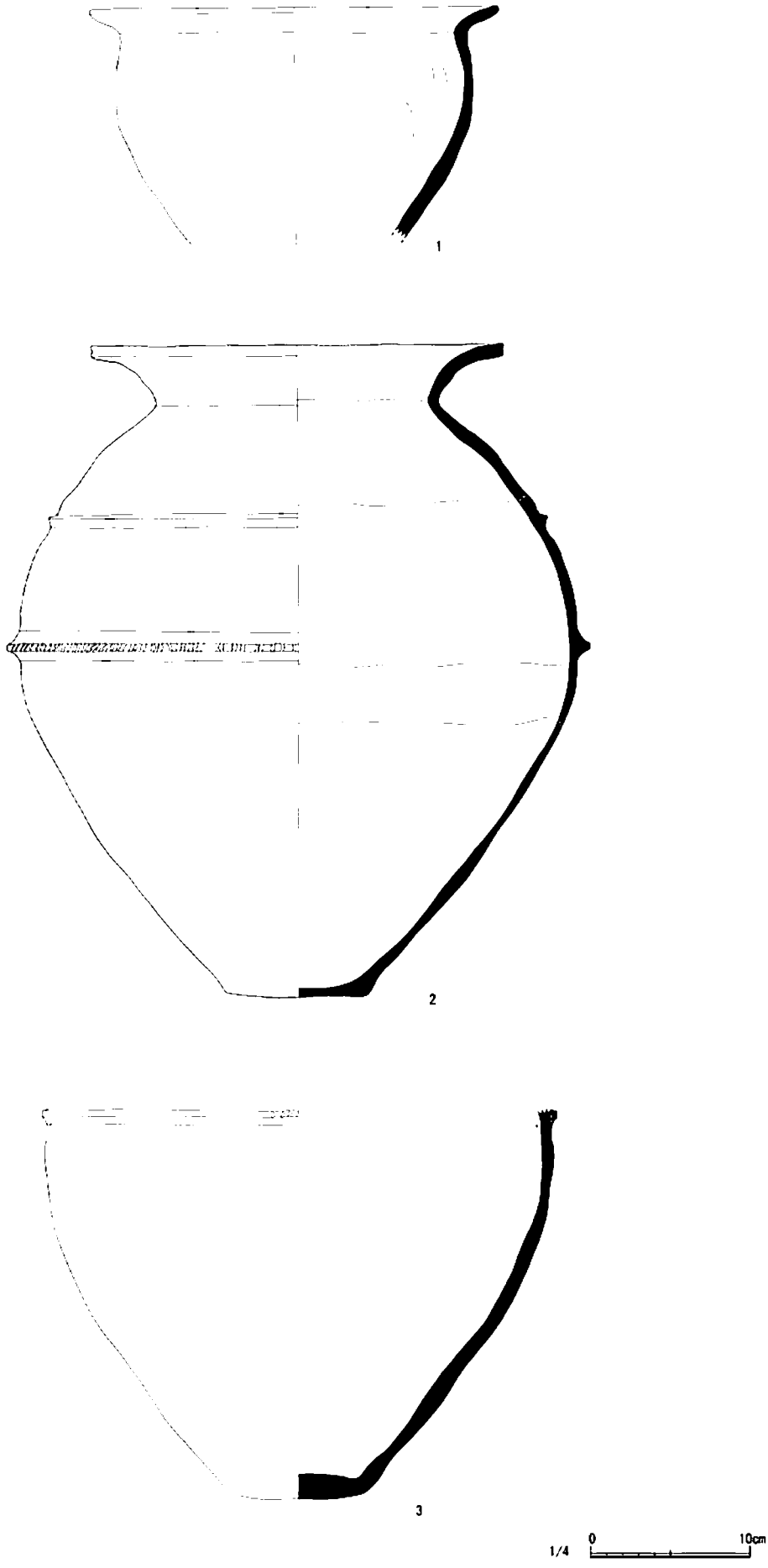


Fig.38　北島遺跡群 1 区墓 ST001（1.2）・ST002（3）出土遺物実測図

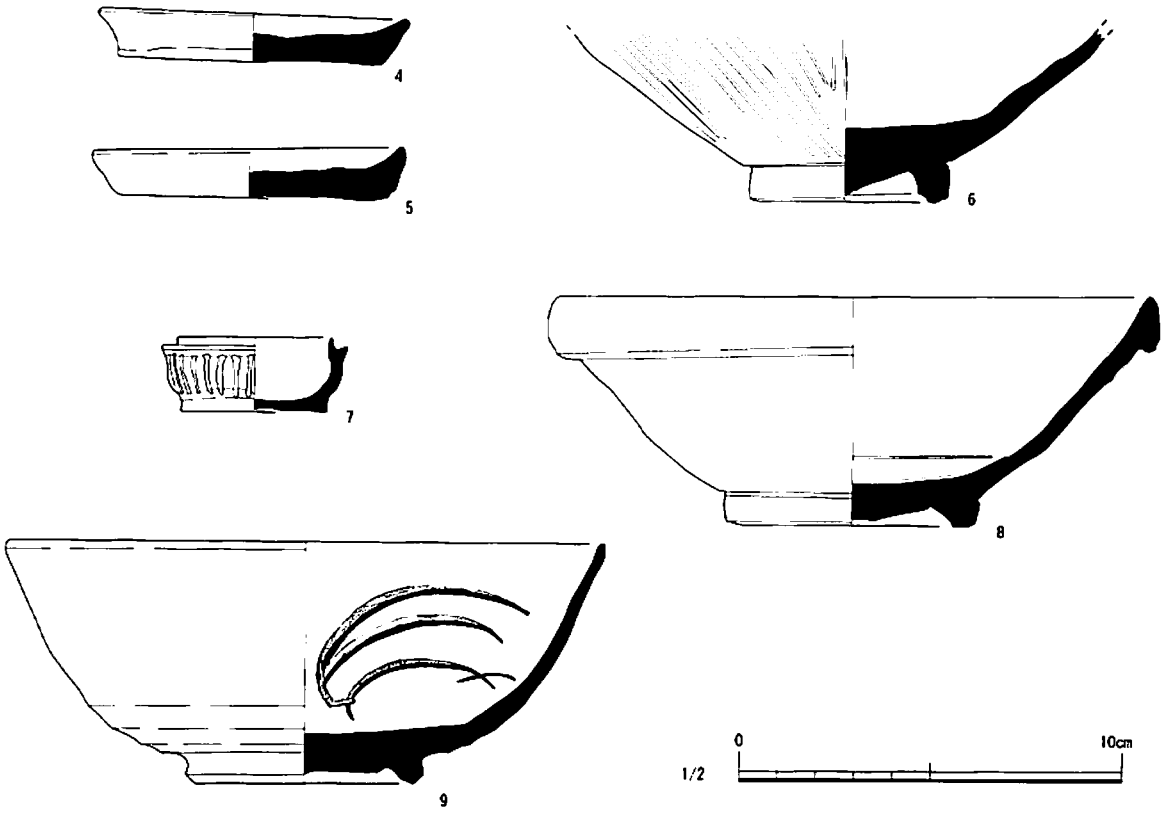


Fig.39　北島遺跡群２区溝 SD001（4.6）・土坑 SK001（7.8）調査区内（5.9）出土遺物実測図

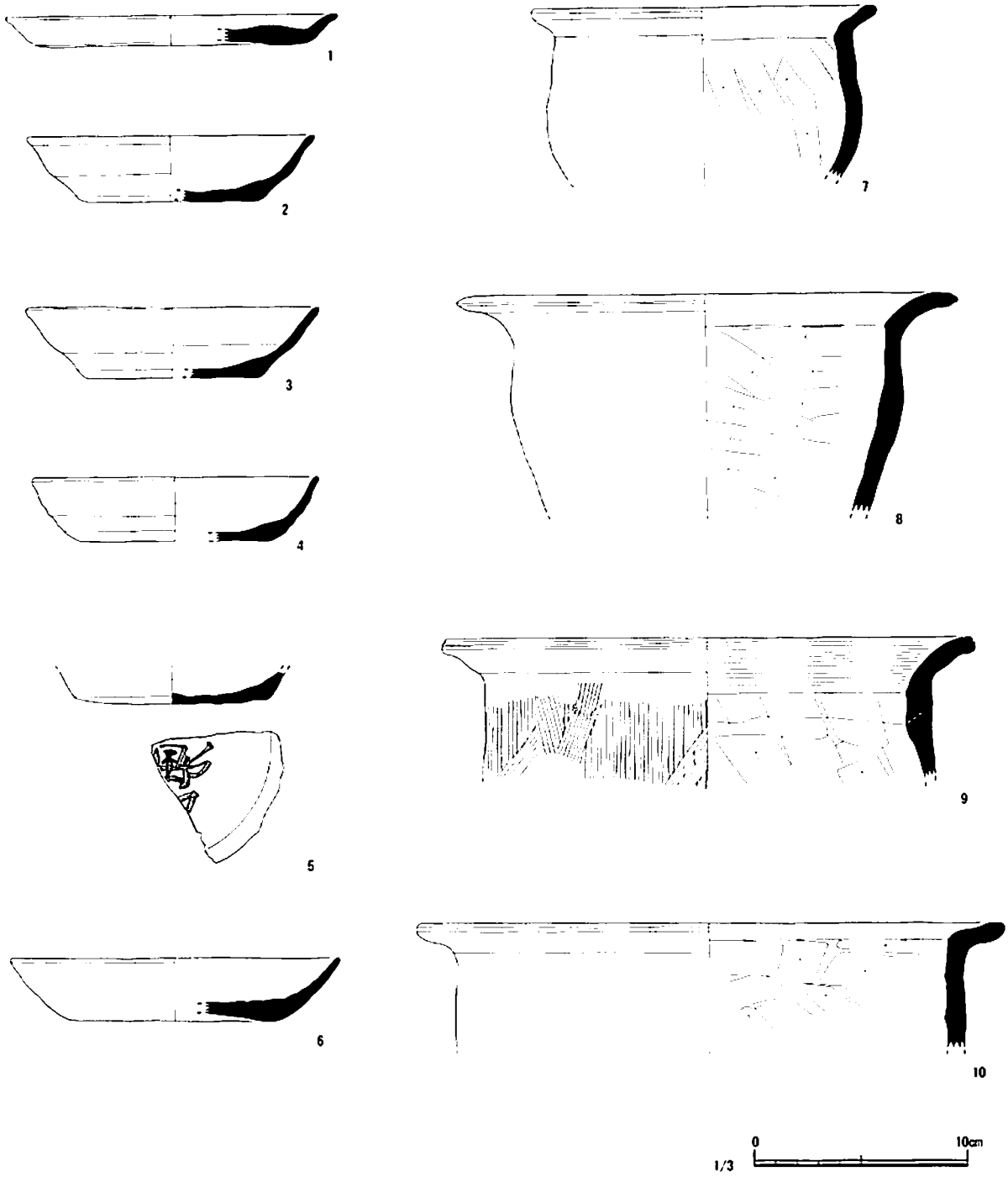


Fig.40　万楽寺出口遺跡竪穴建物 SI003（1.2）・SI004（4 ～ 9）・SI005（3）・SI007（10）出土遺物実測図

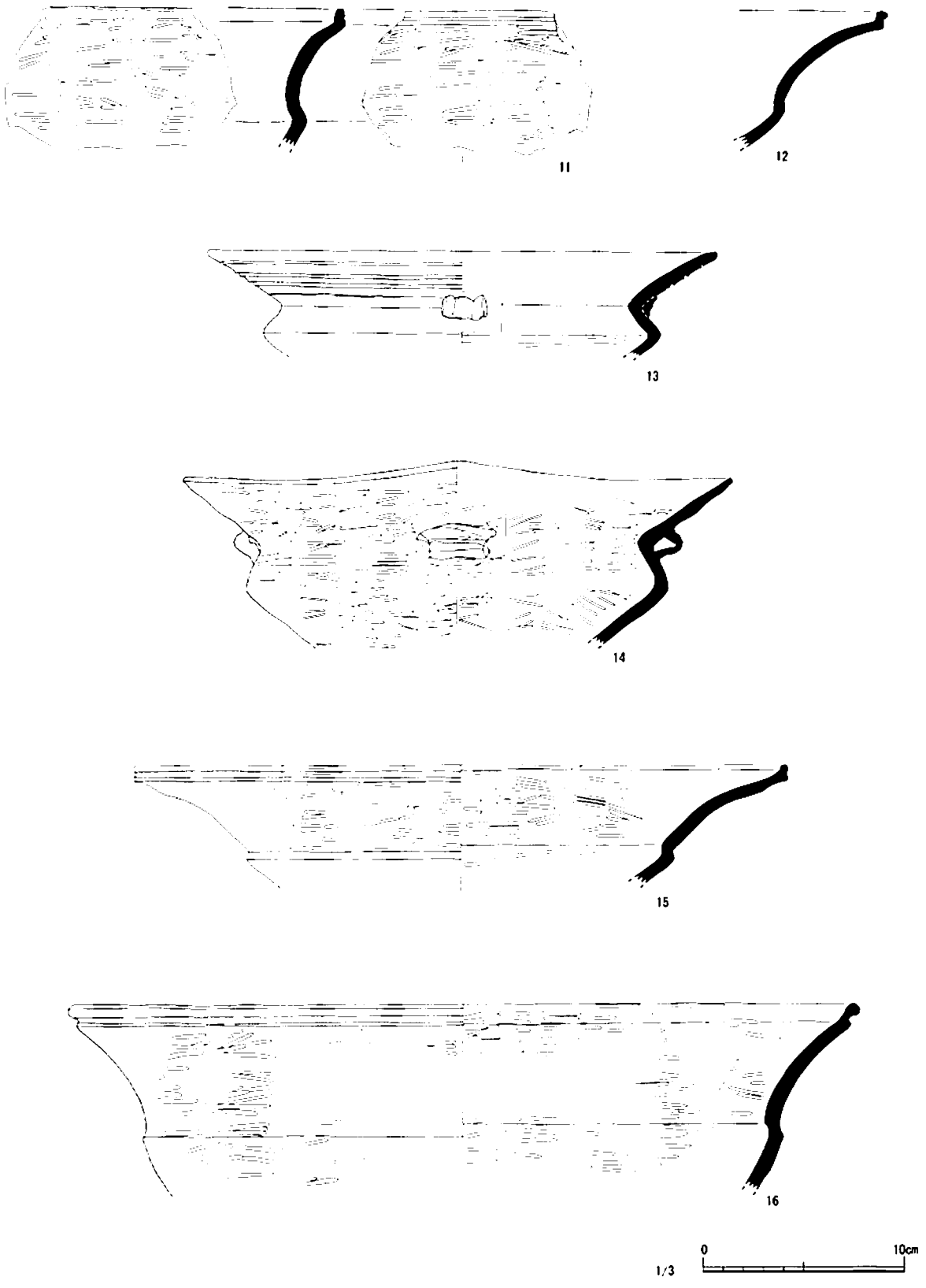


Fig.41　万楽寺出口遺跡調査区出土遺物実測図－①

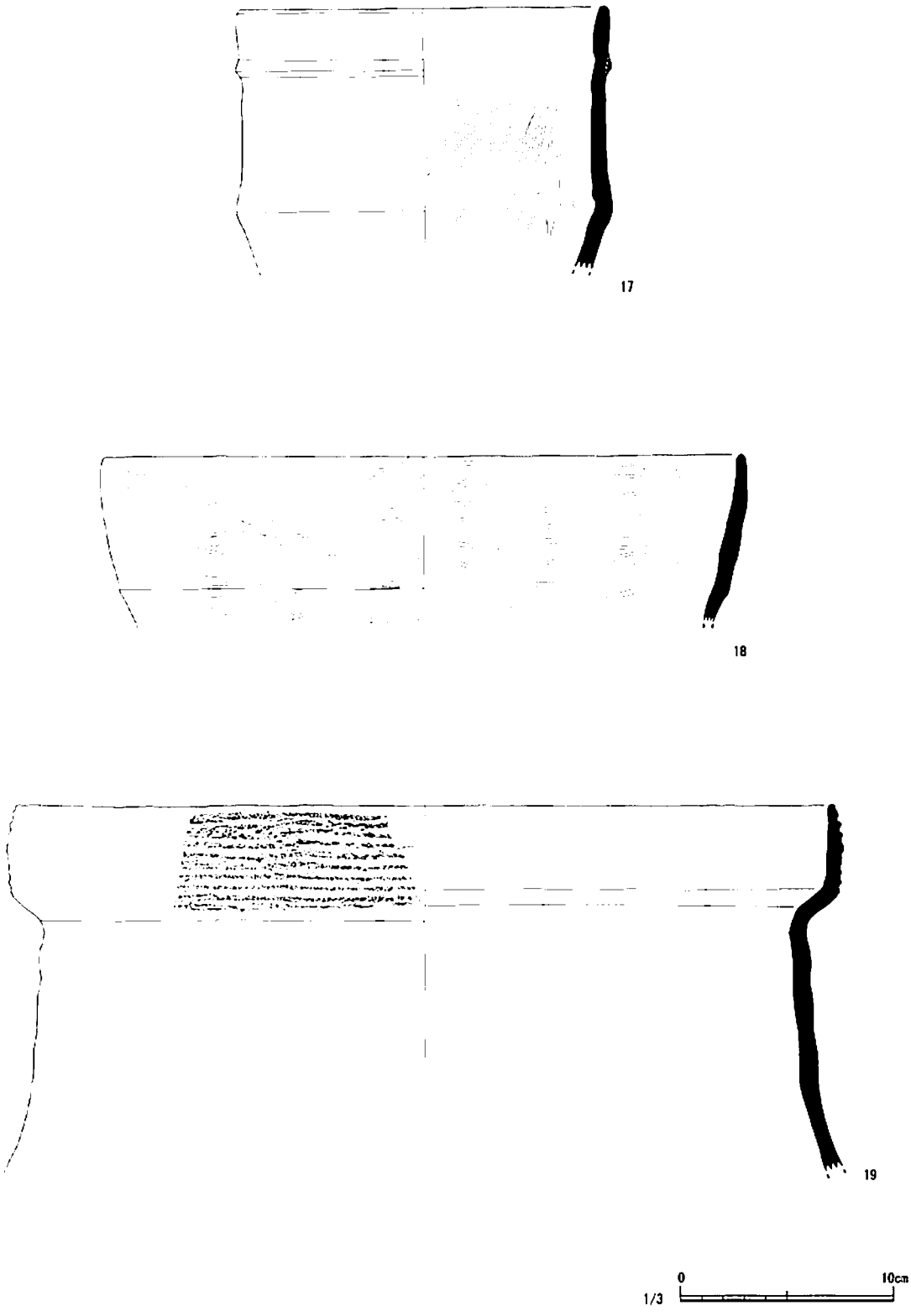


Fig.42　万楽寺山口遺跡調査区出土遺物実測図－②

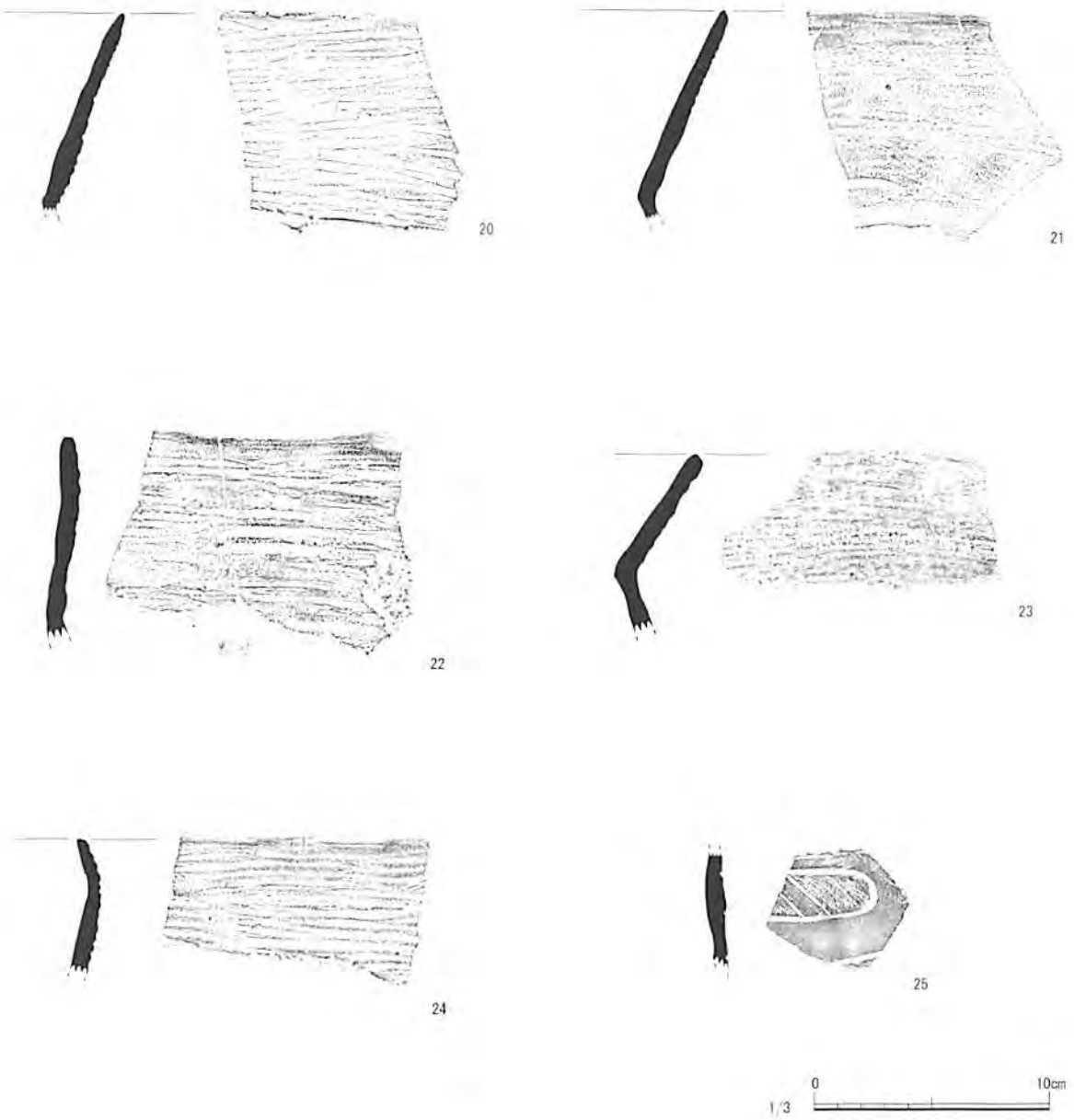


Fig.43　万楽寺出口遺跡調査区出土遺物実測図－③

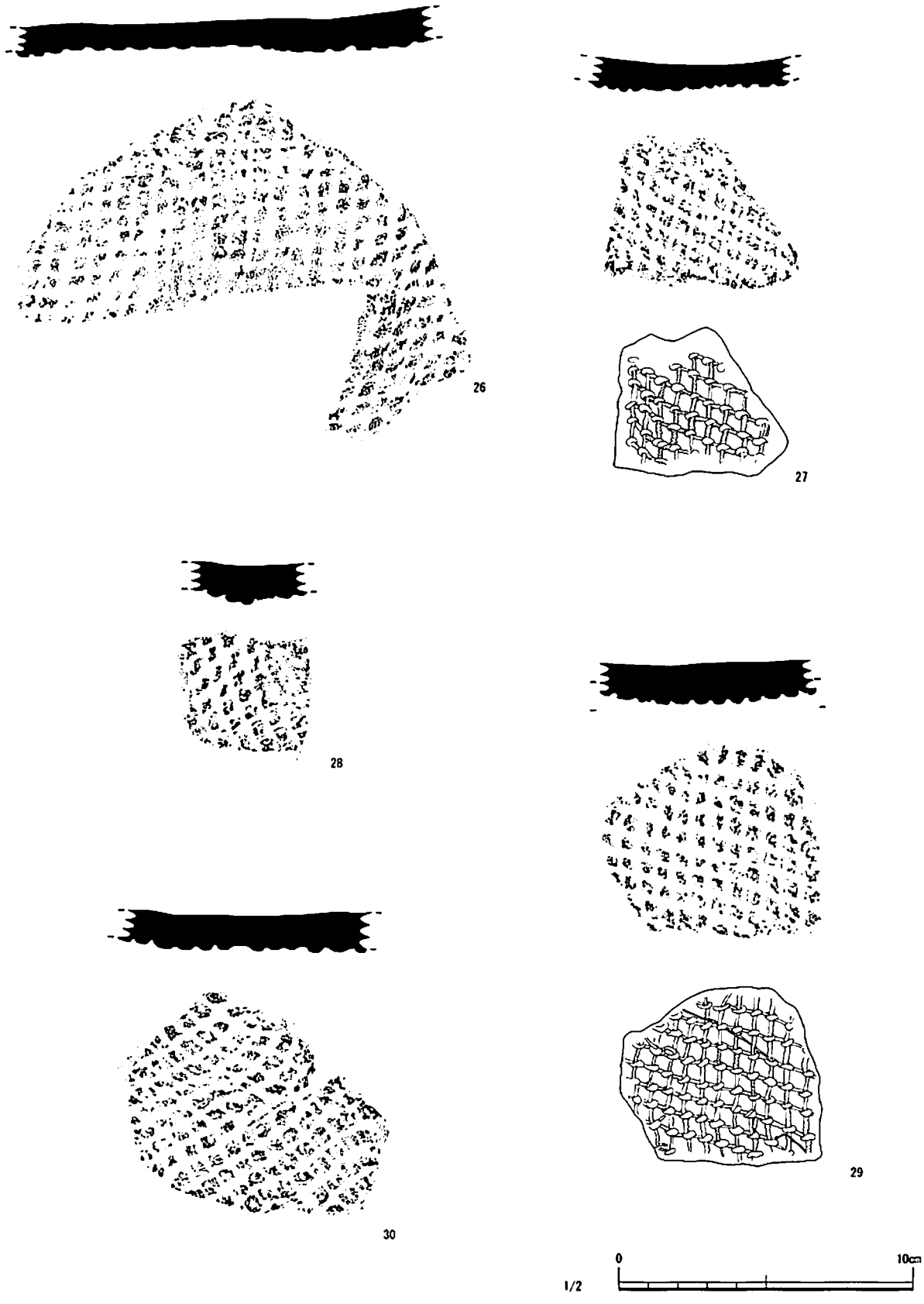


Fig.44　万楽寺出口遺跡調査区出土遺物実測図－④

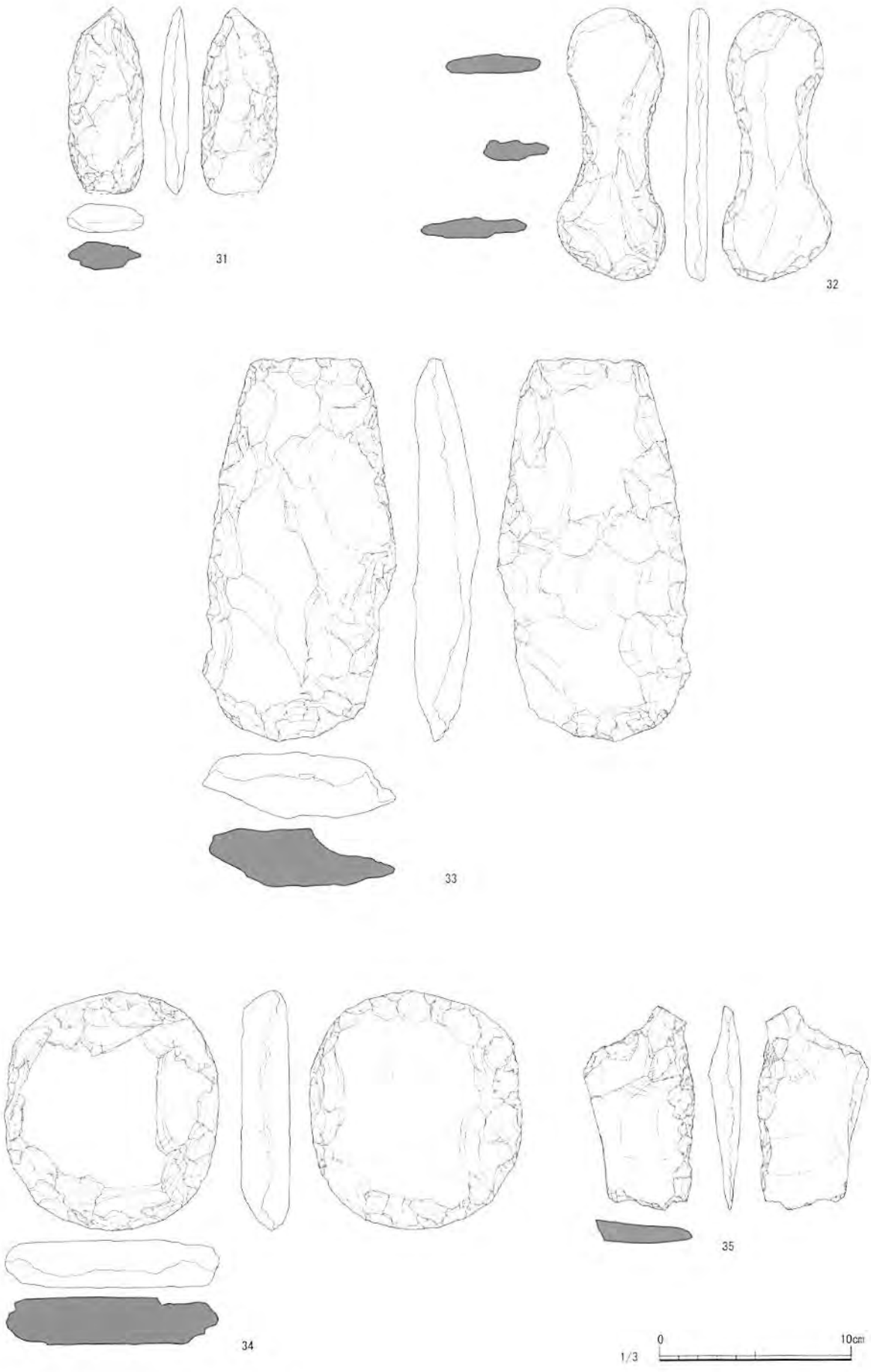


Fig.45　万楽寺出口遺跡調査区出土遺物実測図（石製品）－①

Fig.46　万楽寺出口遺跡調査区出土遺物実測図（石製品）－②

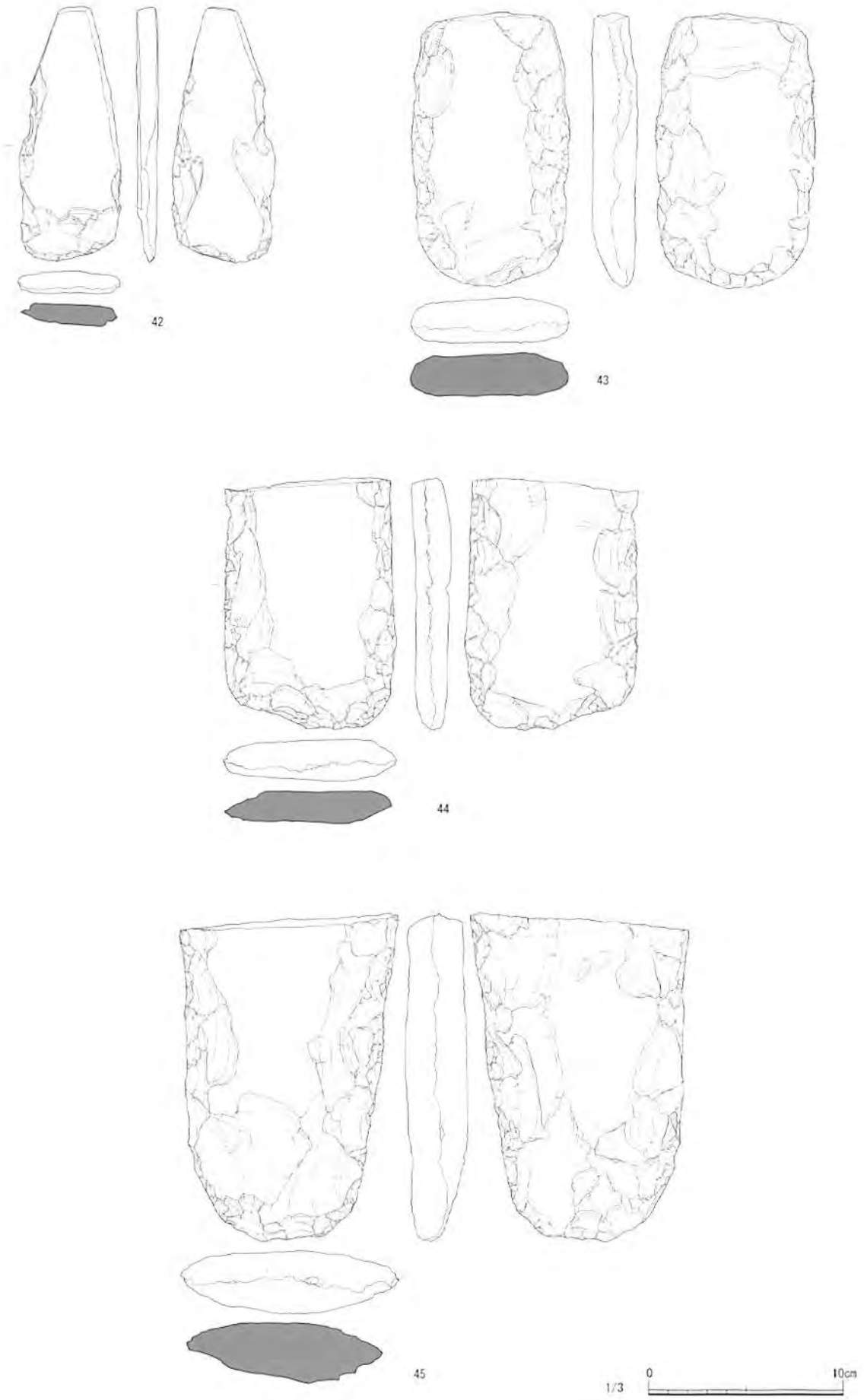


Fig.47　万楽寺出口遺跡調査区出土遺物実測図（石製品）－③

Tab.5 花岡山・万日山遺跡群出土遺物観察表

遺物番号	Fig. No.	PL. No.	区	種別	器種	法量（cm）				色調		胎土
						口径	底径	最大胴径	残存高	外面	内面	
1	34	11	1	土師器	小皿	6.2	4.0	—	1.0	橙 5YR7/6	橙 5YR6/7	長石、雲母、赤色酸化粒
2			1	土師器	小皿	5.9	4.9	—	1.0	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR6/7	長石、雲母、赤色酸化粒
3			1	土師器	小皿	7.4	4.9	—	1.5	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石、角閃石、雲母 赤色酸化粒
4			4	土師器	高台付皿	13.8	(7.0)	—	3.3	浅黄橙 7.5YR8/4	橙 7.5YR7/6	石英、長石、角閃石 赤色酸化粒、雲母
5			1	瓦質土器	火鉢	18.3	17.2	24.5	21.4	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	長石、雲母

Tab.6 新馬借遺跡出土遺物観察表

遺物番号	Fig. No.	PL. No.	種別	器種	法量（cm）				色調		胎土
					口径	底径	最大胴径	残存高	外面	内面	
1	35	12	土師器	灯明皿	5.8	4.4	—	1.0	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石、赤色酸化粒
2			土師器	灯明皿	6.2	4.4	—	0.9	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石、雲母、赤色酸化粒
3			土師器	灯明皿	6.4	4.3	—	1.1	橙 5YR7/6	橙 5YR6/6	長石、赤色酸化粒 砂粒、雲母
4			土師器	灯明皿	6.0	4.1	—	0.9	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	砂粒、赤色酸化粒、雲母
5			土師器	灯明皿	6.1	4.0	—	1.1	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石、赤色酸化粒、雲母
6			土師器	灯明皿	5.7	4.1	—	1.2	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	砂粒、赤色酸化粒、雲母
7			土師器	灯明皿	6.3	4.0	—	1.3	橙 7.5YR7/6	橙 5YR6/8	雲母、赤色酸化粒
8		13	土師器	小皿	5.9	4.2	—	1.2	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	雲母、赤色酸化粒、長石
9		12	土師器	灯明皿	6.2	4.0	—	1.2	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石、雲母、赤色酸化粒
10			土師器	灯明皿	6.1	3.9	—	1.2	灰褐 7.5YR5/2	灰黄褐 10YR6/2	雲母
11			土師器	灯明皿	6.3	3.8	—	1.4	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 5YR6/6	長石、雲母、赤色酸化粒
12			土師器	小皿	6.0	3.9	—	1.3	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	長石、赤色酸化粒
13			土師器	灯明皿	6.0	4.0	—	1.4	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	赤色酸化粒、雲母
14	36		土師器	灯明皿	7.8	5.5	—	1.4	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	長石、角閃石、雲母
15			土師器	灯明皿	(8.2)	(5.5)	—	1.0	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR6/6	石英、赤色酸化粒
16			土師器	灯明皿	8.2	6.3	—	1.1	橙 5YR7/8	橙 5YR7/6	砂粒
17		13	土師器	灯明皿	8.3	4.8	—	1.4	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	石英、雲母
18		12	土師器	灯明皿	7.8	4.3	—	1.6	浅黄橙 7.5YR8/4	黒 10YR2/1	雲母
19		13	土師器	灯明皿	8.3	4.7	—	1.9	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	長石、石英、雲母 赤色酸化粒
20		12	土師器	灯明皿	8.1	4.8	—	2.3	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	赤色酸化粒、小石、角閃石
21	37		土師器	灯明皿	3.6	3.8	—	1.8	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	赤色酸化粒
22			土師器	灯明皿	3.8	3.8	—	1.9	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	石英、長石、赤色酸化粒
23			土師質	焼塩壺	5.2	3.8	—	7.7	橙 5YR6/8	橙 2.5YR6/8	石英、長石、雲母
24			土師質	焼塩壺	5.6	4.4	—	8.0	橙 5YR6/8	橙 2.5YR6/8	石英、長石、雲母
25		13	陶磁器	皿	14.9	9.0	—	4.1	C-293 瓦の鼠茶	C-293 瓦の鼠茶	C-294 相思鳥の灰色
26			瓦質土器	火鉢	15.7	14.9	—	17.6	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい橙 7.5YR7/3	長石、雲母

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ	口縁部に油煙付着	1
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ	口縁部に油煙付着	2
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ	口縁部に油煙付着	3
摩滅の為調整不明	摩滅の為調整不明	横ナデ	摩滅の為調整不明	高台外面に赤彩の痕跡	4
横ナデ	横ナデ	横ナデナデ	横ナデ後ナデナデ	脚3ヶ。内部は2重、外面の文様に一部赤彩の痕あり。内底面にスス付着	5

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ	口縁端部に一部スス付着	1
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ後ナデ	口縁端部に一部スス付着	2
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ後ナデ	口縁端部に一部スス付着	3
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ	口縁端部に一部スス付着	4
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ	口縁端部に一部スス付着	5
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ後ナデ	外底面に墨書。口縁にスス付着	6
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ	口縁端部に一部スス付着	7
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ		8
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ後ナデ	口縁端部に一部スス付着	9
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ後ナデ	口縁端部に一部スス付着	10
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ後ナデ	口縁端部に一部スス付着	11
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ後ナデ		12
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ後ナデ	口縁端部に一部スス付着	13
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ	口縁端部に一部スス付着	14
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ	口縁端部に一部スス付着	15
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ	口縁端部に一部スス付着	16
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ	口縁端部に一部スス付着	17
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ後ナデ	口縁端部に一部スス付着	18
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ	口縁端部に一部スス付着	19
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ	口縁端部に一部スス付着	20
横ナデ	ナデ、横ナデ	糸切り	ナデ、横ナデ		21
横ナデ	ナデ、横ナデ	糸切り	ナデ、横ナデ	内底面一部スス付着	22
ナデ、面取り後ナデ	ナデ、指ナデ型成形による布目痕	ナデ、面取り後ナデ	ナデ、指ナデ型成形による布目痕		23
ナデ、面取り後ナデ	ナデ型成形による布目痕	ナデ、面取り後ナデ	ナデ型成形による布目痕		24
回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	回転ヘラ削り後施釉	回転ナデ後施釉	ケズリ出し高台。見込みに梅花文を施す。見込みの文様の釉　花（C163 貝の白）、枝（C129 焦茶色）	25
ナデ	ナデ、横ナデ	ナデ	ナデ	足部3ヶ所。8面体にそれぞれ菊花、流水、木目のスタンプを施す	26

Tab.7 北島遺跡群出土遺物観察表

遺物番号	Fig. No	PL. No	区	遺構番号	種別	器種	法量（cm）				色調		胎土
							口径	底径	最大胴径	残存高	外面	内面	
1	38		1	ST001	弥生土器	甕	(25.9)	—	—	14.4	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	石英、長石 雲母、赤色酸化粒
2		14	1	ST001	弥生土器	甕棺	(26.2)	9.1	(36.7)	40.6	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	石英、長石、 赤色酸化粒
3			1	ST002	弥生土器	甕棺	—	8.8	(32.4)	24.5	橙 7.5YR6/6	明黄褐 10YR7/6	石英、赤色酸化粒 角閃石、雲母
4	39	14	2	SD001	土師器	小皿	8.2	6.9	—	1.4	明赤褐 5YR5/8	明赤褐 5YR5/8	赤色酸化粒、角閃石、 雲母
5			2		土師器	小皿	8.3	7.0	—	1.3	浅黄橙 7.5YR8/4	橙 5YR6/8	赤色酸化粒、雲母
6			2	SD001	青磁	椀	—	5.1	—	4.6	C135 中棕灰	C135 中棕灰	—
7			2	SK001	青白磁	合子	4.0	3.8	—	1.9	淡灰緑	鉛灰色	—
8			2	SK001	白磁	椀	15.8	6.5	—	6.0	C164 立徳粉	C165 立徳粉	—
9					青磁	椀	(15.9)	(6.2)	—	6.3	C135 中棕灰	C135 中棕灰	—

Tab.8 万楽寺出口遺跡出土遺物観察表

遺物番号	Fig. No	PL. No	遺構番号	種別	器種	法量（cm）				色調		胎土
						口径	底径	最大胴径	残存高	外面	内面	
1	40	17	SI003	土師器	皿	—	(15.6)	(12.7)	2.0	橙 5YR7/6	橙 5YR6/6	長石、雲母、赤色酸化粒
2			SI003	土師器	杯	—	(13.5)	(8.2)	3.1	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石、雲母、赤色酸化粒
3			SI005	土師器	杯	—	(13.8)	(8.0)	3.3	橙 7.5YR7/6	橙 5YR7/8	長石、雲母
4			SI004	土師器	杯	—	(13.5)	(9.0)	3.0	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	長石、角閃石、雲母
5			SI004	土師器	杯	—	—	(9.2)	1.5	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石、角閃石、雲母
6			SI004	土師器	杯	—	(15.5)	(9.8)	3.0	にぶい橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/6	長石、雲母、赤色酸化粒
7			SI004	土師器	甕	—	(16.2)	—	8.0	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	長石、石英 角閃石、赤色酸化粒
8			SI004	土師器	鉢	—	(23.6)	—	10.1	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	長石、石英 角閃石、雲母
9			SI004	土師器	甕	—	(25.2)	—	6.3	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石、石英 角閃石、雲母
10			SI007	土師器	甕	—	(27.8)	—	5.8	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒
11	41	—	D-6	縄文土器	深鉢	4 層上	—	—	6.8	灰黄 2.5Y6/2	黒 5Y2/1	長石、角閃石、雲母
12		—	D-5	縄文土器	浅鉢	4 層上	(11.6)	-	6.8	黒褐 7.5YR3/2	黒褐 2.5YR3/1	長石、石英 角閃石、雲母
13		17	D-5	縄文土器	浅鉢	4 層上	(25.6)	-	5.2	にぶい褐 7.5YR5/4	明赤褐 5YR5/6	長石、石英 角閃石、雲母
14			D-5	縄文土器	浅鉢	4 層上	(2.7)	—	9.1	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4	長石、石英 角閃石、雲母
15		—	C-6	縄文土器	浅鉢	4 層上	(32.8)	—	5.9	浅黄 2.5YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	長石、角閃石、雲母
16		—	D-5	縄文土器	浅鉢	4 層上	(39.6)	—	9.4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石、角閃石、雲母
17	42	—	D-7	縄文土器	深鉢	3b 層	(17.4)	-	12.2	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	石英、長石 角閃石、雲母
18		—	C-6	縄文土器	深鉢	4 層上	(32.0)	-	7.8	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄 2.5YR7/4	長石、角閃石、雲母
19		—	F-6	縄文土器	深鉢	4a 層	(38.6)	-	17.1	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒
20	43	17	E-4	縄文土器	深鉢	4 層上	-	-	10.5	にぶい黄褐 10YR5/4	橙 7.5YR6/6	長石、角閃石、雲母
21		—	E-5	縄文土器	深鉢	4b 層	-	-	9.0	褐 7.5YR4/6	明褐 7.5YR5/8	石英、角閃石、雲母
22		—	-	縄文土器	深鉢	4 層上	-	-	8.6	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	石英、長石、角閃石
23		—	C-6	縄文土器	深鉢	4 層上	—	—	7.7	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	長石、石英 角閃石、雲母
24		—	D-5	縄文土器	深鉢	4 層上	-	-	5.7	黄褐 10YR5/6	にぶい黄橙 10YR6/4	長石、角閃石、雲母
25		—	E-5	縄文土器	深鉢	4 層上	-	-	5.1	にぶい黄 2.5Y6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	長石、角閃石 雲母、赤色酸化粒

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
摩滅の為調整不明	ハケ目	ー	ー	上膩に転用。 外面の肩部に黒斑。全体が摩滅している	1
ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外面胴部～外底面にかけて黒斑	2
摩滅の為調整不明	摩滅の為調整不明	ナデ	摩滅の為調整不明	外底面に黒斑	3
横ナデ	ナデ	糸切り	ナデ		4
ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		5
施釉、下位は露胎	施釉	回転ヘラ削り	施釉	外面に極目文 ケズリ出し高台	6
横ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外面型押しで菊花弁を象る。内外面に施釉	7
施釉、下位は露胎	施釉	回転ヘラ削り	施釉	口縁は玉縁。ケズリ出し高台	8
施釉	施釉	施釉	施釉	内面にヘラ描き。ケズリ出し高台	9

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内面に赤彩の痕跡	1
ナデ	ナデ	ヘラ切り	ナデ	内面は赤彩。外面はわずかに赤彩の痕跡	2
ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内、外面口縁端部スス付着	3
横ナデ 回転ヘラ削り	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内、外面赤彩	4
ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	内、外面赤彩。外底面に墨書	6
ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		5
横ナデ、ナデ	横ナデ、ヘラ削り	ー	ー	内面口縁にスス付着	7
横ナデ、ナデ	横ナデ、ヘラ削り	ー	ー		8
ハケ目後ナデ ハケ目	ハケ目、ヘラ削り	ー	ー	内面に粘土紐痕	9
ナデ	ナデ、ヘラ削り	ー	ー		10
ヘラミガキ	ヘラミガキ	ー	ー		11
ヘラミガキ	ヘラミガキ	ー	ー		12
ヘラミガキ	ヘラミガキ	ー	ー	外面口縁に沈線４条のうち下の１条はナデ消してある 頸部に線ネクタイ状（突起）文有り	13
ヘラミガキ	ヘラミガキ	ー	ー	頸部リボン状装飾有り	14
ヘラミガキ	ヘラミガキ	ー	ー		15
ヘラミガキ	ヘラミガキ	ー	ー	外面にスス付着	16
ナデ	ナデ後ヘラミガキ	ー	ー	外面に炭化物付着。内、外面スス付着	17
ヘラミガキ	ヘラミガキ	ー	ー	外面スス付着	18
条痕後ミガキ ナデ後ミガキ	ナデ	ー	ー	外面口縁帯に沈線９条。内、外面にスス付着	19
貝殻条痕	ナデ	ー	ー		20
貝殻条痕、ナデ	ナデ	ー	ー		21
貝殻条痕	ミガキ、ナデ	ー	ー		22
貝殻条痕後ナデ 貝殻条痕、ナデ	ナデ、ヘラ削り	ー	ー		23
貝殻条痕	ナデ	ー	ー	内、外面スス付着	24
ミガキ、貝殻押擦紋	ミガキ	ー	ー	アナダラ属の貝殻の殻頂部を押し付けたものか	25

遺物番号	Fig. No.	PL. No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）				色調		胎土
						口径	底径	最大胴径	残存高	外面	内面	
26	44	17	D-5	縄文土器	大型浅鉢	-	-	-	1.5	にぶい黄褐 10YR7/4	にぶい褐 7.5YR5/4	長石、角閃石、雲母
27			E-7	縄文土器	大型浅鉢	4 層上	-	-	1.2	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/4	長石、角閃石、雲母
28			E-6	縄文土器	大型浅鉢	3b 層	-	-	1.4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい褐 7.5YR5/4	長石、角閃石、雲母
29			E-6	縄文土器	大型浅鉢	4 層上	-	-	1.5	橙 7.5YR6/6	にぶい褐 7.5YR5/4	長石、角閃石、雲母
30			E-6	縄文土器	大型浅鉢	4 層上	-	-	1.4	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/4	石英、長石 角閃石、雲母

Tab.9 万楽寺出口遺跡出土遺物観察表（石製品）

遺物番号	Fig. No.	PL. No.	遺構番号	種別	器種	注記	法量（cm）				石材	備考
							全長（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
31	45	18	E-5	打製石器	石斧	4 層	9.7	4	1.5	67.9	凝灰岩	先端刃部欠損
32			—	打製石器	石斧	4 層	14.3	5.7	1.2	128.4	片岩	双頭石斧
33			D-6	打製石器	石斧	4 層	20.1	10.2	3.6	750	凝灰岩	
34			F-7	打製石器	円形石斧	—	12.6	11.3	2.6	960	凝灰岩	
35			D-5	打製石器		5 層	10.7	5.8	1.7	85.6	安山岩	
36	46		D-5	磨製石器	石斧	5 層	12.8	6.6	2.9	360	チャート	先端部欠損
37			F-5	磨製石器	石斧	5 層	18.8	7.2	1.5	300	凝灰岩	側縁部一部欠損
38			C-5	磨製石器	磨石	5 層	5.5	7.1	4.2	250	砂岩	1/2 程度残存
39			C-6	磨製石器	磨石	5 層	12.6	7.8	4.6	490	砂岩	1/2 程度残存
40			C-6	磨製石器	敲石	5 層	5.3	5.1	2.7	107.5	安山岩	
41			SB001	—	石杵	—	9	2.5	1.8	63	安山岩	先端及び側縁にベンガラ付着
42	47		D-6	打製石器	石斧	5 層	13.2	5.3	1.3	105.6		
43			F-5	打製石器	石斧	5 層	14.2	8.3	2.4	440		基部欠損
44			D-6	打製石器	石斧	5 層	13.0	9.0	2.1	350		基部欠損
45			D-6	打製石器	石斧	5 層	16.9	11.4	3.3	810		基部欠損

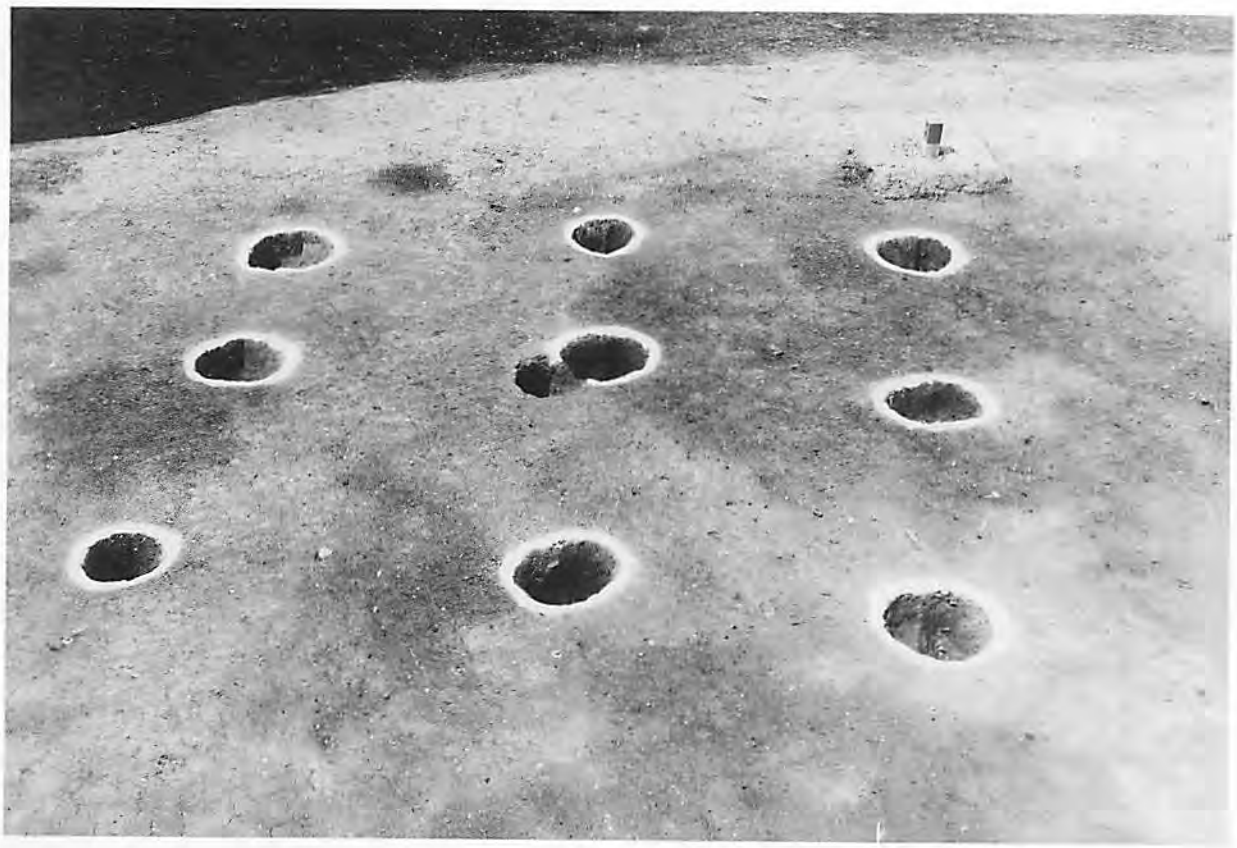
調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
組織痕（網の圧痕）	ミガキ	－	－	組織痕土器、縄文晩期、型取り法、糸撚り	26
組織痕（網の圧痕）	ミガキ	－	－	組織痕土器、縄文晩期、型取り法、糸撚り	27
組織痕（網の圧痕）	ミガキ	－	－	組織痕土器、縄文晩期、型取り法、糸撚り	28
組織痕（網の圧痕）	ミガキ	－	－	組織痕土器、縄文晩期、型取り法、糸撚り	29
組織痕（網の圧痕）	ミガキ	－	－	組織痕土器、縄文晩期、型取り法、糸撚り	30

写真図版

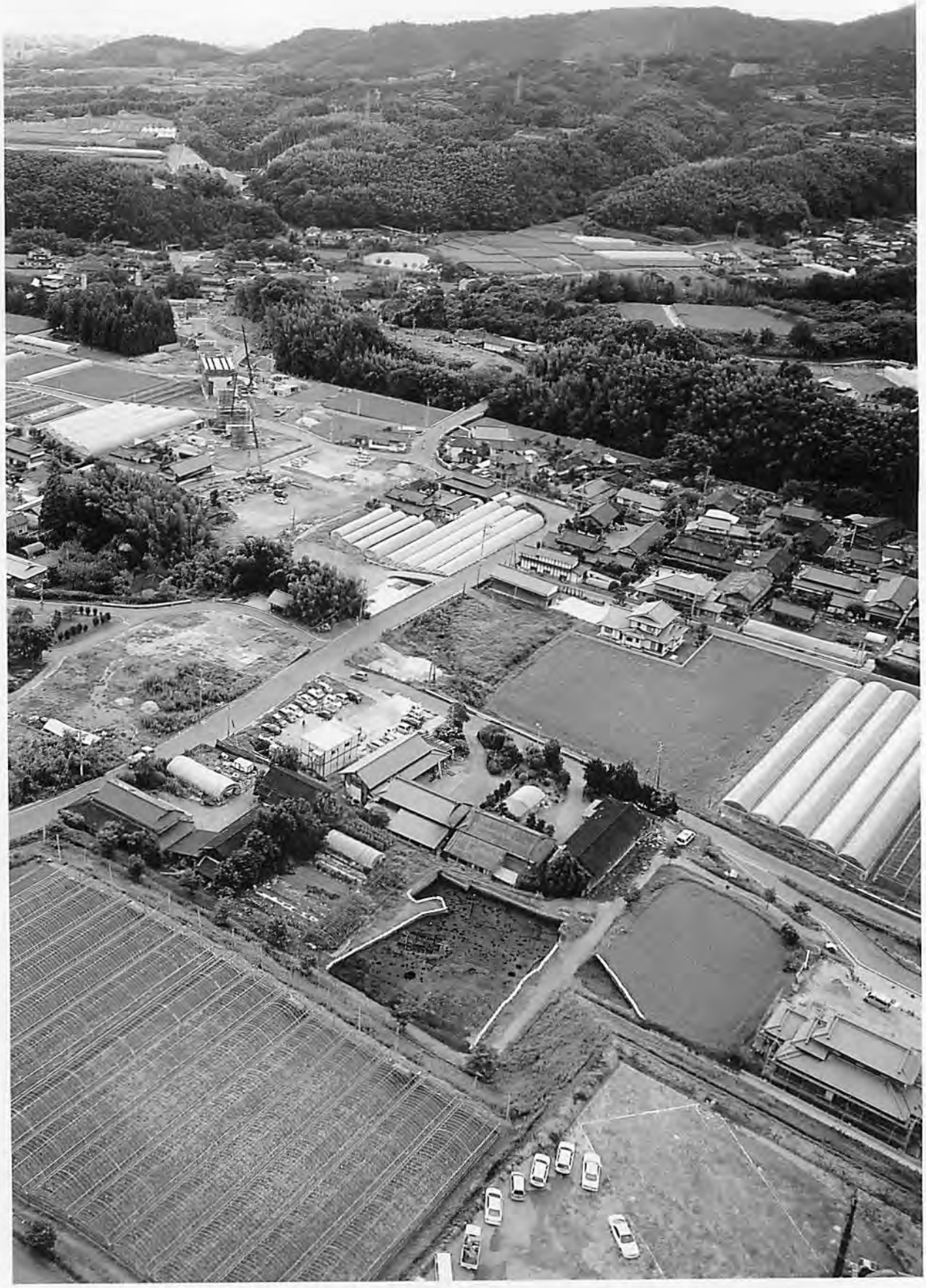
1. 花岡山・万日山遺跡群 1 区完掘状況
2. 花岡山・万日山遺跡群 6 区完掘状況

PL.7

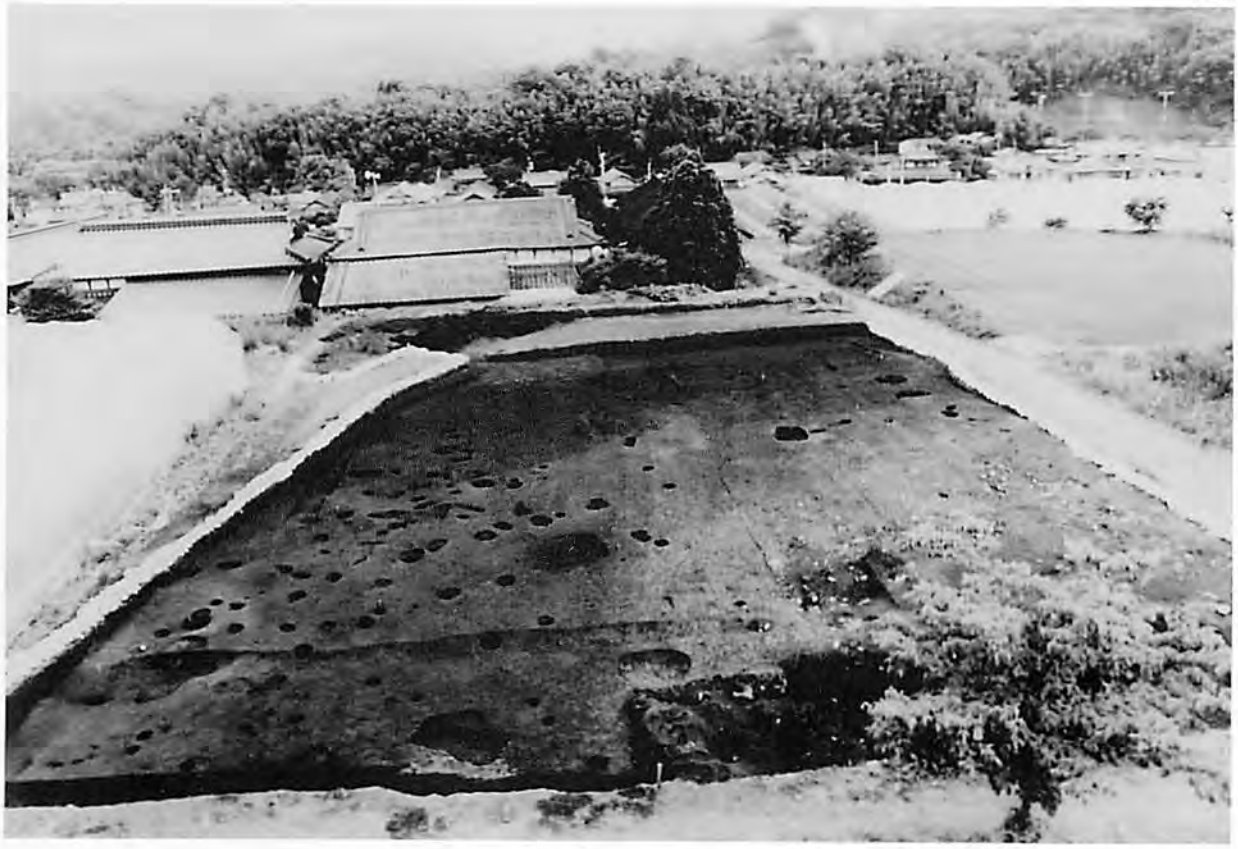
北島遺跡群より井芹川、植木台地方面を望む（南より）

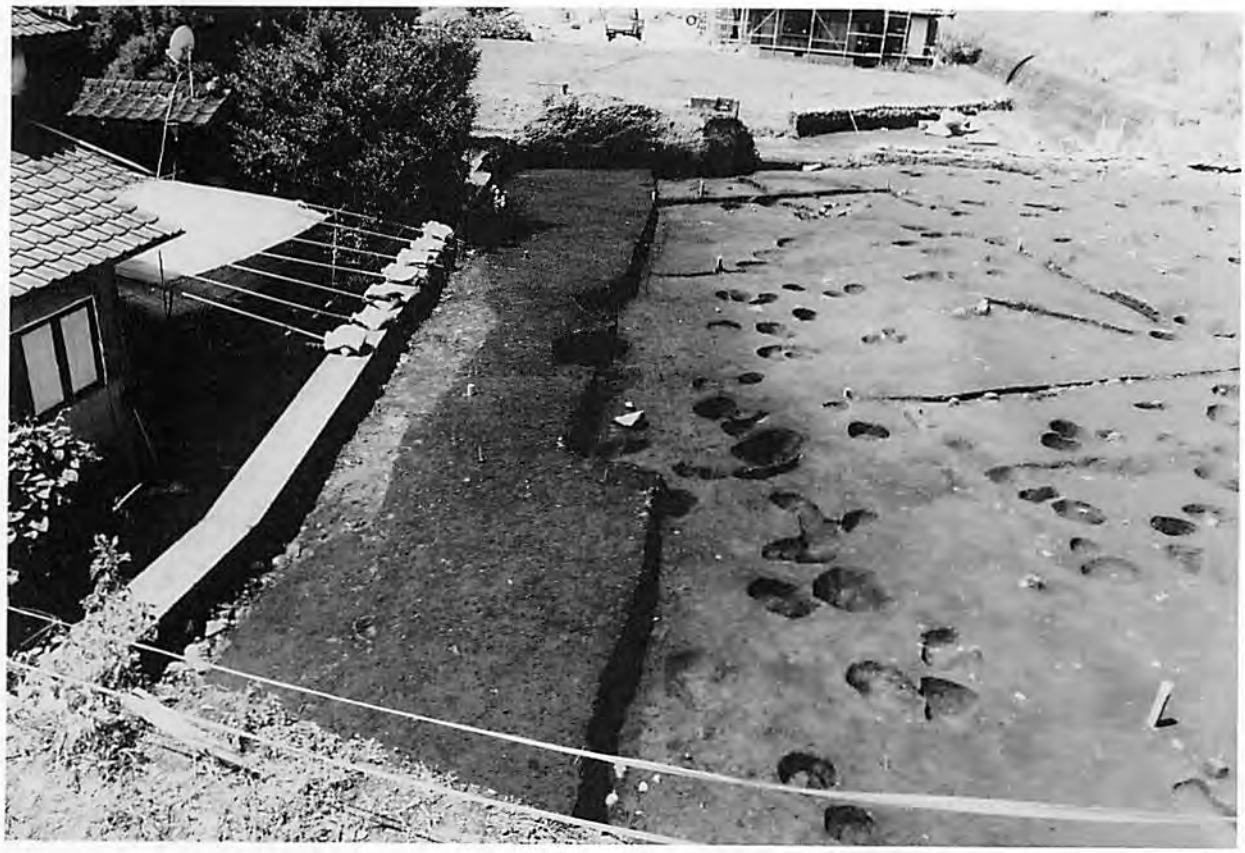


1. 北島遺跡群 1 区中世面完掘状況
2. 北島遺跡群 1 区 掘立柱建物 SB001 完掘状況



万楽寺出口遺跡より西谷川、金峰山東麓丘陵を望む（北より）





1. 万楽寺出口遺跡調査区全景（北より）
2. 万楽寺出口遺跡調査区全景（東より）

花岡山・万日山遺跡群調査区出土遺物

新馬借遺跡調査区出土遺物―①

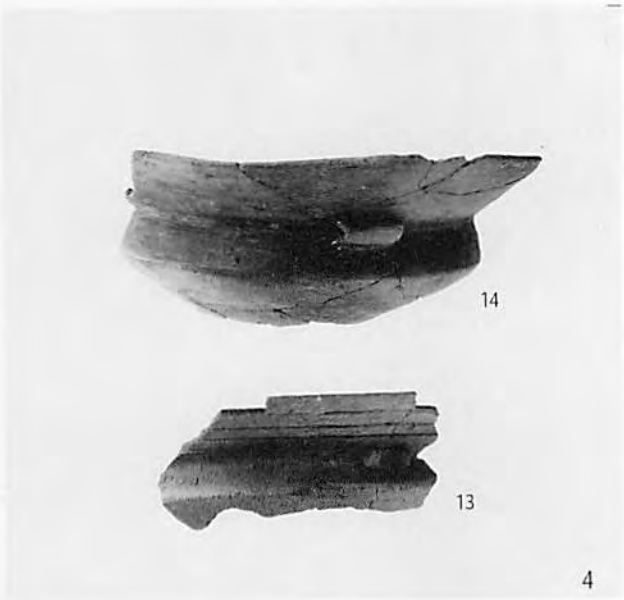
PL.13

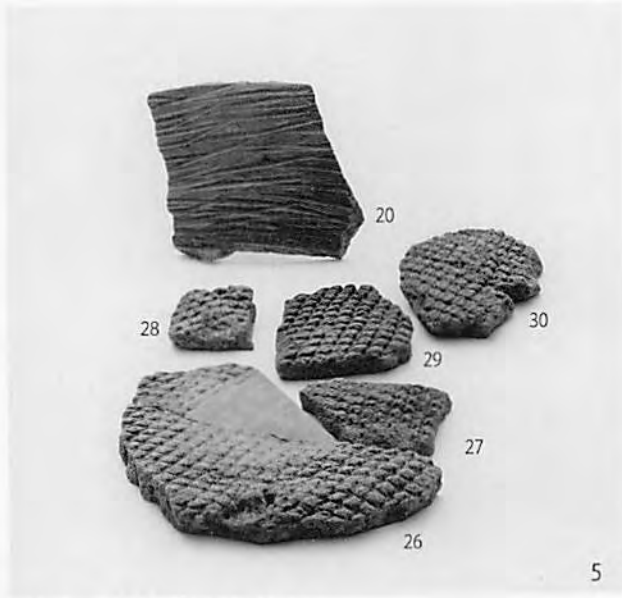
新馬借遺跡調査区出土遺物 ―②

北島遺跡群１区・２区出土遺物

小塚トンネル熊本駅側抗口試掘調査時出土遺物（表）

小塚トンネル熊本駅側抗口試掘調査時出土遺物（裏）





1. 2. 3 . 万楽寺出口遺跡竪穴建物 SI003 ～ SI005・SI007 出土遺物
4.5. 万楽寺出口遺跡調査区出土遺物

万楽寺出口遺跡調査区出土遺物（石製品）

報告書抄録

ふりがな	はなおかやま・まんにちやまいせきぐん　しんぼしゃくいせき　きたじまいせきぐん　まんらくじでぐちいせき
書名	花岡山・万日山遺跡群　新馬借遺跡　北島遺跡群　万楽寺出口遺跡
副書名	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第266集
編著者名	長谷部善一（編集・執筆）　坂口圭太郎　今村和徳　尾方圭子（以上、調査）
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8609　熊本市水前寺6丁目18番1号 ℡ 096-333-2706
発行年月日	2011年（平成23年）3月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
花岡山・万日山遺跡群	熊本市横手2丁目213-1他27筆、1183-21他8筆、1187-3	43 熊本県 201 熊本市	190	32°47'28.33489" (日本測地形)	130°41'40.8054" (日本測地形)	H17.1.21～H17.3.31 H17.5.10～H17.7.31 H18.7.12～H18.8.31	2406.53㎡ 727.01㎡ 130.00㎡	九州新幹線建設工事
新馬借遺跡	熊本市横手一丁目1142番地他6筆		249	32°47'47.34434" (日本測地形)	130°41'47.27774" (日本測地形)	H18.5.30～H18.6.30 H20.1.4～H20.1.31	550㎡ 48.83㎡	
北島遺跡群	熊本市池田四丁目519他3筆、628他7筆		221	32°49'37.25301" (日本測地形)	130°41'49.40363" (日本測地形)	H18.6.15～H18.11.30 H18.10.23～H19.2.28	1,650㎡ 1,800㎡	
万楽寺出口遺跡	熊本市太郎迫町474-2他2筆		403	32°51'32.67324" (日本測地形)	130°40'43.42165" (日本測地形)	H19.5.1～H19.10.30	964.52㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
花岡山・万日山遺跡群	散布地	近世、近代	溝、土坑	火鉢、土師器（灯明皿）	無
新馬借遺跡	散布地	近世、近代	土坑、柱穴	高田焼（皿）、塩壺、火鉢 土師器（灯明皿）	無
北島遺跡群	散布地	弥生後期、古代、中世	竪穴建物、掘立柱建物、土坑、柱穴、溝、甕棺墓	小型甕棺、白磁玉縁椀、青磁（龍泉窯系）ほか	無
万楽寺出口遺跡	散布地	縄文晩期、古代	竪穴建物、掘立柱建物、土坑、柱穴、溝、道路	縄文後期・晩期土器、石器、須恵器、土師器	無

要約

【花岡山・万日山遺跡群】1～6区まで設定したが、遺構を検出できたのは1区、6区のみである。1区では南北に延びる溝を確認したが、用途等は不明。6区では道路遺構を確認し、新馬借遺跡方面へと延びる道路遺構の一部を確認。背後の妙解寺へ折れる支線の一部と見られるコーナー部も確認。

【新馬借遺跡】近世熊本城の西門にあたる高麗門近くに位置する。調査区内は大多数が近世以降の攪乱であり、遺構の認定が難しい。道路遺構を確認し、二本木から島崎に向往還の一部とみられ、花岡山方面へ折れる支線部を確認した。

【北島遺跡群】最上段に当たる1区で最も多くの遺構を確認した。本調査区は、弥生後期、古代の竪穴建物、掘立柱建物が検出された。4層上面で検出した掘立柱建物、溝等は時期が不明ながら、中世北島城に伴う遺構の可能性もある。本遺跡の北側水田面で予備調査を実施した際に、木簡が2点出土しているが、井芹川流路にあたり現位置を保ってはいない。

【万楽寺出口遺跡】本遺跡の県での発掘調査は、1994年以降2回目。太郎迫集落に近く、西谷川へ落ちる緩斜面上での調査であった。調査区からは縄文晩期の円形竪穴建物を1棟、古代竈付き竪穴建物を5棟検出。大量に出土している縄文晩期土器は、上段に広がる太郎迫遺跡からの流れ込みと見られる。南北に延び検出した道路状遺構は年代等は不明。

熊本県文化財調査報告第 266 集
花岡山・万日山遺跡群
新馬借遺跡　北島遺跡群　万楽寺出口遺跡

2011 年（平成 23 年）3 月 31 日
著作権所有者・発行者　熊本県教育委員会
〒 862-9609　熊本市水前寺 6 丁目 18 番 1 号
http://www.pref.kumamoto.jp/
敬島印刷株式会社

22教委　教文
② 008

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 266 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：花岡山・万日山遺跡群 新馬借遺跡 北島遺跡群 万楽寺出口遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日